

2017年度 講義要項

政治学演習
経済学演習
国際政治経済学演習
学際領域演習
ジャーナリズム・メディア演習

政治経済学部

政治学演習Ⅰ

整理番号	科目名	副題
101	政治学演習Ⅰ(縣公一郎)	公共政策研究
102	政治学演習Ⅰ(浅野豊美)	近代日本とアジア・「西洋」—ナショナリズム理論と国際関係学
103	政治学演習Ⅰ(稲継裕昭)	行政の諸活動を分析する
104	政治学演習Ⅰ(梅森直之)	近代日本の政治思想
105	政治学演習Ⅰ(川岸令和)	日本国憲法の現在
106	政治学演習Ⅰ(栗崎周平)	国際政治の理論研究・実証研究 Scientific Study of International Relations
107	政治学演習Ⅰ(河野勝)	現代日本政治の諸問題
108	政治学演習Ⅰ(小原隆治)	自治・分権を考える
109	政治学演習Ⅰ(笹田栄司)	現代の司法
110	政治学演習Ⅰ(佐藤正志)	西洋政治思想研究
111	政治学演習Ⅰ(田中愛治)	現代政治学の実証分析・計量分析 Empirical/ Quantitative Analysis of Political Science
112	政治学演習Ⅰ(田中孝彦)	Global History としての冷戦史研究—反核運動の歴史的展開
113	政治学演習Ⅰ(谷藤悦史)	世論・政治コミュニケーション研究
114	政治学演習Ⅰ(中村英俊)	国際政治の理論と現実—英国学派を中心に
115	政治学演習Ⅰ(仲内英三)	近代西欧政治社会の歴史
116	政治学演習Ⅰ(福田耕治)	国際行政と国際公共政策—EUとUNを中心として—
117	政治学演習Ⅰ(藤井浩司)	比較公共政策への接近
118	政治学演習Ⅰ(眞柄秀子)	世界各国の比較政治経済分析
119	政治学演習Ⅰ(谷澤正嗣)	現代リベラリズムとその批判
120	政治学演習Ⅰ(吉野孝)	現代デモクラシーの政治過程
121	政治学演習Ⅰ(坪井善明)	東南アジアの政治と社会

経済学演習Ⅰ

整理番号	科目名	副題
201	経済学演習Ⅰ(荒木一法)	企業と家計の行動分析(応用ミクロ経済学)
202	経済学演習Ⅰ(有村俊秀)	環境経済学
203	経済学演習Ⅰ(上田貴子)	経済データ解析
204	経済学演習Ⅰ(上田晃三)	日本の経済・物価情勢の判断と見通し
205	経済学演習Ⅰ(荻沼隆)	不完全情報とゲームの理論を中心としたミクロ経済学
206	経済学演習Ⅰ(笠松学)	経済成長と所得分配
207	経済学演習Ⅰ(川口浩)	日本経済の歴史的展開とその思想
208	経済学演習Ⅰ(近藤康之)	貿易、環境、経済効果の計量分析
209	経済学演習Ⅰ(西郷浩)	RIによる統計分析
210	経済学演習Ⅰ(笹倉和幸)	マクロ経済学の歴史的・理論的研究
211	経済学演習Ⅰ(鎮目雅人)	世界の中における日本経済の歴史
212	経済学演習Ⅰ(白木三秀)	労働・人的資源に関する国際比較研究
213	経済学演習Ⅰ(永田良)	経済理論のパラダイム再考(Ⅰ)
214	経済学演習Ⅰ(中村慎一郎)	産業エコロジー Industrial Ecology
215	経済学演習Ⅰ(野口和也)	経済分析と統計的方法
216	経済学演習Ⅰ(馬場義久)	日本の財政—課題と改革
217	経済学演習Ⅰ(船木由喜彦)	ゲーム理論と実験経済学
218	経済学演習Ⅰ(堀内俊洋)	産業組織論と経済学
219	経済学演習Ⅰ(村上由紀子)	仕事と働く人に関する研究
220	経済学演習Ⅰ(本野英一)	家族構造から見たユーラシア大陸文明の構造
221	経済学演習Ⅰ(山本竜市)	ファイナンス

国際政治経済学演習Ⅰ

整理番号	科目名	副題
301	国際政治経済学演習Ⅰ(金子守)	経済学・ゲーム理論の初歩と応用
302		
303	国際政治経済学演習Ⅰ(久保慶一)	新興国の比較政治学—民主化・紛争・平和構築の実証分析—
304	国際政治経済学演習Ⅰ(久米郁男)	政治経済現象分析の技法
305	国際政治経済学演習Ⅰ(齋藤純一)	近現代の政治理論
306	国際政治経済学演習Ⅰ(清水和巳)	人間と社会の政治経済学
307	国際政治経済学演習Ⅰ(須賀晃一)	公共政策の政治経済学—公共性の実現に向けて
308	国際政治経済学演習Ⅰ(唐亮)	現代中国の政治経済と外交戦略
309	国際政治経済学演習Ⅰ(遠矢浩規)	知的財産(技術と文化)の国際政治経済分析
310	国際政治経済学演習Ⅰ(戸堂康之)	開発途上国・新興国・日本の経済発展
311	国際政治経済学演習Ⅰ(都丸潤子)	ヒトの国際移動の文化的・歴史的分析
312	国際政治経済学演習Ⅰ(深川由起子)	現代東アジア政治経済研究: グローバリゼーションと新興国の経済発展
313	国際政治経済学演習Ⅰ(山崎真次)	ラテンアメリカ地域研究

学際領域演習Ⅰ

整理番号	科目名	副題
401	学際領域演習Ⅰ(岡山茂)	フランスの政治と文学(1885-1945)
402	学際領域演習Ⅰ(荻野静男)	オペラ/音楽劇研究の現在—オペラ/音楽劇とヨーロッパ文化史
403	学際領域演習Ⅰ(室井植之)	コミュニケーションとことば
404	学際領域演習Ⅰ(ロベスアルフレド)	西洋文学論

ジャーナリズム・メディア演習Ⅰ

整理番号	科目名	副題
501	ジャーナリズム・メディア演習Ⅰ(齊藤泰治)	ジャーナリズムの視点からの中国研究Ⅰ
502	ジャーナリズム・メディア演習Ⅰ(瀬川至朗)	ジャーナリズム研究と調査報道・ルポルタージュの実践
503	ジャーナリズム・メディア演習Ⅰ(ソジェ内田恵美)	政治言語学—ディスコース分析の理論と実践
504	ジャーナリズム・メディア演習Ⅰ(高橋恭子)	ジャーナリズムの現在と未来—映像ジャーナリズムを中心に
505	ジャーナリズム・メディア演習Ⅰ(田中幹人)	ソーシャル・メディア時代の「科学的」ジャーナリズム
506	ジャーナリズム・メディア演習Ⅰ(中村理)	内容分析を中心に用いたメディア・メッセージの実証研究

政治学演習Ⅰ

2017

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
101	政治学演習Ⅰ（縣公一郎）	春学期	3年以上：2単位	縣 公一郎
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副題 Subtitle

公共政策研究

授業概要 Course Outline

今日の社会生活で、政府活動の影響はあらゆる分野に及んでおり、私たちは政府活動との関連なくして一刻も生活を営めない、と言って過言でないだろう。従って、社会的諸関係構築のための戦略、計画、プログラム、個々の意思決定、具体的活動としての公共政策を通じて、政府が、なぜ如何なる行為を如何にして社会にもたらしめているのかという点は、現代社会において問うべき重要な課題だろう。

本演習は、かかる政府活動の分析で基礎となる手法の学修と、その応用を目指すものである。

3年次春学期は、公共政策関連の内外文献を用いた報告や他大学との合同ゼミに向けた共同研究で基礎学修を進めつつ、各人の個別テーマ確定に努める。

3年次秋学期以降は、設定された個別テーマに関する研究と報告を経て、最終的にゼミナール論文を作成する。各人が研究対象とする国ないし地域（例えば、首都圏、日本、ドイツ、EU等）と、採り上げる政策領域（例えば、情報通信、通商産業、学術教育、国土、医療、農業、環境、交通、都市、労働等）もしくは政府・行政機構を、ある程度明確に設定しておいて頂きたい。その際、国際的枠組（例えば、ドイツの情報通信政策ならEU、日本の通商産業政策ならばWTOや対米関係）を十分に意識してほしい。原則として3年と4年は別々の会合を持つが、相互に交流を図るため、火曜日Ⅳ限とⅤ限をゼミナールの共通時間として確保して頂きたい。

なお、ゼミナール選考に際して提出される研究計画書の最後の部分において、提出時点で設定された各人テーマに関して今後参照したい参考文献を、5冊明示されたい。

また、プレ演習では、Course N@vi上にて、ゼミナール論文構想構築に向けて、レポートの提出を求めたい。詳細は、適時お知らせする。

授業の到達目標 Objectives

各人のゼミナール論文完成。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

第1回：ガイダンス

第2回－第15回：学生による報告・討論

教科書 Textbooks

追って指示がある。

参考文献
Reference Books

追って指示がある。

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	%	
平常点評価 Class Participation	%	
その他 Others	100%	日常的討論と完成されたゼミナール論文に基づいて、総合的に判断する。

備考・関連URL
Note・URL

政治学演習Ⅰ

2017

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
102	政治学演習Ⅰ（浅野豊美）	春学期	3年以上：2単位	浅野 豊美
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副題 Subtitle

近代日本とアジア・「西洋」ーナショナリズム理論と国際関係学

授業概要 Course Outline

「われわれ日本人」は、いつどのようにネーション（国民）として誕生し、今後どこへ向かうのであろうか。近代日本の国民国家としての起源・展開・未来を、ナショナリズム理論を基軸とする国際政治学、および、日本政治史・東アジア史・グローバルヒストリーを中心とする歴史学、この二つを車の両輪として考えることとしたい。

ナショナリズム理論については塩川の新書本を最初の糸口としながらも、ゲルナー、アンダーソン、アンソニースミスと比較しつつ読み込む。その上で、こうした西欧で生まれた理論を、東アジアの歴史と対照し止揚すべく、日本政治史・グローバルヒストリーの古典的著作をも読み込みながら併行して議論する。トンネルを両側から掘っていくイメージで、取り組んで欲しい。

「東アジア」を特徴付けるのは、集団的稲作文化と農村コミュニティ（そして漢字・儒教「文化」）であるが、西洋の衝撃を受けた「近代化」の位相は大きく異なっている。常に比較を意識しながらも、中核として近代日本の国民意識とそれを生み出した憲法制度や民主化・国際協調をめぐる政治史を、アジア・周辺地域との関係そして西欧・アメリカとの関係の中で議論していった欲しい。現在まで、日本政治史という言葉でイメージされてきたのは、政党政治の発展・挫折・復活を基軸とする民主化の流れと、「文明化」や交流・平和と結びつけられがちな国際協調の流れであった。その二つが結ぶついて近代日本の「明るい」側面が描かれ、そこからの脱線・転覆として、戦争の時代は描かれてきた。しかし残念ながら、それらは「戦後」という時代に作られた自画像ともいべき性格を免れない。現代の日本が激しい「歴史認識」をめぐる摩擦に直面していることは周知の事実である。

こうした伝統的歴史学的知見を、冒頭で述べたナショナリズムについての政治理論と対照させることで、悩み、比較しながら、鍛え深めるべく理論と歴史に学び、議論を深めることがゼミの柱となるであろう。今後の東アジア各国のナショナリズムの行方を、激しい国際関係の軋轢（安全保障問題と歴史認識問題に象徴される）と共にダイナミックなプロセスとして考え、その中でこれからの日本を考えていってほしい。歴史学を通じて、豊富な事例をくみ上げ、「他者」の感情や思想にも内面的に接近すると同時に、国際政治学とナショナリズム論を通じて、深い哲学的な見地から世界の他の地域との比較を常に意識しながら、新たな歴史とそれと結びついた思想・言説のあり方を考え、議論していった欲しい。

授業の到達目標 Objectives

最終的に目標とするのは、あたかもアメリカ大統領が自由や民主主義を語るとき、常にワシントンやリンカーン、独立戦争や南北戦争に言及するかのように、これからの時代の基調となるであろう人権・民主・自由という普遍的価値を、近代日本とその周辺地域・そして「西洋」との関係によって織りなされる豊富な歴史的体験と記憶によって支え、新たな言説と思想（「正義」ある「和解」とでも言い得るもの）をつむぎだすことである。時代を作る言説にこそ、様々な利益も究極的には収斂していくと信じたい（新たなタイプの政治家やジャーナリストをめざす人、歓迎）。

そうした言説と思想が周辺諸国の国民からも反発されることなく受け入れられるためには、より高い地域的次元、グローバルな次元を常に意識することが必要となる。グローバル化の時代といっても、国民という集団は、皆が生きている時代には消滅しないことがほぼ明らかとなった。日本人という運命を共有した「国民」という集団があってこそ、多数決による代表民主主義は機能するといわざるを得ないであろう。世界全人類を対象とする民主主義はやはり、遥かに遠い数千年単位の理想に過ぎない。農業革命、産業革命、情報化革命を見通す、数千年の流れの中で現代を考える力を鍛えることが、当面の喫緊の課題であろう。

集合的意志の主体となっている「国民」という集団の内部に向けて語り、そして周辺地域や世界の外の人々に向けて語り、説得し得る言説と思想の基盤を鍛えることが求められている。新たな時代の政治のあり方を、具体的な安全保障や経済をサブテーマとしつつも、それがいかに歴史的な背景やナショナリズムと絡んでいるのかを考察するのもOKである。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

塩川 伸明『民族とネーション—ナショナリズムという難問』(岩波新書、2008年)を読み、それに対して特に印象深かった点と自分自身の感想・コメントを中心に、400字*15-20枚程度のレポートを、できれば秋学期のプレゼミまでに準備してほしい。(プレゼミ開始前、最低限、自己が気に入った本のレポートを8枚程度用意すること)

日本政治史が春学期(2年生以上)に、グローバルヒストリーが秋学期(1年生以上)に開講されている。この二つを、少なくとも3年生までに、両方共に受講して欲しい。その中心的テーマは、結局の所、以下の三つといえる。

- ・(グローバルヒストリー) 西ヨーロッパ中心の世界はいかに生まれ、また、いかに今日、終焉を迎えようとしているのか。
- ・(日本政治史)「国民」「個人」「主権」に象徴される規範を、近代「日本」がいかに受容し日本社会が築かれてきたのか。
- ・(両方)「西洋の衝撃」と「日本の衝撃」を受けて、アジア諸国の近代は、いかに開始されたのか(植民地的近代の意味)。

日本政治史の個別のテーマとして、挙げられると思われるのが、以下の授業計画の個別のタイトルである。どれに力点を置いて、ゼミを進めるのかは、参加者の関心によるので、よく話し合って決めていきたい。

重要なのは、こうした今はやりのテーマに取り組むためには、精神的な「足腰」を鍛える必要があることである。それをしなければ、単なる事実の後追い、評論と独善に終わるであろう。そうならないためにも、ナショナリズム理論と、歴史に、じっくりと取り組んで欲しい。

足腰を鍛えながら、個別のテーマを3年生の後半からは意識して、4年生の段階では、ゼミレポートにまとめていって欲しい。2年の後半から、ナショナリズム理論を読みながら、適宜、授業の関連文献をも読む。参加者と話し合いながら、どこに焦点を当てるかを決める。

夏休みに合宿を行い、冬休みに慶応大学等とのゼミ交流を行う予定。

2017年度から本格始動するのでまだ誰も先輩がいない。我と思わん人は、是非、新しい伝統の担い手になるべく挑戦して欲しい。2018年度からは、3/4年合同のゼミを原則とする。2017年段階でも、ゼミは当然延長されるとおもって長めの時間を確保して欲しい、ゼミのあとに夕方の予定を入れないこと。

授業計画 Course Schedule

第1回：オリエンテーション ナショナリズム理論、歴史と理論との関係

ネーションの萌芽は、古代か近代か。古代史を学ぶ意義。冗談ではない「人類の起源」とナショナリズム

第2回：西欧におけるネーションの成立—古代・中世・近世

大西洋三角貿易—西欧における産業革命の起源、19世紀スクランブル・西洋の衝撃とアジア・アフリカの対応

第3回：近代国家の特質 幕藩体制と日本における国民国家成立

明治国家の建設—主権国家、条約改正と国民主権

第4回：明治の憲法体制とアジアの革命

議会政治の定着と政府・民党・民衆の三角関係、国内政治の展開とからみながら勃興してきた国民意識、「国民」の名前によって行われてきた政党政治

第5回：日清・日露戦争の国際的文脈と日本ナショナリズム

帝国の膨張—韓国併合と日本人植民者・帝國的民主主義韓国ナショナリズムと日本ナショナリズム—近代萌芽論

第6回：「大正デモクラシー」と三一独立運動

第一次大戦と大隈内閣・東西文明の調和理念、ワシントン体制と中国ナショナリズム

第7回：国際金融資本と帝国内の政治経済

アメリカ資本と技術の導入と中国をめぐる経済協力・中国の関税自主権承認

第8回：軍部の台頭、軍国主義・ファシズム・戦時体制をめぐる

ファシズム体制と戦時体制をめぐる論争、脱線・転覆・修復理論、労農派と講座派の論争

第9回：「満洲国」五族協和によるナショナリズムの「止揚」？戦後の遺産

帝国の崩壊—日中戦争・対英米戦争・「太平洋」戦争

第10回：敗戦・占領・引揚とアメリカナイゼーション—親米ナショナリズムの起源

現代国家の特質 日米特殊関係と戦後賠償問題、賠償と安全保障をめぐる占領下の政治

第11回：戦後日本の起源—朝鮮戦争・講和と55年体制

戦後日本の分岐点—鳩山・岸内閣と60年安保闘争

第12回：所得倍増と高度成長の中のナショナリズム

オリンピックと沖縄返還・万国博覧会、

第13回：現代日本の起源—アジア冷戦の終結と列島改造

田中角栄内閣の政治と日中国交正常化、尖閣問題、原子力と新産業都市、よみがえるナショナリズム

第14回：小さな政府への転換と現代の起源・中曽根内閣

世界的冷戦終結と国際貢献論、自衛隊のPKO参加問題、ふるさと創成

教科書
Textbooks

塩川 伸明『民族とネーション—ナショナリズムという難問』岩波新書、2008年。
アーネスト・ゲルナー、加藤節監訳『民族とナショナリズム』岩波書店、2000年。
ベネディクト・アンダーソン、白石隆・白石さや訳『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』（書籍工房早山、2007年）
A・D・スミス『ネーションとエスニシティ—歴史社会学的考察』名古屋大学出版会、1999年。
衛藤瀋吉『衛藤瀋吉著作集』東方書店、2004年。（どこをやるかは適宜指定する）
三谷太一郎『近代日本の戦争と政治（岩波人文書セレクション）』（岩波書店、2010）
酒井哲哉『近代日本の国際秩序論』（岩波書店、2007年）

参考文献
Reference Books

三谷太一郎『人は時代といかに向き合うか』東大出版会、2014年。
三谷太一郎『学問は現実といかに関わるか』東大出版会、2013年。
坂野潤治『日本近代史』ちくま新書、2012年。
宮城大蔵『「海洋国家」日本の戦後』ちくま新書、2008年。
三谷太一郎『近代日本の戦争と政治』岩波書店、2010年。
浅野豊美『戦後日本の賠償問題と東アジア地域再編—請求権と歴史認識問題の起源』慈学社、2013年。
浅野豊美『帝国日本の植民地法制』名古屋大学出版会、2008年。
小林道彦『政党内閣の崩壊と満州事変』ミネルヴァ書房、2010年。
吉野作造講義録研究会『吉野作造政治史講義——矢内原忠雄・赤松克麿・岡義武ノート』（岩波書店、2016年）

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	50%	最終レポート執筆以前に、予備的なレポートを少なくとも一回課す。
平常点評価 Class Participation	50%	演習への出席、授業態度、毎回の報告課題の達成度、議論への取り組みなどを総合的に評価する。 三回以上無断欠席したものは単位を取れない。
その他 Others	%	

備考・関連URL
Note・URL

講義に全く出たことがないヒトは以下の模擬講義が参考となる。<http://www.waseda.jp/taiken-waseda/academics/school/pse/>
以下が、自己紹介のHP。将来は、ゼミのためのHPを作成する予定。<http://www.f.waseda.jp/toasano/index.html>
歴史認識問題最前線の新聞・テレビの関係者を招待しゲスト講演をしていただきながら、歴史認識問題の深刻さを実感するイベントを開く。
慶応大学の日本政治史関連のゼミと、定期的な交流を行い、刺激しあう。共通の文献を取り入れる予定。

政治学演習Ⅰ

2017

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
103	政治学演習Ⅰ（稲継裕昭）	春学期	3年以上：2単位	稲継 裕昭
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副題 Subtitle

行政の諸活動を分析する

授業概要 Course Outline

行政の諸活動は私たちの生活に知らず知らずのうちに大きな影響を与えている。ある行政活動は、どのような構造のもとに、どのようなアクターが、どのように行動することによって行われているのか。基礎的なことを学ぶとともに、いくつかの行政課題およびその解決策を特定し、なぜそのような行動がとられたのかその原因を考える。

#中央省庁や地方自治体の幹部や若手職員をゲストスピーカーとして招く場合があります。

#中央省庁や地方自治体を訪れてヒアリングなどを行う場合があります。

参考：2015年度は1年間で次の省庁・自治体を訪問しました。

（5月霞ヶ関（警察庁、財務省）、8月霞ヶ関（内閣人事局、総務省（自治）、参議院）、9月熱海合宿（2泊3日：市役所、商工会議所、観光協会、NPOなどにヒアリング調査）、11月豊島区役所、12月東京都庁、2月岐阜県高山合宿（2泊3日：市役所、支所（旧町役場）、酒蔵、飛騨ミート、文化施設、浄水場などへ班にわかれてヒアリング調査）

2015年度は次のゲストを迎えました。（某省局長、熱海市前副市長、福井県総合政策部長）

2016年度7月までの現況（5月本庄市役所、5月霞ヶ関（人事院、総務省）、8月末合宿予定（3年生：長岡市役所、山古志支所ほか）、9月中旬合宿予定（4年生：奈良県川上村）

人事院訪問の様態→<https://www.facebook.com/jinjiin.saiyo/photos/a.990288541064206.1073741828.974439299315797/1080392555387137/?type=3&theater>

7月までのゲストスピーカー（本庄市企画財政部長、福岡市経済観光文化局創業・立地推進部長（前財政課長）、奈良県川上村村長ほか） 7月5日は福岡市の前財政課長に財政出前講座をしていただくとともに、一緒にSIMふくおか2030のシミュレーションゲームを行いました。

なお、2016年度は本庄市役所と提携をして、稲継ゼミ本庄プロジェクトを年間通じて進め、12月に本庄市において研究成果を報告会を行う予定です。

ゼミのキーワードは、「ゆるすぎずガチすぎず」「書を持って街へ出よう」です。理論と実践の統合を目指します。

授業の到達目標 Objectives

行政の諸活動を分析できるようにすること。論理的に考え書き発表する能力を養うこと。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

プレゼミで、『はじめて出会う政治学』『地方自治入門』を輪読するとともに、その報告の過程で、パワーポイントの作成の仕方、効果的なプレゼンの方法、論理的思考を身に付ける種々の取り組みを行います。

プレゼミは毎週火曜日の5時限を予定していますので、この時間には他の授業は入れないでください。また、この時間、サークル活動が重なる人もプレゼミを必ず優先していただきます。

フィールドワークで出かける時（プレゼミ期間中に、1回か2回）は、2時40分に大学を出発します。

授業計画
Course Schedule

第1回－第7回：演習イントロ。「行政学」輪読。

第8回－第15回：毎回時事問題について考える＋α（ゼミ生で決めてもらいます）
1、2回のフィールドワークと、1、2回のゲスト講師。

夏休み中に合宿を予定しています。行き先や時期はゼミ生で話し合って決めます。

その他ゼミ生主体で予定を決めていきます。

教科書
Textbooks

曽我謙吾『行政学』有斐閣アルマ
すでにブレゼミで輪読を終えているテキスト（北山俊哉ほか著『初めて出会う政治学』、稲継裕昭『地方自治入門』）も適宜参照することがあります。

参考文献
Reference Books

（購入の必要はない）
稲継裕昭（2013）『自治体ガバナンス』放送大学教育振興会
ギャビン・ニューサム（2016）『クールな政府のつくりかープラットフォームとアプリがつくる21世紀の民主主義（仮題）』東洋経済新報社
その他適宜示します。

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	%	
平常点評価 Class Participation	60%	特別の事情がない限り欠席を認めていませんので、欠席の際には大きく減点。 課題のコースナビへの期限内提出。（期限に遅れると減点） 報告内容、討議への参加度
その他 Others	40%	行事（合宿、フィールドワーク、その他）への参加度も評価の対象となります。

備考・関連URL
Note・URL

ゼミ生たちが自主的に作成・運営しているゼミのホームページ
<http://inatsuguzemi.wix.com/wasedapse-undergrad>

政治学演習Ⅰ

2017

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
104	政治学演習Ⅰ（梅森直之）	春学期	3年以上：2単位	梅森 直之
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副 題 Subtitle

近代日本の政治思想

授業概要 Course Outline

われわれが現在暮らしている日本は、いったいいかなる来歴をへて、現在あるようなかたちになったのか。そしてそこにはどのような特徴があり、どのような問題があるのか。本ゼミナールでは、グローバルな歴史との連動を意識しながら、現代の日本を理解するうえで重要な政治思想の系譜を概観する。明治維新、自由民権運動、日清・日露戦争、台湾と朝鮮の植民地化、第一次世界大戦、満州事変と日中戦争、太平洋戦争の開始と敗戦、高度経済成長と安保闘争、グローバリゼーションと格差社会、これらは、資本主義とナショナリズムの変動を示す指標であり、またある場合にはその原因ともなった事件であった。日本の知識人たちは、こうした事件とともに、次第に顕在化する、階級やジェンダー、都市と農村、植民地と本国のあいだの矛盾や対立を問題化しつつ、そうした矛盾や対立を解決する方策を模索してきた。本ゼミナールでは、そうした矛盾や対立が、人びとにどのように経験され、そしてそこからどのような思想が生み出されたかを、明治維新から現代にいたるまでの代表的な日本の知識人のテキストをともに読み、議論することで、検証してゆく。

授業の到達目標 Objectives

テキストの「読み方」の習得
自分の考えを効果的に伝える「書き方」の練習
生産的に「議論する」訓練

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

以下は、本セミナーでこれまでカバーしてきたトピックの事例である。本年度、どの時代のどのようなトピックを中心に議論するかは、参加者の関心を考慮して決定する。

- 第1回：イントロダクション：「歴史」とは何か。現在問われるべき「問題」は何か
- 第2回：オンリー・イエスタディ（1980年代）：バブル経済下の学生生活の変容
- 第3回：安保から高度成長へ（1960年代、70年代）1：反公害闘争と民衆史
- 第4回：安保から高度成長へ（1960年代、70年代）2：反植民地闘争と安保闘争
- 第5回：戦後民主主義とは何か（1950年代、60年代）1：近代主義と近代化論
- 第6回：戦後民主主義とは何か（1950年代、60年代）2：主体性と戦争責任
- 第7回：占領と改革（1940年代）1：民主化の時代
- 第8回：占領と改革（1940年代）2：世界史のなかの占領
- 第9回：戦争の理念・戦争の思想（1930年代、40年代）1：戦争の記憶
- 第10回：戦争の理念・戦争の思想（1930年代、40年代）2：近代の超克
- 第11回：満州国の理想と現実（1930年代）1：東亜共同体から大東亜共栄圏へ
- 第12回：満州国の理想と現実（1930年代）2：植民地なき帝国主義
- 第13回：中間考察
- 第14回：資本主義と不均等発展（1920年代）1：大正デモクラシーの光と影
- 第15回：資本主義と不均等発展（1920年代）2：モダンガールの光と影
- 第16回：資本主義と不均等発展（1920年代）3：革新主義の台頭
- 第17回：植民地支配の理想と現実1：台湾 植民地統治の始まり
- 第18回：植民地支配の理想と現実2：台湾 自治政府への希求とその意義
- 第19回：植民地支配の理想と現実1：朝鮮 皇民化政策の来歴
- 第20回：植民地支配の理想と現実2：朝鮮 独立運動の展開

第21回：「社会」と「個」の発見（1910年代）：天皇機関説と民本主義
 第22回：初期社会主義とその時代（1900年代） 1：日露戦争とその批判
 第23回：初期社会主義とその時代（1900年代） 2：社会問題の発生と初期社会主義
 第24回：乱反射するオリエンタリズム 1：和辻哲郎、近衛文麿、岡倉天心
 第25回：乱反射するオリエンタリズム 2：樽井藤吉、福沢諭吉、大井憲太郎
 第26回：国家建設期の思想史的問題 1：文明論
 第27回：国家建設期の思想史的問題 2：自由民権論
 第28回：「近世」とは何か 1：徳川儒学の可能性
 第29回：「近世」とは何か 2：近世のなかの近代
 第30回：理解度の確認：学術論文の書き方

教科書 Textbooks

授業期間中に指示する。

参考文献 Reference Books

梅森直之『初期社会主義の地形学』（有志舎、2016）
 梅森直之編著『ベネディクト・アンダーソン グローバリゼーションを語る』（光文社、2007）
 ハリー・ハルトゥーニアン『近代による超克』（岩波書店、2007）

評価方法 Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	%	
平常点評価 Class Participation	%	
その他 Others	100%	授業への参加と期末レポートを総合的に評価する。

備考・関連URL Note・URL

これまでの基礎知識は問いませんが、これからの学習に対する強い意欲と好奇心ならびに知的柔軟性と持久力が必要です。無断欠席3回以上で、評価の対象から外します。
 日本の事例を、外国に向けて発信するための、意欲と能力を持つ学生を評価します。

政治学演習 I

2017

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
105	政治学演習 I (川岸令和)	春学期	3 年以上：2 単位	川岸 令和
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副 題 Subtitle

日本国憲法の現在

授業概要 Course Outline

日本国憲法は、敗戦という現実がもたらした新しい時代の新秩序を構成すべく制定された。その新秩序は、基本的人権・国民主権・平和主義の実現という構想を基軸にして展開されることとなった。これらの概念は日本史上根本的に新規なものである。またこの憲法は初めて広く討議に付され制定された。そのときから日本国民は自らの政治運営による正統性の探求という終わりなき旅を始めたのであった。約70年を経た現在、その約束は果たされているであろうか。本演習は、新しい時代の新しい政治の科学として誕生した日本国憲法に関する判例・学説の現在の到達点を把握すること、そしてそのさらなる発展の可能性を問うことを目的とする。方法としては、法解釈学とそれを支える政治・思想・歴史的アプローチとを行きつ戻りつしながら進めていく。日本国憲法の可能性を問うことは、我々の過去を顧み、未来を構想することである。我々は集団としてどのような人間でありたいと考えているのであろうか。

憲法を勉強しようとする際には、感性が豊かで、人間や社会問題に幅広く関心を抱いていることが重要である。現時点での憲法に関する知識は問わない。温かい心と冷静に議論しようとする姿勢をもつ諸君の参加を希望する。

授業の到達目標 Objectives

日本国憲法をめぐる判例と学説の現在の到達点を理解し、さらなるリベラル・デモクラシーの深化を構想することを目標とする。具体的には、3年次に憲法現象を分析するための基礎力を充実させ、4年次に受講生各自の関心にしたがって大学生活の集大成となるゼミ論文をまとめることである。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

プレ演習では、憲法学に関する基本的な文献の読解を通じて、憲法学習の基礎固めを目指す予定である。2016年度は水曜5時限に演習 I を実施しているので、それにも参加することが望ましい。ゼミでは自ら問題意識をもって主体的に学ぶことが多いであろう。

授業計画 Course Schedule

具体的な演習の進め方は、受講生と相談の上、決定する。かつては憲法に関する基礎文献の輪読を中心にしていたが、ここ数年は、憲法の主要な論点について、ディベート形式で理解を深めるようにしてきた。いずれにしても、知識の習得とその活用とのバランスを取りながら進めていくことを心がける。

教科書 Textbooks

開講時に指示する。参考までにこれまで使用したもの（改訂版を含む）から代表的なものを挙げておく。

戸松秀典『プレッ プ 憲法 第4版』（弘文堂、2016年）、戸松秀典『プレッ プ 憲法訴訟』（弘文堂、2011年）、棟居快行ほか『基本的人権の事件簿 第5版』（有斐閣、2015年）、古関彰一『日本国憲法の誕生』（岩波現代文庫、2009年）、奥平康弘『憲法裁判の可能性』（岩波書店、1995年）、樋口陽一『いま、「憲法」は時代遅れか』（平凡社、2011年）、佐藤幸治『立憲主義について 成立過程と現代』（左右社、2015年）、川岸令和ほか『憲法』第4版（青林書院、2016年）、飯島昇蔵・川岸令和編『憲法と政治思想の対話』（新評論、2002年）、戴下史郎監修『立憲主義の政治経済学』（東洋経済新報社、2008年）ほか。

参考文献
Reference Books

参考文献は適宜紹介する。

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	%	
平常点評価 Class Participation	%	
その他 Others	100%	ゼミは何よりも出席し、議論や活動に積極的に参加することが重要である。成績評価は各人のゼミへの参加の度合いをもとに総合的に評価する。なお演習Ⅱの評価に当たっては、レポートを課す。

備考・関連URL
Note・URL

憲法（2016年度は秋学期に開講）を未履習のゼミ生は、3年次（2017年度は春学期に開講予定）に必ず履修すること。また、3年次配当の比較政治制度論も憲法の政治機構分野を取り扱う科目であるので、必ず履修すること。

政治学演習 I

2017

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
106	政治学演習 I (栗崎周平)	春学期	3 年以上：2 単位	栗崎 周平
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副 題 Subtitle

国際政治の理論研究・実証研究
Scientific Study of International Relations

授業概要 Course Outline

国際政治、主に安全保障に関わる論点（国際紛争、平和構築、内戦、国際組織、国家間競争など）について、その原因、メカニズム、解決策、さらには政策論的含意などを考察するために、理論研究ないし実証研究を行います。単なる時事問題の討議や既存研究の評論に留まらず、各々が持つ国際政治についての問題意識に基づいて独自の学術研究を二年間かけて行います。理論研究ではゲーム理論を用い、実証研究では計量分析を行います。ゲーム・モデルの分析から導出された仮説の検証という、理論と実証の組み合わせでも構いません。研究テーマは独自の研究を行うことを推奨しますが、学生間の共同研究を推奨します。また担当教員のプロジェクトに共同研究者として参画することも可能です。担当教員の現在の主な研究課題は、国際紛争における外交（非軍事的手段）が果たす役割についての数理分析・実証（計量・歴史）分析、危機外交の理論分析、観衆費用モデルの実証（計量）を通しての民主制度の情報効果の検証、日本の集団的自衛権問題を含む東アジア国際関係の理論分析と実証分析です。

「ゼミ制度」は日本の大学制度の優れている点で、とくに社会科学ではこのゼミ制度を有効利用することで、北米のトップスクールと互角にあるいはそれ以上の成果を出すことが可能です。本演習ではこの「ゼミ制度」の強みを最大限利用します。そのために、毎週の演習では自身の研究のみならず他の研究プロジェクトについても討議を全員で行うことによって研究上の問題を協同して解決するとともに研究のノウハウの共有を図ります。ゲーム分析におけるモデル化や均衡導出と解析、計量分析におけるデータ収集・統計モデル構築・プログラミングなどは、毎週、参加者同士で切磋琢磨する中で習得してもらい同時にハンズオンの指導を行います。ゲームモデルの分析やデータ分析など必要なプログラムはGoogle Driveで全て共有して他のゼミ生も同時に分析をゼミの場で行うことで、他のゼミ生にとっては「練習問題」にもなります。

目標は、世界トップレベルの大学教育の到達点を達成することです。世界のトップ大学では学生による学術研究への参画がトレンドです。卒業時までには本格的な研究として一定の完結を目指し、その成果は、学術論文かポスター（具体例については下記「備考」欄参照）の作成のいずれかを必須とします。研究成果の学術的意義が大きければ3月に北米で開催される国際学会での研究発表を視野に入れます。以上の作業は特段にハードなものではなく、全員がゼロの状態から栗崎が用意するプログラムをこなせば、無理なく十分に到達できます。2016年3月の卒業直前に、3名がアトランタに、別の3名はサンディエゴに行くことが出来ました。ドイツでのワークショップにも1名参加しました。また、英語によるプレゼン力を鍛えることと、国際政治研究の最前線に触れることを目的として、必要に応じて北米のトップスクールから研究者を招聘し研究指導を行います。昨年は、コロンビア、スタンフォード、プリンストン、UCSDなどから7名招聘しました。

2017年度からは政経の英語学位プログラム(EDESSA)のケラム(Kellam)ゼミと合同のゼミ合宿を9月に行う予定で、それに向けた交流会も定期的に行います。ケラムゼミでは比較政治学が中心ですので、比較政治学（民主化、内戦、国家建設、権威主義体制、報道の自由と民主主義など）に関するテーマでもゼミ希望を受け付けます。

授業の到達目標 Objectives

- (1) 大学・政治学研究という枠の中ですが、国際舞台・研究競争に打って出る力を養う。
- (2) ゲーム理論による理論研究や統計分析による実証研究を通して、論理的に説得的に魅力的に議論を展開できるようになること。
- (3) そのための技術の習得（Critical thinking、argumentation、問題発見能力と問題解決能力、プロジェクト立案遂行能力、ロジック、データ分析、ライティング、プレゼンテーション能力）。
- (4) 文献の読み方3つのテクニック（本2時間読了、論文裏読み、短期間多読）を身に付ける。

事前・事後学習の内容
Preparation and Review

実証分析に関しては、データを扱う事の楽しさを味わってもらために政治学教員が担当する「政治経済の計量分析」を薦めます。「計量政治学」はUCLA政治学部と同内容ですのでお勧めします。

解析的・分析的な政治の理論研究に関しては、モデル分析の面白さを味わってもらうために、例えば「比較経済制度分析」などがお勧めです。

授業計画
Course Schedule

演習 I & II :

- 第 1 回 インTRODクシヨン
- 第 2 - 15 回 Kydd教科書や研究論文 (APSRなど) の輪読と各自研究テーマについてのブレインストーミング
- 第 16 - 20 回 関心テーマについてLiterature Review報告
- 第 21 - 25 回 先行研究の再現・複製を通した研究プロジェクト企画立案
- 第 26 - 30 回 研究プロジェクト (パイロットスタディ) 発表

演習 III & IV :

- 第 1 - 2 回 ISA学会プロポーザル (300 words) 批評会
- 第 3 - 10 回 プロジェクト遂行とLabミーティング
- 第 11 - 20 回 プロジェクト中間報告とLabミーティング
- 第 21 - 30 回 研究成果の論文執筆と発表への準備

教科書
Textbooks

David A. Lake and Robert Powell. 1999. Strategic Choice and International Relations. Princeton University Press.

Andrew Kydd. 2015. International Relations Theory: Game Theoretic Approach. Cambridge University Press.

国際政治研究の主要学術雑誌 : APSR, AJPS, IO, IS, JCR, ISQ, などが実質的な教科書となります。

参考文献
Reference Books

特になし。

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	%	
平常点評価 Class Participation	%	
その他 Others	100%	25 % 論文またはポスターの作成。 25 % 各種中間報告など。 50 % 毎回の出席、討論、報告、そしてこれら前提としての準備。

備考・関連URL Note・URL

ゼミ履修希望者は、「演習要項補遺」を必ず参照して下さい。

I also invite applications from students in PSE's English-Based Degree Program.

<http://www.f.waseda.jp/kurizaki/call-u-seminar.2015.html> (for English)

<http://www.f.waseda.jp/kurizaki/call-u-seminar.j.2015.html> (日本語)

ゼミ未登録希望者は、直接連絡を下さい。2016年度現在ゼミ未登録者での参加は学内他学部に残らず東大とICUから参加者がいます。

本演習で作成されることが期待される学術論文やポスターは下記から参照できます：

https://drive.google.com/file/d/0B_-BxaJ90WcoS0hjWE9CcXZJZGs/view?usp=sharing

https://drive.google.com/file/d/0B_-BxaJ90Wcoc1hvZ0xyYklrZms/view?usp=sharing

政治学演習Ⅰ

2017

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
107	政治学演習Ⅰ（河野勝）	春学期	3年以上：2単位	河野 勝
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副 題 Subtitle

現代日本政治の諸問題

授業概要 Course Outline

日本の政治を政治学的に考察する。往々にして、現代の日本政治を語る語り口は、評論的でジャーナリスティックになりがちになるが、本演習では理論やモデルをふまえて、政治学的分析の題材として日本政治の諸相をとらえることを心がける。

実際にどのような問題を扱うかは、参加する学生諸君の関心にゆだねる。選挙、政党政治から公共政策、防衛・外交に至るまで、広くかたよりのないトピックを数多く扱えることが理想であるが、教官がプレゼンテーションの内容を押しつけることはしない。しかし、その代わり、自分の関心のある領域について知識を深めようとするのであるから、教官以上に専門的な情報を提供できるよう、熱心な取り組みが期待される。

なお、政治学的に考えるということは政治的に考えるということと全く異なる知的営為である。ひとりよがりのイデオロギーや特定の規範的価値を前面に押し出すのではなく、価値判断をするための経験的知識や考察を積み重ねることが目的であるとの前提で、演習へ参加してもらう。

授業の到達目標 Objectives

自分の力で、データを集め、事例を分析し、オリジナルで説得力のある議論を展開する能力を身につけること。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

<春学期>

第1回：イントロダクション

第2回－第8回：教科書輪読

第9回－第15回：3年生：卒論ブレーンストーミング
4年生：卒論 中間発表

<秋学期>

第1回：イントロダクション

第2回－第7回：3年生：卒論中間発表

4年生：企業・産業・日本経済レポート

第8回－第15回：4年生：卒論最終発表

教科書 Textbooks

新版『アクセス 日本政治論』（平野 浩・河野 勝編 日本経済評論社）2012年

参考文献 Reference Books

『制度』（河野 勝、東京大学出版会）2002年

『アクセス』シリーズ各巻（日本経済評論社）

評価方法 Evaluation

	割 合 (%) Percent (%)	評 価 基 準 Description
試 験 Examinations	%	
レポート Papers	50%	先行研究の理解、独創性、分析の精度、文章・表現力。
平常点評価 Class Participation	50%	授業参加。コメントの質。
そ の 他 Others	%	

備考・関連URL Note・URL

学生に対する要望：人生に対して真剣であること。自分を大切に、他人を尊重すること。心身ともに健康であること。

関連URL：

<http://kohno-seminar.net/>

政治学演習 I

2017

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
108	政治学演習 I (小原隆治)	春学期	3 年以上：2 単位	小原 隆治
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副 題 Subtitle

自治・分権を考える

授業概要 Course Outline

自治・分権をめぐるさまざまな問題を多面的な角度から考察する。春学期(＝政治学演習I)は、参加者がいくつかのテキストを輪読形式で読み進める。今年度は、まず最初に担当教員が最近著した論文2点、ついでゼミ選考の際、課題図書として提示した文献2冊を検討する。そのあと3人の著者の手になる教科書的なテキスト1冊を扱い(第16、18章はスキップする)、各自の問題意識を深めてもらう。なお、夏合宿-秋学期(＝政治学演習II)は、参加者が春学期の学習を踏まえてそれぞれ関心あるテーマを選択し、テーマ別に編成したグループ単位で研究報告を積み重ねる。ゼミの学習面でも運営面でも、参加者の自主性に大いに期待したい。ゼミもまた「自治」の実践の場だからである。なお、ゼミに出席することは参加者の権利だが、そこには相応の責任がともなう。無断欠席は認められない。また、相当の理由なく学期回数の3分の1以上欠席した者は、ゼミに参加する権利を自動的に失う。春学期に失格した者は、秋学期に参加する権利を持たない。

【プレ演習】

丸山眞男『政治の世界 他十篇』(岩波文庫、2014年)、同『超国家主義の論理と心理 他八篇』(岩波文庫、2015年)をテキストとし、そのなかからいくつかの論文をピックアップして輪読する。時限については、水曜日5限を第1候補にして調整する予定なので留意されたい。

授業の到達目標 Objectives

自治・分権をめぐる全体的な問題状況を把握する。そのうえで個別具体的な制度・政策・事例のレベルに落として課題を考察する方法態度を身につける。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

第1回：ガイダンス
第2回－第3回：小原(2012、2013)を2回で輪読する。
第4回－第5回：内田(2014)、宮城・渡辺(2016)を2回で輪読する。
第6回－第14回：磯崎・金井・伊藤(2014)を9回で輪読する(第16、18章はスキップする)。
第15回：今後の打ち合わせ(テーマ別グループ編成、夏合宿など)

教科書 Textbooks

小原隆治(2012)「自治・分権とデモクラシー」齋藤純一・田村哲樹編『アクセス デモクラシー論』日本経済評論社

小原隆治(2013)「平成大合併と地域コミュニティのゆくえ」室崎益輝・幸田雅治編著『市町村合併による防災力空洞化』ミネルヴァ書房

内田 樹(2014)『憲法の「空語」を充たすために』かもがわ出版

宮城大蔵・渡辺 豪(2016)『普天間・辺野古 歪められた二〇年』集英社新書

磯崎初仁・金井利之・伊藤正次(2014)『ホーンブック 地方自治(第3版)』北樹出版

小原(2012、2013)は、担当教員が受講者にコピーまたはPDFを用意する。

【プレ演習】

丸山眞男『政治の世界 他十篇』(岩波文庫、2014年)

丸山眞男『超国家主義の論理と心理 他八篇』(岩波文庫、2015年)

参考文献
Reference Books

開講時をはじめ随時紹介する。

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	%	
平常点評価 Class Participation	100%	前述の出席要件を満たしていることを前提として、日頃のゼミへの貢献度を評価する。
その他 Others	%	

備考・関連URL
Note・URL

関連URL：随時紹介する。

政治学演習Ⅰ

2017

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
109	政治学演習Ⅰ（笹田栄司）	春学期	3年以上：2単位	笹田 栄司
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副題 Subtitle

現代の司法

授業概要 Course Outline

行政や国会に比べ変わるのことのなかった司法制度は、20世紀末に始まる改革によって大きく変容した。また、消極的と批判されることの多かった違憲審査も司法制度改革や憲法改正論議を経ていくらか積極的な動きを見せている。本演習は、近年、注目されることの多い司法について、法学、政治学、そしてメディアなどによる分析を検討することによって、司法制度の現状と問題点を把握することを狙いとする。また、具体的な人権に関する事件を取り上げ、両当事者の主張、裁判所による判決を検討する。この検討を通じて、裁判所による人権保障を考える。

まず、司法に強い関心を持っていることが重要である。司法についての知見が段階的に獲得できるよう演習プログラムを構成しているので、現時点での司法についての知識は問わない。春学期は、授業計画に挙げている教科書から割当てられたテーマの研究報告を受講生が行い、その報告に基づいて、全員で討論する。秋学期は、「裁判所による人権保障」がメインテーマである。取り上げる事件は、近年の人権に関するもの（ダンスの自由、代理母の自己決定権、在外邦人の選挙権、ポルノ鑑賞の自由、治療拒否の自由など）を考えている。春学期で得た知見を踏まえて、具体的な裁判について検討を行う。秋学期はロールプレイングに基づいて授業を進める（授業計画を参照のこと）。

ゼミの最終回に、自分が興味を持ったテーマについて5,000字程度のレポートを提出する。

授業の到達目標 Objectives

司法制度の重要な柱である違憲審査制・最高裁判所・裁判官制度、裁判員制度・検察審査会などについて、制度の概要及びその問題点を理解する。そして、最近の人権に関する事件を取り上げ、「裁判所による人権保障」の現状を理解する。本演習では、取り上げるテーマに関連する資料を調査し、自分の考えをまとめ、発表し、討論する能力の向上を目指す。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

第1回：ガイダンス

第2回～第13回：木佐茂男他『テキストブック現代司法 第6版』を読む。

第14回～第15回：ゼミメンバー全員で、自分が担当した部分のうち興味があるところをさらに調べて報告する（10分程度）。各自のプレゼンテーションをゼミメンバー全員で評価する。

第16回～第29回：最近の人権に関する裁判（『基本的人権の事件簿 第5版』）を素材に、報告者グループを原告側と被告側に分け、その他のメンバーは裁判官団としてどちらの側の主張に分があるかを判断する。

第30回総括、レポート提出。

教科書 Textbooks

第2回から第15回について、木佐茂男・宮澤節生・佐藤鉄男・川島四郎・水谷規男・上石圭一『テキストブック現代司法 第6版』（日本評論社、2015年）。第16回から第29回について、棟居快行・赤坂正浩・松井茂記・笹田栄司・常本照樹・市川正人『基本的人権の事件簿 第5版』（有斐閣、2015年）。

参考文献
Reference Books

笹田栄司『司法の変容と憲法』（有斐閣、2008年）、市川正人・酒巻 匡・山本和彦『現代の裁判』第5版（有斐閣、2008年）、山口 進・宮地ゆう『最高裁の暗闘』（朝日新書、2011年）、新藤宗幸『司法官僚』（岩波新書、2009年）。その他の参考文献は、随時、紹介する。

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	40%	課題の設定、資料の収集、レポートの構成
平常点評価 Class Participation	60%	報告課題の内容、討論への積極的参加
その他 Others	%	

備考・関連URL
Note・URL

憲法を未履修のゼミ生は、三年次に必ず履修すること。また、比較政治制度論も同じく必ず履修すること。

政治学演習Ⅰ

2017

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
110	政治学演習Ⅰ（佐藤正志）	春学期	3年以上：2単位	佐藤 正志
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副 題 Subtitle

西洋政治思想研究

授業概要 Course Outline

本演習は、西洋政治思想史上の古典的著作を、古典として現代になお生きつづけていることの意味を考えながら、またそれぞれのテキストの書かれた文脈をふまえながら、じっくりと読むことをめざす。

演習では主として、ホッブズから啓蒙思想までの初期近代の政治思想家の著作を中心として取り上げ、政治思想史上における近代の意味を再検討することを基本的な課題とする。例えば、近代性の現代的意義を問うという視点から、〈いま、あらためて「啓蒙とは何か」を考える〉ために、ルソーや百科全書派、またカントの古典に立ちもどりつつ、同時に、啓蒙思想の歴史的コンテクストとして、書物や新聞の読者としての公衆の登場や世論の成立に着目しながら、市民社会と公共圏の形成について考察する。また、ハーバーマスやフーコーらの現代の思想家の著作を読んで、私たちが現代の政治と公共性について考えるときに啓蒙思想はどのような意味をもっているのかを検討する。このようにして近代の政治的ヴィジョンの多様性と現代性の再検討を目指す。

ゼミは毎回、共通テキストの分担報告を中心とする。本年度の主題に即して、古典を輪読すると同時に、それらのコンテクストに関する報告を分担して行う。夏期合宿では主題に関わる現代思想を取り上げる。

こうした共通の取り組みと同時に、ゼミ参加者は、広く政治思想にかかわる領域から、それぞれ自分の問題関心にしたがってテーマを選び、研究をすすめることになる。春期と秋期にそれぞれ、その報告と討論の機会をもうける。各自の問題関心にしたがって研究を深めると同時に、できる限り、他のメンバーの取り組んでいる問題への関心を共有し、知識の幅を広げてゆけるようなゼミの持ち方を追求したいと思う。

授業の到達目標 Objectives

ゼミの課題に関連して自ら課題を設定し、レポートを作成すること。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：共通課題についての問題提起とディスカッション
- 第3回～第11回：共通課題についての分担報告とディスカッション
- 第12回～第14回：個別課題予備レポート報告
- 第15回：理解度の確認

教科書 Textbooks

本演習では、初めに共通課題に関してディスカッションを行い、それを踏まえて主として古典的作品を共通テキストとして決定する。

以下は本課題に関する古典の例。

マキアヴェリ『君主論』、ホッブズ『リヴァイアサン』、ロック『統治二論』、ルソー『社会契約論』など。

参考文献
Reference Books

参考文献については、演習のなかで紹介するが、とりあえず入門的な文献をあげておく。
クエンティン・スキナー『マキアヴェッリ』(未来社、1991年)。
リチャード・タック『トマス・ホッブズ』(未来社、1995年)。
ジョン・ダン『ジョン・ロック—信仰・哲学・政治』(岩波書店、1987年)。
ブリュノ・ベルナルディ『ジャン=ジャック・ルソーの政治哲学—一般意志・人民主権・共和国』(勁草書房、2014年)。
福田敏一『近代の政治思想—その現実的・理論的諸前提』(岩波新書、1970年)。
藤原保信『自由主義の再検討』(岩波新書、1993年)。
佐藤正志「近代国家の形成と政治思想」(藤原保信ほか編『政治思想史講義』早稲田大学出版部、1991年)、101～105頁。
佐藤正志ほか編『政治学講義』(早稲田大学出版部、1989年)、第II部。

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	50%	課題設定、文献の活用、論理的構成。
平常点評価 Class Participation	50%	分担課題についての発表と議論への積極的参加。
その他 Others	%	

備考・関連URL
Note・URL

<http://www.f.waseda.jp/ssato/>

政治学演習 I

2017

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
111	政治学演習 I (田中愛治)	春学期	3 年以上：2 単位	田中 愛治
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副 題 Subtitle

現代政治学の実証分析・計量分析
Empirical/ Quantitative Analysis of Political Science

授業概要 Course Outline

政治学の実証分析を実践的に学ぶ。日本および海外の投票行動・政治意識（世論）が教員（田中愛治）の専門領域だが、実証分析・計量分析の考え方を学び、それをいかに様々な政治現象に適用できるかを実践的に体得してもらいたい。ゼミでは必要に応じて、日本語と英語の両方を用いてもよい。

Through this seminar, I would like you to learn how to analyze and explain political phenomena with empirical evidence or with statistical data. While my own research interests are voting behavior and public opinion, the students can apply the methodology of empirical or quantitative analysis to various topics of political science. Both non-Japanese native speakers and Japanese native speakers are welcome. If necessary, I will conduct seminar partially in English.

授業の到達目標 Objectives

仮説の検証という実証政治分析の考え方を体得するために、3年生はグループ・ワークとして、EXCELとSPSS、STATAを用いたデータの統計分析を用いて、自分たちの仮説の妥当性を検証し、発表する。4年生は、各自の仮説を実証的データ（または事実）で検証して、卒論にまとめる。

In order to master how to verify hypothesis with empirical evidences (or data), Junior students are engaged in group work, in which they verify their own hypothesis through statistical analysis using EXCEL and SPSS, and they present their analysis later. The Senior students verify his/her own hypothesis and write a senior thesis.

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

田中愛治の政治学演習を履修する場合には、事前に「学術的文章の作成」を履修して合格していることが望ましい。

また、浅野正彦先生の「計量政治学」を履修済みか、履修しているか、少なくとも3年生では履修するつもりであることが望ましい。

田中愛治のゼミ生は、ほぼ全員「政治過程論」（3年生後期配当）を履修している。

その教科書の久米郁男・川出良枝・古城佳子・田中愛治・真淵勝『政治学』（有斐閣）ならびに伊藤光利、田中愛治、真淵勝『政治過程論』（有斐閣）を、3年生になる前に読んでいたことが望ましい。

授業計画 Course Schedule

第1回(1st Class Meeting)：政治・社会現象を実証的に分析する方法-入門

Introduction: How to analyze political/ social phenomena empirically.

第2回(2nd Class Meeting)：仮説とは何か？ 原因と結果の関係—因果関係を仮説で表す

What is hypothesis: How to specify the relationship between cause and effects.

第3回(3rd Class Meeting)：仮説をどのように検証するのか。仮説の概念を操作化する方法。

How to verify/test a hypothesis, and how to operationalize the hypothesis.

第4回(4th Class Meeting)：仮説を実証的（経験的）データおよび統計分析手法で検証する方法

How to support a hypothesis with empirical/ statistical data.

第5回(5th Class Meeting)：仮説検証の方法

Learning the methodology of hypothesis testing (1).

第6回(6th Class Meeting)：早稲田祭で研究発表するテーマ決め（グループ毎に1つ）(1)

Discussion on the topics of group work to present at Waseda Festival (1).

第7回(7th Class Meeting)：早稲田祭で研究発表するテーマ決め（グループ毎に1つ）(2)

Discussion on the topics of group work to present at Waseda Festival (2).
 第8回(8th Class Meeting)：早稲田祭で研究発表するテーマ決め（グループ毎に1つ）(3)
 Discussion on the topics of group work to present at Waseda Festival (3).
 第9回(9th Class Meeting)：グループワークに入り、各グループ毎にデータ収集(1)
 How to collect data for each topic of the group work (1).
 第10回(10th Class Meeting)：グループワークに入り、各グループ毎にデータ収集(2)
 How to collect data for each topic of the group work (2).
 第11回(11th Class Meeting)：グループワークに入り、各グループ毎にデータ収集(3)
 How to collect data for each topic of the group work (3).
 第12回(12th Class Meeting)：データ分析の方法入門（各班毎のテーマに沿って）(1)
 Introduction to Data/Statistical Analysis for each group (1)
 第13回(13th Class Meeting)：データ分析の方法入門（各班毎のテーマに沿って）(2)
 Introduction to Data/Statistical Analysis for each group (2)
 第14回(14th Class Meeting)：データ分析の方法入門（各班共通の方法論）(3)
 Introduction to common Statistical Analysis for all the groups (3)
 第15回(15th Class Meeting)：データ分析の方法入門（各班共通の方法論）(4)
 Introduction to common Statistical Analysis for all the groups (4)

教科書 Textbooks

高根正昭『創造の方法学』講談社新書。
 久米郁男『原因を推論する』有斐閣。
 or
 Herbert Weisberg and John Krosnich, Data Collection and Analysis.

参考文献 Reference Books

必要に応じて、授業中に指示する。または、資料を配付する。
 I will indicate necessary books or other references.
 Also, I will distribute hand outs when necessary.

評価方法 Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	%	
平常点評価 Class Participation	%	
その他 Others	100%	成績は、ゼミへの出席を最も重視し、課題をこなしているか、さらにゼミにおける議論に積極的に参加しているかどうかで、評価を決める。 Grading will depends on each student's (1) attendance, (2) cooperation with other students, and (3) participation in seminar discussion (quality, not quantity, is important).

備考・関連URL Note・URL

毎年、9月に早稲田のセミナーハウス（軽井沢、川奈、鴨川のいずれか）で、ゼミ合宿を行う予定。
 We will have a Seminar Summer Camp with Senior Year students of my seminar in September every year. The site will be one of Seminar House of Waseda (Karuizawa, Kawana, or Kamogawa).

政治学演習Ⅰ

2017

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
112	政治学演習Ⅰ（田中孝彦）	春学期	3年以上：2単位	田中 孝彦
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副題 Subtitle

Global History としての冷戦史研究—反核運動の歴史的展開

授業概要 Course Outline

1940年代後半から1990年まで、40年余りにわたり続いた「冷戦」と一般に呼ばれていた時代における世界政治の歴史的展開について、多角的な視点から分析を試みるのが、本ゼミの目的である。本年度の前期においては、冷戦の展開過程に重要な影響を及ぼした、反核市民運動の歴史的展開について、基本的な文献を利用して学ぶ。冷戦期は米ソ両超大国が核兵器を保有して対峙しあい、偶発的核戦争の危険のもとに人類は常に置かれていた。冷戦後の現在においても、核兵器は依然として多く保有されたままであり、その廃絶と管理は重要な政治的課題である。

冷戦期において展開した市民による反核平和運動は、実際の国際政治にどのような影響を及ぼしたのか。今後、市民による運動や働きかけは、地球社会における核兵器の管理にどのような役割を果たしうるのか。教科書や参考文献をよみつつ、皆で考えてゆく。

授業の到達目標 Objectives

次のような論点について、自分の頭で考え、自分のArgumentを組み立てられるようにすることが目標である。

- 1) 市民は国際政治にどのような影響を与えることができるのか。または、できないのか。
- 2) 核兵器の廃絶、軍縮はなぜ今まで成功していないのか。
- 3) どうすれば、核軍縮は可能となるのか。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

特になし。
プレゼミで事前学習を行う予定である。

授業計画 Course Schedule

反核平和運動の歴史的展開についての定評のある教科書を読解し、重要な論点や疑問点を抽出し合い、Battle Talkを全員で行う。教科書については、次欄を参照のこと。

教科書 Textbooks

Lawrence Wittner, 2009, *Confronting the Bomb: A Short History of the World Nuclear Disarmament Movement*, Stanford UP.

Wittner教授は、反核市民運動の歴史研究の第一人者。冷戦期の反核市民運動についての3冊にわたる大部の研究書を世に出している。上記の著作は、これらの研究成果を簡潔にまとめたもの。英語は平易で読みやすい。

参考文献 Reference Books

ゼミで、適宜指示する。

評価方法 Evaluation

	割 合 (%) Percent (%)	評 価 基 準 Description
試 験 Examinations	%	
レポ ² ー ト Papers	%	
平常点評価 Class Participation	%	
そ の 他 Others	100%	基本的に平常点による。報告の内容と質、ゼミでの討論への積極的な関与、などを基準に評価する。

備考・関連URL Note・URL

教科書の内容などについては、以下のサイトから知ることができます。
<http://www.sup.org/books/title/?id=9646>

政治学演習 I

2017

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
113	政治学演習 I (谷藤悦史)	春学期	3 年以上：2 単位	谷藤 悦史
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副 題 Subtitle

世論・政治コミュニケーション研究

授業概要 Course Outline

マス・メディア、新しいメディアの誕生と発達、政治のあり方を変えつつあります。本演習は、メディアの発達が、政治コミュニケーションにいかなる影響を与え、現代の世論と民主主義に対する影響を様々な角度から探ることをねらいとして研究を進めます。

具体的には、政治態度、政治的価値、政治意見、政治イメージ形成とマス・メディアの関係、選挙キャンペーン、投票行動とマス・メディアの諸影響、ニューメディアを含めた現代メディアの政治的影響、政治ジャーナリズムの現代的特性、現代世論の特性などの問題を、最新の理論を基に研究します。

研究は、理論と分析方法に対する理解を前提に、データの収集と解析の方法、時系列研究と比較研究の方法と実践などを総合的に行う形で進めます。マス・メディアと政治、政治コミュニケーション、世論と現代民主主義などに関心があり、積極性のある学生を求めます。また、2年間継続してゼミナールに参加する学生を求めます。

授業の到達目標 Objectives

高い分析能力と論理的な思考能力の獲得。
卒業論文の完成 (20,000から40,000字程度)。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

- 第1回：春学期演習のガイダンス
- 第2回：政治とメディア、政治コミュニケーションを考える
- 第3回：政治とメディア、政治コミュニケーションをどう研究するか
- 第4回：現代ニュースをどうとらえるか
- 第5回：議題設定と議題構築の議題構築の現実
- 第6回：ニュースフレームとその特性
- 第7回：現代ニュース生産の特性
- 第8回：現代の選挙と現代の選挙キャンペーン
- 第9回：ニューメディアと政治的利用
- 第10回：ニューメディアは民主主義を変えるか
- 第12回：世論概念を検討しよう
- 第13回：現代世論をどうとらえるか
- 第14回：現代世論と現代民主主義
- 第15回：総合討論

教科書 Textbooks

授業でそのつど指示します。

参考文献
Reference Books

M. L. デフレー、S. ボール＝ロキーチ 柳井・谷藤訳『マスコミュニケーションの理論』敬文堂
 谷藤・大石訳『リーディングス政治コミュニケーション』一芸社
 谷藤『現代メディアと政治』一芸社
 谷藤『政治コミュニケーションを理解する52章』早稲田大学出版部

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	50%	年次における数回のレポート。
平常点評価 Class Participation	50%	ゼミにおける発表・報告。
その他 Others	%	

備考・関連URL
Note・URL

関連科目：政治学、現代デモクラシー論、政治過程論、マス・コミュニケーション論、社会調査論など取得するのが望ましい。

学生に対する要望：この分野に興味を持ち、主体的、積極的に研究する意欲ある学生諸君の参加を求めます。志望の際は研究のねらいと目標などを詳しく書くこと。連続してゼミに参加しない学生は対象としません。

政治学演習 I

2017

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
114	政治学演習 I (中村英俊)	春学期	3 年以上：2 単位	中村 英俊
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副題 Subtitle

国際政治の理論と現実－英国学派を中心に

授業概要 Course Outline

EU・ヨーロッパ統合、アジアの地域統合、国際連合、G7/G8/G20サミット、核拡散問題、エネルギー問題、気候変動問題など国際関係・国際政治の事例について、その本質（「現実」）を研究（理解・説明・分析）する上で、私たちは一定の理論的枠組みを必要とする。

国際政治の理論研究は、第二次世界大戦後、アメリカの学界を舞台に発展してきたと言える。そこでは、リアリズムとリベラリズムの間のパラダイム論争が重要な位置を占めてきた。しかし、大西洋の反対側・英国の国際政治学界では、アメリカの学問的流行とは一線を画した、独特な理論研究が積み重ねられてきた。「英国学派」（English School）と呼ばれる国際政治の見方を身に付けることが、本演習の基本的目標である。

本演習は、プレ演習後に I から IV までを（2 年余りにわたり）連続履修する典型例では、次のような段階で展開する。まず第 1 段階（プレ演習と演習 I）では、邦語・邦訳文献を中心にした輪読を通して、主にアメリカ国際政治学界で展開してきたリアリズムとリベラリズムの論争について概観したい。つぎの第 2 段階（演習 I と演習 II）では、「英国学派」の国際政治理論についても基礎知識を身に付けた後、より専門的な英語文献に取り組みたい。具体的には、英王立国際問題研究所（RIIA）の International Affairs 誌、英国国際政治学会（BISA）の Review of International Studies 誌などから各自が関心を寄せるテーマの論文を選び、報告・輪読の作業を重ねる。この段階で、各自が研究テーマを絞り込む作業を始めることになる。最後に第 3 段階（演習 II から IV）では、それまでの理論研究の成果を踏まえて、各自が事例研究のテーマを決定する。そして最終的に、理論研究と事例研究が上手く融合する卒業論文（ゼミナール論文）を完成してもらう。

授業の到達目標 Objectives

原則として 2 年間で、良い卒業論文を書き上げてもらう。そのために、順次、必要な知的訓練を重ねてもらう。

本演習 I（3 年春学期）では教科書（Nye and Welch）を輪読し、夏季休業中に各自の研究テーマを考え始め、演習 II（3 年秋学期）には各自のテーマに即した先行研究（学術誌の英語論文）を輪読する。3 年終了時点で、タームペーパーを提出してもらう。4 年への過渡期（2－3 月）に、同タームペーパーに基づく報告会を開催し、卒業論文完成へ向けての課題を自覚してもらうことになる。演習 III（4 年春学期）では、卒業論文の中間報告を重ね、特に夏季休業中には（3 年生も前に）報告会を開催する。演習 IV（4 年秋学期）で完成させる卒業論文については、1 月末か 2 月初旬に口頭試験ないしは最終報告会を開催することにする。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

事前学習として、プレ演習では、演習 I テキストの翻訳（『国際紛争』）を中心に日本語の基礎文献を読み込んでもらう。

演習 I の中心課題である英語テキストの輪読と同時に、各自の研究テーマを考えてもらう。

事後学習として、夏合宿などを挟んで、各自の研究テーマに関する日本語・英語などの文献（先行研究）調査を試みてもらう。演習 II の輪読テキストは、各自の研究テーマを反映した、英文雑誌の論文（複数）である。

授業計画 Course Schedule

- 第 1 回：オリエンテーション
- 第 2 回：国際政治の研究テーマ
- 第 3 回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 1）
- 第 4 回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 2）
- 第 5 回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 3）
- 第 6 回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 4）

第7回：各自が関心を寄せるテーマに関する英語の先行研究の調査実習
 第8回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 5）
 第9回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 6）
 第10回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 7）
 第11回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 8）
 第12回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 9）
 第13回：国際政治の理論と現実：各自の研究テーマの選定
 第14回：各自の研究テーマに関する先行研究の検討
 第15回：報告会：各自の暫定的研究テーマについて

教科書 Textbooks

Joseph S. Nye and David A. Welch, Understanding Global Conflict and Cooperation: An Introduction to Theory and History (10th Edition; Pearson 2016)

参考文献 Reference Books

適宜指定する

評価方法 Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	%	
平常点評価 Class Participation	%	
その他 Others	100%	報告を担当する回はもちろん、毎回出席し、毎回テキストの該当箇所などを熟読し、毎回ディスカッションに積極的に参加する（発言する）ことが求められる。こうしたパフォーマンスを総合的に評価する。

備考・関連URL Note・URL

関連科目：国際関係論入門、国際関係英語文献研究（英語）、国際機構論Ⅰ・Ⅱを含む国際関係領域のコア科目など。

グローバルエデュケーションセンターの「全学共通副専攻」の中では、「EU・欧州統合研究」など。

学生に対する要望：厳しく楽しいゼミを創りたいと思います。積極的かつ主体的に参加してくれる人の応募を待っています。

留意事項：毎週木曜5時限のゼミ（演習ⅠとⅡ）は時間を延長して（6時限も）じっくりと議論を深めます。夏季休業中のゼミ合宿（予定）へも参加してください。学期中の土曜日などに集中講義形式で「補講」を実施することもあります。

政治学演習Ⅰ

2017

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
115	政治学演習Ⅰ（仲内英三）	春学期	3年以上：2単位	仲内 英三
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副 題 Subtitle

近代西欧政治社会の歴史

授業概要 Course Outline

本年度は、19世紀後半から20世紀中葉にかけての英国とドイツの政治について、とくに政党の活動を中心に検討していきたい。同じくヨーロッパに属する英国とドイツではあるが、両地域における政党の発展は、歴史的・社会的・思想的なさまざまな要因から異なる発展を遂げてきた。それは当時の両地域の政治社会の違いを知るうえで重要であるばかりでなく、現在のヨーロッパの政治を考えるうえでも非常に示唆に富むものである。

なお「プレ演習」として、ヨーロッパ政治の歴史に関する基本的な文献をいくつか読んでいきたい。どのような文献を読んでいくかについては、春学期に行った講義「西洋政治史」で配った参考文献表のなかの、もっともやさしい基本文献のなかから、学生諸君の要望などを聴きながら選んでいきたいと考えている。

授業の到達目標 Objectives

近現代のヨーロッパの政治について理解できるようになる。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

- 第1回：政党とその役割
- （第2回－第16回：英国の政党の発展）
- 第2回：政党研究の歴史と政党の類型
- 第3回－第4回：1867年から1895年までの自由党優位の時代
- 第5回－第6回：1874年から1900年までの保守党の復活
- 第7回－第8回：19世紀後半（後期ヴィクトリア時代）の政治変革
- 第9回－第10回：19世紀末から第一次大戦までの政党の危機
- 第11回：世紀転換期の新自由主義の形成
- 第12回：世紀転換期の労働主義と労働党の誕生
- 第13回－第14回：1906年から1914年までの政党政治（選挙選を中心に）
- 第15回－第16回：両大戦間期の政党と議会
- （第17回－第30回：ドイツの政党の発展）
- 第17回－第20回：19世紀中葉からドイツ帝国創建までの政党
- （1）自由主義諸政党（2）保守主義諸政党
- （3）政治的カトリシズム（4）社会主義諸政党
- 第21回－第24回：ドイツ帝国時代の政党
- （1）自由主義諸政党（2）保守主義諸政党
- （3）中央党（4）社会民主党
- 第25回－第30回：ヴァイマル共和国時代の政党
- （1）ドイツ民主党、ドイツ人民党（2）社会民主党
- （3）中央党（4）ドイツ国民人民党
- （5）ドイツ国民社会主義労働党（6）ドイツ共産党

教科書 Textbooks

なし。教師が授業内容に即したレジュメを配布する。

参考文献
Reference Books

授業のはじめに、参考文献の一覧表を配布する。

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	30%	演習の最後に少なくとも1回は小論文もしくはレポートを提出していただく。内容は授業の過程で扱った時代や地域に関して、各自が関心を持ったテーマについて、あまり長くない分量で書けるものを提出していただくことになろう。
平常点評価 Class Participation	70%	演習は基本的に授業に出席することから始まるので、まず普段の授業への参加が出发点となる。授業では最低1回は発表の機会があるので、その出来具合も評価の対象となる。
その他 Others	%	

備考・関連URL
Note・URL

政治学演習Ⅰ

2017

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
116	政治学演習Ⅰ(福田耕治)	春学期	3年以上：2単位	福田 耕治
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副題 Subtitle

国際行政と国際公共政策－EUとUNを中心として－

授業概要 Course Outline

グローバル化に伴い、国民国家の枠を超えて行政の活動領域も拡大する傾向にある。本演習では、このような国際行政現象に注目し、国際機構内部の行政管理、国際行政と国内行政の関係、国際公共政策の管理や国境を越える政府間関係とINGOとの関係などの諸問題を扱う。国連やEU、その他の国際機構行政を事例として、国家行政との関係で、いかにして環境、開発、安全保障、人権・人道、難民保護などの国際公共政策を形成し、実施していくのかについて討論し、基礎概念の理解を深める。

授業の到達目標 Objectives

国際機関、国内行政機関、NGO職員等の国際協力部門の志望者、グローバルビジネスで活躍できる人材を育成する。また内外の大学院に進学し、研究者を目指す場合にも十分な学力、忍耐力、持久力、突破力を身につける。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

春学期

- 第1回：国際行政学とは何か－対象と方法
- 第2回：国際公益と国際公共政策の関係
- 第3回：国際社会保障政策と国際行政
- 第4回：国際保健医療政策と感染症対策
- 第5回：国際通貨・金融政策と国際公共政策
- 第6回：国境を越える政府間関係と補完性原則
- 第7回：地球環境エネルギー政策と国際行政
- 第8回：難民・移民政策と国際行政
- 第9回：食の安全性確保政策と国際行政
- 第10回：国際公共政策課程と国際機構、企業NGOの役割
- 第11回：国際行政責任論と国際コントロール
- 第12回：国際機構の人事行政と行財政改革
- 第13回：国際安全保障と国際行政
- 第14回：人間の安全保障・平和構築政策と国際行政
- 第15回：グローバル・ガバナンスと国際行政

国際行政の研究方法について指導する。3年生は、EUとUN等を事例とした国際行政の概念や理論に関する内外の基本文献を読み、報告や議論の仕方を学ぶ。

グループごとにパワー・ポイントを用いてプレゼンしてもらい、学際的研究の方法論や自分の力で研究していく能力を身につけられるようにする。

その際、研究資料の収集と分析の方法、研究論文の読み方や書き方、レジュメの書き方や研究発表の仕方、討論の方法についても基礎的な能力を涵養する。

各ゼミ生が任意のテーマを設定し研究をすすめ、個別報告を行う。各報告について全体で討論を行い、チュートリアル指導も含め、各自の問題意識と研究能力を育むことを目指したい。

教科書
Textbooks

福田耕治『国際行政学・新版』有斐閣、2012年4月

参考文献
Reference Books

内外の学会誌等の最新の研究論文や資料を用いるので、適宜指示する。

なお、本演習では卒業論文集（CD-ROM版も含む）の刊行、合宿を実施している。

福田耕治編『EUの連帯とリスク・ガバナンス』成文堂、2016年

福田耕治編著『EU・欧州統合研究』改訂新版・成文堂、2016年

福田耕治・他『EU・国境を越える医療』文眞堂、2009年

福田耕治編著『多元化するEUガバナンス』早稲田大学出版部、2011年

Koji Fukuda, "Accountability and NPM reforms in the EU", *Envisioning Reform: Enhancing UN Accountability in the 21st Century*, UNU Press, 2009.

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	30%	学年末に課題レポートを提出する。
平常点評価 Class Participation	%	
その他 Others	70%	ゼミでの発表内容、意欲及び討議など、ゼミへの貢献度、各自のレポート、論文等を対象として総合的に評価する。

備考・関連URL
Note・URL

時事通信社『世界週報』2004年11月30日号に、本ゼミの紹介が掲載されている。

政治学演習Ⅰ

2017

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
117	政治学演習Ⅰ（藤井浩司）	春学期	3年以上：2単位	藤井 浩司
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副題 Subtitle

比較公共政策への接近

授業概要 Course Outline

20世紀後半期を通じて先進社会が共有してきた戦後コンセンサスの終焉が告げられている。21世紀になってさらに顕著になったこの〈揺らぎ〉は、既成の体制として構築された社会・経済・政治構造の抜本的な組み替えを迫っている。Restructuring, Realignmentなどといったフレーズで示される構造改革の課題は、特に政府／公共部門にとって「存立の危機」にかかわるほどにまで重くのしかかり、厳しく問い直されている。「モデルなき実験」、「羅針盤なき航海」ともいわれる課題への取り組みは、各国によってさまざまであり、再編の道程も定まっていない。自らの座標を定め、課題解決のためのオルタナティヴを探るうえで、各国の政策対応を整理・分析する意義はこれまで以上に大きいといえる。こうした問題関心から、各国における個別政策分野での政策対応の現状・課題・展望について検討していきたい。

授業の到達目標 Objectives

各自の研究課題に関する論文作成。
議題に関する質疑応答。講評力の涵養。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

プレ政治学演習の内容は以下の通り。

添付した「専門演習研究計画提出書類」を作成してください。分量は計画等2ページ＋参考文献等1ページ。参考文献は15冊以上。サンプル参照については、web上にアップすることができません。オフィスアワー研究室（金、土の昼時間）に来てください。

参考文献のうち3冊を選び、書評を書いてください。書き方については添付した「書評作成マニュアル」を参照のこと。分量は、1冊につきA4（40字×36行）1枚。

提出期限は、2017年2月6日23時59分。提出先は、コースナビ。

授業計画 Course Schedule

第1回－第15回：受講生研究報告＋質疑応答、講評・総括

教科書 Textbooks

別途随時指示する。

参考文献 Reference Books

評価方法 Evaluation

	割 合 (%) Percent (%)	評 価 基 準 Description
試 験 Examinations	%	
レポート Papers	30%	レジュメ内容、ターム・ペーパー、卒論。
平常点評価 Class Participation	50%	出席状況、参加意欲、授業運営への貢献。
そ の 他 Others	20%	ゼミ合宿などへのプロジェクトへの参加。

備考・関連URL Note・URL

ゼミナールは、3・4年合同で2時限連続で行います。フルタイム参加するのがゼミ加入の前提条件です。また、合宿（夏）、コンパ（随時）など課外活動への参加は、ゼミ参加の基本的な条件です。

政治学演習 I

2017

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
118	政治学演習 I (眞柄秀子)	春学期	3年以上：2単位	眞柄 秀子
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副題 Subtitle

世界各国の比較政治経済分析

授業概要 Course Outline

比較政治学の代表的な理論枠組みや分析手法を駆使して、現代政治経済のさまざまな「なぜ？」の解明に取り組む。検討テーマになりうるものは多岐にわたる。例えば、1980年代以降、先進諸国における経済的不平等を拡大させてきた要因とは何か。世界各国で、どのような政治が経済成長を促進・停滞させているのか。新自由主義の時代とは何だったのか、そして新しいパラダイムは生まれつつあるのか。経済危機、政治危機とはそれぞれ、どのような状態をいうのか。日本、イタリア、ドイツなどの国政選挙や、フランス大統領選、アメリカ大統領選の結果は、世界政治経済にどのようなインパクトを与えているのか。また、国際政治経済的变化は、国内政治経済にいかなる影響を及ぼしているのか。これらを含む多様な謎を比較政治学のアプローチで検討する。

アプローチのとり方は自由。比較政治学および比較政治経済学を前提としている限り、社会学的、歴史的、経済学のアプローチのどれを使ってもよい。ややヨーロッパにアクセントが置かれるが、分析対象は、先進諸国、アジア、アフリカ、ラテンアメリカのいずれの地域・国でもよい。各自がそれぞれの分析対象国に関する緻密な研究を行うと同時に、他のゼミ生の研究発表を通じて世界中の政治の現在を知り、さまざまな問題の解決の道を模索する。

またゼミでは、できる限り海外ゲストに講演していただく機会を作りたい。2016年は、パリ第一大学のアマーブル教授、EUIのシュミッター教授、ブルスト教授を招き、日本学術会議講堂にて国際シンポジウムを開催した。2015年は7月にアンドレア・レヴェラント准教授（ヴェネツィア大学）を中心とした国際シンポジウムを開催した。2014年度は7月にロンドン・スクール・オブ・エコノミクスのロナルド・ドーア教授、フランス米州研究機構のロベール・ボワイエ教授、ミラノ大学のアルベルト・マルティネッリ教授を招聘した。それぞれの会議において、ゼミ生も大学院生とともに積極的に参加した。今後も、ゼミ生のより活発な参加を期待したい。

授業の到達目標 Objectives

世界各国の政治経済の実態を把握し、比較政治学の理論や分析枠組みを用いてそれを分析することを通じて政治世界の今日的な諸課題に対して、政治学がどのように貢献できるのかを問いたい。日本語文献だけでなく、たくさんの英語文献を読みこなす。また、英語以外の外国語にも力を入れて勉強したい。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

第1回：イントロダクション（自己紹介とスケジュール調整等）

第2回－第6回：文献の講読と討論

下のリストを参考に必要に応じてより新しい文献も加えて、重要な理論枠組みを検討する。

(1) Ido, M. (ed.) (2012) *Varieties of Capitalism, Types of Democracy, Globalization*, London: Routledge.

(2) Magara, H. and S. Sacchi (eds.) (2013) *The Politics of Structural Reforms: Social and Industrial Policy Change in Italy and Japan*, Edward Elgar, UK.

(3) Magara, H. (ed.) (2014) *Economic Crises and Policy Regimes: The Dynamics of Policy Innovation and Paradigmatic Change*, Edward Elgar, UK.

第7回－第10回：グループ研究

テーマ別国別にチームを作り、各国最新の政治経済問題をアカデミックな視点からグループごとに研究し、報告する。

第11回－第14回：各自の研究予定課題発表と討論

第15回：研究計画書の提出とまとめ

教科書
Textbooks

ゼミにおいて指摘する。

参考文献
Reference Books

ゼミにおいて指摘する。

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	0%	なし
レポート Papers	20%	学期末の研究計画書の提出
平常点評価 Class Participation	80%	毎回のゼミでの貢献度
その他 Others	%	

備考・関連URL
Note・URL

比較政治学の主要理論を学び、仮説を立て、それを実証するというスタイルで勉強したい人向き。特定のテーマや地域・国に関心を持ち、その最新の展開をフォローするよう心がけてほしい。大学院進学希望者や、ゼミで習得した知識や国際性を仕事に活かしたい人が本格的に研究し多くを学べるゼミにしたい。

政治学演習Ⅰ

2017

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
119	政治学演習Ⅰ（谷澤正嗣）	春学期	3年以上：2単位	谷澤 正嗣
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副題 Subtitle

現代リベラリズムとその批判

授業概要 Course Outline

政治を語る際に用いられる重要な概念について分析しつつ、「権力とはどんな力か」「自由と平等を両立させる政治体制は可能か」「正義と不正義を判断する原理は何か」といった問題を扱うのが政治理論である。政治理論の研究は古典古代にさかのぼる歴史的次元と、きわめて抽象的な哲学的次元を有するが、現代の研究の多くは「リベラル・デモクラシー」と呼ばれる特定の具体的な体制をなかば自明の前提としている。リベラル・デモクラシーに含まれる価値や規範を肯定し正当化する志向を強くもつ政治理論を「現代リベラリズム」と呼ぼう。他方、それらの価値や規範に対する批判に重きをおく政治理論を「現代リベラリズム批判」と呼ぼう。本演習では、現代リベラリズムとそれを批判するさまざまな潮流のあいだの対話を追いながら、現代リベラリズムがどのように洗練されてきたか、それにもかかわらず存在している問題点は何かを明らかにする。

授業の到達目標 Objectives

- (1) 現代政治理論の主要な論点、とくに現代リベラリズムとその批判について理解する。
- (2) 哲学的な読解、思考、表現、討論の技法を学ぶ。
- (3) 政治学演習II、IIIおよびIVを受講し、演習論文を執筆するための能力を涵養する。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

第1回：イントロダクション 政治理論とは何か
第2回－第14回：ローレンス『正義論』講読
第15回：まとめと討論

教科書 Textbooks

川本隆史ほか訳『正義論』（紀伊国屋書店、2010年）を使用する予定であるが、受講生の希望を考慮して変更する可能性もある。

参考文献 Reference Books

川崎 修、杉田 敦編『新版 現代政治理論』（有斐閣、2012年）
太田義器、谷澤正嗣編『悪と正義の政治理論』（ナカニシヤ出版、2007年）
戸田山和久『新版 論文の教室』（NHK出版、2012年）
ウィル・キムリッカ（千葉、岡崎訳者代表）『新版 現代政治理論』（日本経済評論社、2005年）

評価方法 Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	50%	学期末に期末論文を課す。
平常点評価 Class Participation	50%	レジメによる報告、討論への積極的で協力的な参加、討論から明らかになる文献の理解度などを総合的に評価する。
その他 Others	%	

備考・関連URL Note・URL

選考課題（レポート）を課す。課題の詳細は掲示を参照のこと。ゼミの見学は随時歓迎する。希望者には参考資料を配布する。質問や相談は電子メールでどうぞ。

政治学演習 I

2017

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
120	政治学演習 I (吉野孝)	春学期	3 年以上：2 単位	吉野 孝
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副 題 Subtitle

現代デモクラシーの政治過程

授業概要 Course Outline

現代デモクラシーは、多くの観点から見直しを迫られている。日本では「55年体制」の崩壊以降、新しい政党政治の在り方が模索され、従来の政府・行政の在り方が再検討されている（行政改革・地方分権）。政権交代は、日本の政治を大きく変える実験であったものの、民主党政権の準備不足と首相のリーダーシップの欠如により、政治運営は満足のゆくものではなかった。そして、政権交代の潜在的意義が十分に理解されないまま、2012年12月に自民党が政権に復帰した。自民党の中では、「安倍一強」の言葉に象徴されるように、重要な政策競争は行われず、民進党を代表される野党の存在意義も低い。また、日本経済の再生、財政再建、震災復興、原発再稼働問題、領土をめぐる中国・韓国とのあつれきなど、解決が求められる政策課題が依然として山積みされている。さらに、これら新しい政策課題の出現とともに、住民投票やNPOなど新しい参加様式へ関心も高まっている。本演習の課題は、現代デモクラシーの政治過程についての理論と実際の研究をつうじて、現代デモクラシーの問題状況を把握しその解決策を展望することにある。

授業の到達目標 Objectives

疑問を研究テーマに変換し、それを論理的・段階的に思考し、そのプロセスを長い文章で表現する能力を習得する。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

第1回：4年生の報告（3名）を聞き、ディスカッションに参加する。その後でサブゼミとして、共同研究の準備を行う（テーマ選択とチーム分け）。
 第2回：4年生の報告（3名）を聞き、ディスカッションに参加する。その後でサブゼミとして、共同研究の準備を行う（チームごとのディスカッション）。
 第3回：4年生の報告（3名）を聞き、ディスカッションに参加する。その後でサブゼミとして、共同研究の準備を行う（チームごとのディスカッション）。
 第4回：4年生の報告（3名）を聞き、ディスカッションに参加する。その後でサブゼミとして、共同研究の準備を行う（チームごとの研究計画の発表）。
 第5回：4年生の報告（3名）を聞き、ディスカッションに参加する。仮説・リサーチクエスチョンのづくり方。
 第6回：4年生の報告（3名）を聞き、ディスカッションに参加する。仮説・リサーチクエスチョンのづくり方。
 第7回：仮説・リサーチクエスチョンのづくり方。
 第8回：仮説・リサーチクエスチョンのづくり方。
 第9回：仮説・リサーチクエスチョンのづくり方。
 第10回：共同研究のグループ報告①とディスカッション。
 第11回：共同研究のグループ報告②とディスカッション。
 第12回：共同研究のグループ報告③とディスカッション。
 第13回：共同研究のグループ報告④とディスカッション。
 第14回：共同研究のグループ報告⑤とディスカッション。
 第15回：秋学期（演習Ⅱ）における個人研究テーマの発表。

教科書
Textbooks

最初の演習時に、ゼミ論の書き方、注の表記方、参考文献一覧などを配付する。その後は、必要に応じて、授業の中で紹介する。

参考文献
Reference Books

最初の演習時に、ゼミ論の書き方、注の表記方、参考文献一覧などを配付する。その後は、必要に応じて、授業の中で紹介する。

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	%	
平常点評価 Class Participation	100%	出席40%、報告30%、ディスカッションへの参加30%。
その他 Others	%	

備考・関連URL
Note・URL

政治学演習Ⅰ

2017

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
121	政治学演習Ⅰ(坪井善明)	春学期	3年以上：2単位	坪井 善明
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副 題 Subtitle

東南アジアの政治と社会

授業概要 Course Outline

ASEAN10カ国だけでなく、インド、中国、台湾、韓国を含む東南アジア、東アジアに関心を持つ諸君の参加を求めます。三年生の前半は、これらの地域の現状を分析するための社会学的な基礎文献の購読を中心にゼミは展開されます。

アンダーソン、サイード、センなどの外国人研究者の文献だけでなく、中西 徹、末廣 昭、白石 隆などの日本人研究者の文献も渉猟します。3年秋学期からは、グループに分かれて、担当の地域や国を決めて、各地域や各国の歴史・地理・政治・経済・文化などを包括的にかつ深く勉強して、自分の卒論のテーマを探します。4年生になってからは、自分の卒論のテーマを決め、それを書くための資料収集や現地調査をしてもらい、卒論完成に向けて中間発表や合宿などを行います。4年生の最後には研修旅行として、ベトナムに行つて、ハノイ大学・ホーチミン市大学との学生との討論会を予定しています。

授業の到達目標 Objectives

政治学を中心とした社会科学の古典・名著・刺激的な本等を「読み・書き・考える」ことを通して、更に東南アジア・東アジア一国を深く研究することを通じて、生涯にわたって「総合的な知識人」に自分を知的に鍛え上げていく方法を学びます。そして、大学を出て社会人になっても「真理の前の学び人」として一生自ら勉強に励む習慣を身につけることが出来る方法と基礎知識を習得することを目標とします。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

前期1回—15回、毎回、指定図書を指示して、2,000字の制限の中で受講生の人数分だけコピーしてきて全員が発表を行う。相互に批判しながら、意見交換を行うゼミ形式とする。

後期16回—30回、前半は夏休みの課題の指定図書の読後発表を行う。

韓国・中国から東南アジア・インドまでの地域に分かれてグループを形成して、グループで学習を行い、グループ発表を2回行う。それを相互に批判しあう形式のゼミを行う。

教科書 Textbooks

授業中に指示する。

参考文献 Reference Books

坪井善明『ベトナム「豊かさ」への夜明け』、『ベトナム新時代—「豊かさ」への模索』(岩波新書)を事前に読了しておくこと。

評価方法 Evaluation

	割 合 (%) Percent (%)	評 価 基 準 Description
試 験 Examinations	0%	試験は、毎回の2,000字の論文を評価するので、行わない。
レポート Papers	50%	毎回2,000字（1,980-2,000字）を提出してもらい、全員が自分の論考を読んでもらって討論を行う。
平常点評価 Class Participation	20%	出席点
そ の 他 Others	30%	4年次の卒業論文、3年次は毎回のレポートと平常点の合計で評価。

備考・関連URL Note・URL

課題書は参加学生と協議して決定する。ゼミへの出席は重視し、100%出席が原則と考えてもらいたい。

経済学演習 I

2017

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
201	経済学演習 I (荒木一法)	春学期	3 年以上：2 単位	荒木 一法
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副 題 Subtitle

企業と家計の行動分析 (応用ミクロ経済学)

授業概要 Course Outline

(目的) 本演習は、企業と家計の行動分析を題材として、参加者の分析力とコミュニケーション能力を向上させることを主たる目的とします。

(方法) 伝統的なミクロ経済学に加えて、ゲーム理論や契約理論を具体的な分析事例を交えて学ぶことで、参加者の分析力の質を高め、幅を広げることを試みます。また、プレゼンテーションと討論の機会をできるだけ多く確保するとともに、適宜短いレポートの提出を求め、参加者の「話す力」「書く力」の向上に努めます。

(題材の説明) 主に企業の戦略決定(投資・資金調達行動、マーケティングなど)と資金仲介者(銀行・証券会社等)の行動を分析し、時間的余裕があれば家計の消費・貯蓄・資産選択行動も扱いたいと考えています。これらのトピックをミクロ経済理論を用いて分析する文献を輪読するとともに、関連ニュースを報じる和文および英文の新聞・雑誌等の記事を題材にディスカッションをおこない理論の応用力を強化します。

(授業の進め方) 春学期は共通のテキストにつかっ、参加者が担当箇所を発表していきます。例年は各人3回の発表機会があります。夏合宿では事前に設定した課題について調査し、その結果を口頭で発表するとともに、レポートとしてまとめ提出してもらいます。

(授業時間について) ゼミは、3年4年合同で月曜4時限、5時限連続で行います。

(授業以外のゼミ活動) 主に月曜6時限(ゼミ終了後)を使って、年間数回のペースで実務の第一線で活躍されているゲストスピーカーによる講義を実施する予定です。追加講義を設定する理由は、ゼミに参加する皆さんにあたらしい知識・視点にふれる機会、将来の進路について考える機会を提供することにあります。月曜4時限&5時限以外の時間に実施される活動については、参加を必須とはしませんが、ゼミ生諸君には、これらの活動にも積極的に参加することを期待します。

授業の到達目標 Objectives

- ・状況に応じたプレゼンテーションをおこなうことができる。
- ・ディスカッションにおいて、自らの考えを効果的に伝えたり、多様な意見を整理し集約したりすることができる。
- ・ミクロ経済理論の応用力を強化し、与えられた事例に即応的分析を加えることができる。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

- 第1回：プレゼンテーションに関する留意点 (講義)
 第2回～第14回：受講生によるプレゼンテーションとディスカッション
 第15回：夏休みの課題の説明

教科書 Textbooks

春学期は共通のテキストを輪読します。テキストは、教員が示すリストの中から参加者と相談して決定します。

16年度春学期は次の2点を輪読しました。

小田切著『企業の経済学(新版)』東洋経済

古川・守口・阿部著『マーケティング・サイエンス入門(新版)』有斐閣アルマ

参考文献 Reference Books

適宜紹介します。

評価方法 Evaluation

試 験 Examinations	割 合 (%) Percent (%)	評 価 基 準 Description
レポ ² ート Papers	40%	期末レポートを評価します。
平常点評価 Class Participation	60%	プレゼンテーションの内容とディスカッションへの貢献を評価します。
そ の 他 Others	%	

備考・関連URL Note・URL

経済学演習Ⅰ

2017

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
202	経済学演習Ⅰ（有村俊秀）	春学期	3年以上：2単位	有村 俊秀
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副 題 Subtitle

環境経済学

授業概要 Course Outline

地球温暖化問題、大気汚染問題、廃棄物問題などの環境問題を分析する環境経済学を学びます。また、関連する再生可能エネルギーなどエネルギー問題・政策についても経済学的にアプローチします。分析手法としては、ミクロ経済学や、統計学を用いた計量経済学を用います。そのため、ゼミでは統計分析・計量分析の手法も学びます。コンピュータールームでの統計分析の実習も行います。春学期は、教科書の輪読を行いながら、研究活動の方法について理解を深めます。ゼミでは、欧州・米国あるいはアジアの環境政策についても学ぶ予定です。

また、2016年度秋学期中にプレ演習を行います。そこでは、本格的なゼミ活動を行うまでの準備を行います。

授業の到達目標 Objectives

本演習では、環境経済学の論文を書くことを目標としています。そのため、前半は、環境経済学の考え方を理解することを目指します。論文執筆では、定量分析をすることを目指すため、分析に必要な統計学、計量経済学の手法を修得することも目標です。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：教科書輪読①
- 第3回：教科書輪読②
- 第4回：ゼミ論執筆について
- 第5回：教科書輪読③
- 第6回：教科書輪読④
- 第7回：個人発表①
- 第8回：個人発表②
- 第9回：個人発表③
- 第10回：計量・データ分析入門①
- 第11回：グループ発表①
- 第12回：グループ発表②
- 第13回：グループ発表③
- 第14回：計量・データ分析入門②
- 第15回：まとめ

教科書 Textbooks

第1回目に提示する。

参考文献
Reference Books

「入門 環境経済学」日引 聡・有村俊秀著（中央公論新社）
「環境規制の政策評価：環境経済学の定量的 アプローチ」有村俊秀・岩田和之著（上智大学出版会・ぎょうせい）

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	50%	研究論文が書けるようになる。
平常点評価 Class Participation	50%	毎回参加し、ゼミに積極的に参加する。
その他 Others	%	

備考・関連URL
Note・URL

統計学、計量経済学の知識を持っている方が望ましいですが、理論分析、環境政策の制度に関心がある人も歓迎します。

関連URL：

<http://www.f.waseda.jp/arimura/>

ゼミ履修者には、学部環境経済学及び計量経済学の受講をお願いします。

経済学演習Ⅰ

2017

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
203	経済学演習Ⅰ（上田貴子）	春学期	3年以上：2単位	上田 貴子
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副題 Subtitle

経済データ解析

授業概要 Course Outline

本専門演習は、データ及びデータ解析に基づいて自ら調べ考える姿勢を身につけることを目標とする。
2年次のプレゼミでは、統計学入門レベルのExcel実習と、SPSSによる多変量解析の実習を自習し、レポート提出を要件とする。
プレゼミを前提として、本演習Ⅰでは、グループ毎にトピックを選定し、選定したテーマについて、（１）専門書・白書等の公的報告書を読む、（２）関連データを精査して統計分析・回帰分析・多変量解析等を行い、（３）演習で分析結果を報告し、（４）レポートにまとめる。なお、夏休み期間中に他大学との合同演習・合同合宿を行うことがあり、準備を行うことがある。また、統計学２級検定の受験を推奨する。

授業の到達目標 Objectives

学生諸君の多くは大学卒業後、社会へ巣立つ。周囲に氾濫する情報や一般常識などを鵜呑みにするのではなく、自分にとっての「正解」を自分でみつけていく能力は、職業生活においても個人生活においても役にたつと考えられる。本演習では、自ら疑問を持ち、調査を行い、数字やデータなどの客観的根拠をもって自らの考えをまとめ、さらにその考えを他者に向かってわかりやすくアピールする能力の基本を身につけることを目標とする。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

「統計学」の履修を前提条件とし、「計量経済学」の並行履修を要件とする。統計学・計量経済学の知識の復習と、グループで選定したテーマに関する自主的な勉強が必要であり、演習では事前に勉強した内容に基づいて報告・議論を行う。

授業計画 Course Schedule

ゼミの履修者に興味と学習水準に応じて、文献の講読及びパソコン実習を行う。無断欠席は本演習の放棄とみなす。やむを得ない理由によって欠席する場合にもレポートを課す。
第1回： 春学期の演習の進め方について
第2－6回： 各グループで選定したトピックについて関連文献を購読する。
第7－9回： トピックに関連した実証分析文献を購読する。
第10－12回： クロス・セクション・データを用いた回帰分析を行い、分析結果を報告する。
第13－15回： グループ別の調査報告と討論

教科書 Textbooks

なし

参考文献 Reference Books

なし

評価方法 Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	60%	レポート
平常点評価 Class Participation	40%	出席、文献購読の報告、討論への参加、ゼミ論の報告等により評価する。
その他 Others	%	

備考・関連URL Note・URL

ゼミ論の作成のためには、統計学の知識と統計ソフトウェアを使用した統計分析手法が必須である。「統計学入門」「統計学」を2年次までに、当該学期中までに「計量経済学」を必ず履修すること。秋学期の経済学演習IIでは、「現代経済政策分析」の履修を必須とする。また「政治経済の計量分析」の履修を強く推奨する。なお、選定トピックに関する科目も必ず履修すること。

経済学演習 I

2017

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
204	経済学演習 I (上田晃三)	春学期	3 年以上：2 単位	上田 晃三
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副 題 Subtitle

日本の経済・物価情勢の判断と見通し

授業概要 Course Outline

本演習では、最近の日本経済について、①その概要のほか、②それを分析するための経済指標の使い方、③背景にある経済学的な考え方について、習得することを目標とする。

受講にあたっては、数学（微積分、行列）、統計、マクロ経済学の知識は必須。

授業の到達目標 Objectives

上述の①～③のほか、④レポートやディスカッションでの表現力も養う。この中で最も重視するのは③。経済学というフレームワークを通して、自身で考える力を身につける。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

第1～5回：経済・物価情勢の現状について、文献の輪読
第6～15回：経済・物価情勢の予測作業と発表

足もとの経済・物価情勢を判断し予測することを目的とする。学生一人一人に対して、個人消費、設備投資、財政、輸出入、物価、雇用などの担当を割り振り、その動向を随時モニター、報告させる。7月末、10月末、1月末に各担当で予測を作り、翌月の統計発表時に答え合わせを実施。この際、背景にある経済学的なロジックを理解し実践すること、データを自身で集め統計的に分析すること、分析の内容をわかりやすく報告することが各自の課題となる。なお、分析対象はあくまで実体経済まわりであり、株価、為替のような金融変数ではない。

教 科 書 Textbooks

特になし

参考文献 Reference Books

題材としては、主に日銀資料（展望レポート、金融経済月報など）を用いるほか、政府（経済財政白書など）や国際機関（IMF・WEOなど）の資料も参照する。

マクロ経済学、統計、数学の教科書

評価方法 Evaluation

	割 合 (%) Percent (%)	評 価 基 準 Description
試 験 Examinations	%	
レポ ² ート Papers	%	
平常点評価 Class Participation	100%	輪読でのプレゼン内容、グループ討議での貢献度合い、発表の内容。 出席は必須。
そ の 他 Others	%	

備考・関連URL Note・URL

出席と毎回のゼミへの貢献（発表、質問、コメントなど）は必須。
2年次のプレゼミは、1～2回のレポート提出、3・4年生のゼミへの数回の参加を課す予定。

経済学演習Ⅰ

2017

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
205	経済学演習Ⅰ（荻沼隆）	春学期	3年以上：2単位	荻沼 隆
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副 題 Subtitle

不完全情報とゲームの理論を中心としたミクロ経済学

授業概要 Course Outline

この演習では、主に、不完全情報の経済学とゲームの理論を用いた経済分析を学ぶ。この分野は、ミクロ経済学の中級レベル以上のテキストにはほとんど含まれているが、ミクロ経済学の講義の中では、通常部分的にしかカバーできていない。この講義では、まず不完全情報の経済学とゲームの理論の標準的な内容を学習する。その上で、限定合理性を考慮した分析のように発展的な研究を行うか、特定の分野に関するやや現実的な応用研究を行うことを目的とする。

授業の到達目標 Objectives

ミクロ経済学・ゲーム理論の基本的内容を理解し、それらを現実の経済問題の分析に用いることができるように学習する。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

第1回－第10回：ミクロ経済学もしくはゲーム理論のテキストを輪読し、その内容について議論する。
第11回－第15回：ミクロ経済学もしくはゲーム理論に関連した現実の問題を一つ取り上げ、3－4人のグループに分けて、グループ発表をしてもらう。

教 科 書 Textbooks

未定。

参考文献 Reference Books

未定。

評価方法 Evaluation

	割 合 (%) Percent (%)	評 価 基 準 Description
試 験 Examinations	%	
レポート Papers	50%	内容の正確さおよび問題設定・分析力を考慮する。
平常点評価 Class Participation	50%	出席および授業への参加度、授業内での発表を総合的に考慮する。
そ の 他 Others	%	

備考・関連URL Note・URL

学生に対する要望：ミクロ経済学とゲーム理論に関係する演習なので、演習参加者は、事前にミクロ経済学とゲーム理論の基礎知識があることが望まれる。それがあまりない場合は、演習での最初のテキストブックの学習の時点で、キャッチアップするやる気のあることが前提条件になる。

経済学演習 I

2017

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
206	経済学演習 I (笠松学)	春学期	3 年以上：2 単位	笠松 学
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副 題 Subtitle

経済成長と所得分配

授業概要 Course Outline

我々が行っている様々な経済活動の結果を、最も包括的にとらえた指標の一つは国内総生産（GDP）とよばれる。ある国の景気が良いとか悪い、あるいは経済政策が上手くいっているとかいないとかいう時にも、この指標がしばしば持ち出される。また、長い期間にわたってGDPが増加すると経済は成長したと言われ、成長する国は豊かになり、あまり成長しない国は遅れをとっていると言われたりもする。GDPが長い間に、なぜ、そしてどのように変化するかを考えることは、こうした様々な意見に対して自分の考え方を表明する上でも役立つだろう。

他方、このGDPは、所得が分配される有様を記述する際にも使われる。さらに、人々は遺贈・相続・贈与といったかたちで、富をやり取りする。このような所得や富の分配は、様々な格差や不平等を考える上で一つの焦点になる。また、分配のされ方と経済成長との間にどのような関係があるのかを考えることも興味深い。

本演習では、経済成長と所得や富の分配に関するこうした様々な問題を取り上げ、互いに議論することで自分の考えを深め、世間で行われる経済論議への自分なりの観点を確立できるよう努める。

最後に、そうした中から各自でテーマを選び、一つの論文として仕上げる。

授業の到達目標 Objectives

1. 自分（たち）が担当するテーマ報告をし、内容を自分（たち）以外の人たちに理解させるように努める。
2. 自分以外の人たちの報告を聞き、質問・コメントしたり、その内容を理解した上で自分の観点到てて議論できるようにする。
3. 自分の関心に従ってテーマを決め、必要な準備を施して一つの論文を完成させる。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

報告に必要なレジュメなどを作成し、当日の活動記録を後日確認する。

授業計画 Course Schedule

第1回－第5回：基礎知識の確認と補足
 第6回－第10回：基礎知識の確認と補足(2)
 第11回－第15回：成長理論と分配理論の検討・討論
 第16回－第22回：成長理論と分配理論の検討・討論(2) 成長・分配理論の応用
 第23回－第29回：成長・分配理論の応用(2) および各自のテーマに基づく発表・討論
 第30回：理解度の確認

教科書 Textbooks

春学期は、主に基礎的な知識を身に付けるために充てることが多い。
 その際に、どのようなテキストを使用するかは参加者と相談して決める予定。

参考文献
Reference Books

フォーリー&マイクル（佐藤・笠松監訳）、『成長と分配』（2002年、日本経済評論社）を参照すると、成長・分配理論の内容の一部を知ることができる。

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	%	
平常点評価 Class Participation	100%	演習に参加し、報告をしたり議論をしたりする。 適宜、エッセイを書き、課題を完成させる。
その他 Others	%	

備考・関連URL
Note・URL

演習は、講義では十分にできない少人数の参加者間での質疑応答や議論を通じて、自分の経済学（に止まらない、その他の分野の）理解を確認し、深めるために絶好の機会となる。また、これまでの経済学の勉強内容に不安がある場合でも、それを解消できる絶好の場にもなる。積極的に活用して欲しい。

言い換えると、演習に全員が参加して議論に加わる、あるいは議論を先導することが必須となる。

通例、夏休み中に合宿が予定されるので、各自の休み中の計画と整合させる必要がある。

経済学演習 I

2017

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
207	経済学演習 I (川口浩)	春学期	3 年以上：2 単位	川口 浩
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副 題 Subtitle

日本経済の歴史的展開とその思想

授業概要 Course Outline

経済という行為は、時代・地域を問うことのない人間の普遍的な営為の一つである。

しかし、経済の実態は、ある一つの限定された時代・地域における特定の人々の行為の結果であり、従って一様なものではない。日本列島と呼ばれる地域に展開した経済も、地理的・時代的条件とそこに生きた人々の特質とが作り上げた人間活動の一つの結果である。

本演習の課題は、日本における近世－近現代の経済の実態、及び、それを担った人々の経済思想に接近することである。

ゼミ生の選考に際しては面接を行う。選考の第1基準は、積極的な学習姿勢である。各週の授業は勿論、合宿その他の活動への積極的参加も必須である。また、本演習の参加者は、すべての経済史関係科目を履修することが望ましい。

■ゼミの申込書には出身高校を記入して下さい。ゼミの申し込みが終わった段階で、その旨を <kawaguti@waseda.jp> に送信して下さい。面接の時間・場所を発信元へお知らせします。

授業の到達目標 Objectives

日本の経済史および経済思想史の特性を専門的に理解すること。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

2016年度秋学期のプレ演習：ワセダを知り、ワセダを通して近代日本を考える。

第1回：ゼミの運営について説明

第2回：研究報告と討論

第3回：研究報告と討論

第4回：研究報告と討論

第5回：研究報告と討論

第6回：研究報告と討論

第7回：研究報告と討論

第8回：研究報告と討論

第9回：研究報告と討論

第10回：研究報告と討論

第11回：研究報告と討論

第12回：研究報告と討論

第13回：研究報告と討論

第14回：研究報告と討論

第15回：理解度の確認

教科書 Textbooks

参考文献
Reference Books

川口浩編『日本の経済思想 時間と空間の中で』（ペリカン社、2016年）
 川口浩・石井寿美世・グラムリヒ=オカ・劉群芸『日本経済思想史 江戸から昭和』（勁草書房、2015年）
 川口浩、ベティーナ・グラムリヒ=オカ編『日米欧からみた近世日本の経済思想』（岩田書院、2013年）
 太田愛之・川口浩・藤井信幸『日本経済の二千年』（勁草書房、2006年）
 川口浩編著『日本の経済思想世界』（日本経済評論社、2004年）

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	%	
平常点評価 Class Participation	100%	積極的な授業参加。
その他 Others	%	

備考・関連URL
Note・URL

正当な理由のない欠席等の怠業は一切認めない。以後の出席無用。
 関連URL： <http://www.f.waseda.jp/kawaguti/>, <http://www.waseda.jp/prj-jetts/>

経済学演習 I

2017

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
208	経済学演習 I (近藤康之)	春学期	3 年以上：2 単位	近藤 康之
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副 題 Subtitle

貿易、環境、経済効果の計量分析

授業概要 Course Outline

製品を生産するには半製品や電力などが必要であり、半製品や電力を生産するには原材料や天然資源が必要です。製品のサプライチェーンは、さまざまな生産プロセス（あるいは産業）の複雑なネットワークにより構成されています。経済のグローバル化が進んだ現代においては、製品のサプライチェーンは世界各国に広がっています。したがって、我々の消費活動は国内産業だけでなく、貿易を通じて他国の産業にも影響を与えます。また、生産活動により不可避免的に廃棄物や温室効果ガスなどが排出されるため、我々の消費活動は様々な地域の自然環境にも影響を与えます。持続可能な消費と生産を実現するためには、製品の国際サプライチェーンに関するデータに基づく理解が必須です。

この演習では、貿易、環境、経済効果の計量分析の主たる方法として産業連関分析と回帰分析を学びます。学んだ方法をデータに適用して分析すること、およびレポート執筆と口頭発表を通してソフトウェア使用とプレゼンテーションの技術を向上することも重視します。

2 年生の秋学期後半に実施するプレ演習では、貿易、環境、経済効果の産業連関分析に関する分析事例を通して、産業連関分析がどのように用いられているかを学びます。

授業の到達目標 Objectives

産業連関分析と回帰分析の基礎的方法を理解し、それを実際にデータに適用して貿易、環境、経済効果の計量分析を行えるようになること。また、分析結果をレポートおよび口頭により発表する技術を向上すること。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

産業連関分析と回帰分析の方法は、関連する講義（計量経済学、経済学研究）で学習します。ゼミの時間に教科書の輪読などはいりません。4 人程度のグループで11月までに共同論文を執筆するために予備的分析を行うことが春学期中の課題です。最初の数回を除いて、ゼミの（ほとんどの）時間には、共同論文のためのグループワークを行います。

第1回－第6回：共同研究論文のテーマ検討

第7回－第15回：共同研究論文のためのグループワークおよび進捗報告

教科書 Textbooks

指定しません。

参考文献
Reference Books

学期の途中で随時指示します。

尾山大輔・安田洋祐（編著）（2013）『改訂版 経済学で出る数学：高校数学からきちんと攻める』日本評論社

小長谷一之・前川知史（編）（2012）『経済効果入門：地域活性化・企画立案・政策評価のツール』日本評論社

藤川清史（2005）『産業連関分析入門：ExcelとVBAでらくらくIO分析』日本評論社

Miller, R. E.; Blair., P. D. (2009) Input-Output Analysis: Foundations and Extensions, 2nd ed. Cambridge University Press

Nakamura, S.; Kondo, Y. (2009) Waste Input-Output Analysis: Concepts and Application to Industrial Ecology. Springer

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	50%	宿題、共同研究論文（予備的分析）
平常点評価 Class Participation	50%	グループワーク、進捗報告のプレゼンテーション
その他 Others	%	

備考・関連URL
Note・URL

以下の講義を3年次までに必ず登録・履修してください：計量経済学、経済学研究（近藤康之）。

経済学演習 I

2017

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
209	経済学演習 I (西郷浩)	春学期	3 年以上：2 単位	西郷 浩
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副 題 Subtitle

Rによる統計分析

授業概要 Course Outline

R (フリーの統計環境) による実習を通して、統計分析の基礎を学ぶ。学部の「統計学入門」と「統計学」の履修を前提とする。

プレ演習では、「統計学」の復習を兼ねて、統計検定 2 級の過去の問題をゼミ生で解きます。秋学期に実施される統計検定 2 級合格を目標とします。

授業の到達目標 Objectives

R をもちいて、基本的な統計分析 (記述統計と推測統計の基礎) が自力でできるようになること。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

事前の学習：R のプログラムのテスト・ラン。

事後の学習：ゼミにおける疑問点のおさらい。

授業計画 Course Schedule

教科書の輪読・実習 1
教科書 [1] の輪読と実習
教科書の輪読・実習 2
教科書 [1] の輪読と実習
教科書の輪読・実習 3
教科書 [1] の輪読と実習
教科書の輪読・実習 4
教科書 [1] の輪読と実習
教科書の輪読・実習 5
教科書 [1] の輪読と実習
教科書の輪読・実習 6
教科書 [1] の輪読と実習
教科書の輪読・実習 7
教科書 [1] の輪読と実習
教科書の輪読・実習 8
教科書 [1] の輪読と実習
教科書の輪読・実習 9
教科書 [1] の輪読と実習
教科書の輪読・実習 10
教科書 [1] の輪読と実習
教科書の輪読・実習 11
教科書 [1] の輪読と実習
教科書の輪読・実習 12
教科書 [1] の輪読と実習
教科書の輪読・実習 13
教科書 [1] の輪読と実習
教科書の輪読・実習 14
教科書 [1] の輪読と実習
教科書の輪読・実習 15
教科書 [1] の輪読と実習

教科書
Textbooks

教科書[1]は、ゼミ生と相談して決めます。

参考文献
Reference Books

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	50%	Rをもちいた統計分析のレポートについて、(1)データ、(2)分析手法、(3)分析結果、の観点から内容の妥当性を評価する。
平常点評価 Class Participation	50%	グループ発表の準備・発表内容・質疑応答の様子を評価の対象とする。
その他 Others	%	

備考・関連URL
Note・URL

選考に当たっては、以下を重視する。

- (1)過去の講義の出席率が8割以上であること。
- (2)合宿をふくめて、ゼミのすべての行事に参加できること。
- (3)自分でテーマを設定して根気よく取り組むことができること。

過去のゼミの記録を以下で参照できる。

<http://www.f.waseda.jp/saigo/info/seminarsupervision.htm>

経済学演習 I

2017

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
210	経済学演習 I (笹倉和幸)	春学期	3 年以上：2 単位	笹倉 和幸
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副 題 Subtitle

マクロ経済学の歴史的・理論的研究

授業概要 Course Outline

1 年次の「マクロ経済学入門」(＝初級マクロ経済学)、2 年次の「マクロ経済学A, B」(＝中級マクロ経済学)で修得した知識を前提として、マクロ経済学についてさらに歴史的・理論的に研究する(したがって2 年次でマクロ経済学Bを履修していない人は3 年次で受講すること)。一般に、マクロ経済学を研究する人の目標は次の2 つに大きく分けることができる。すなわち、歴史的側面を重視すれば、①ケインズ『一般理論』以降のマクロ経済学の展開を独自の視点でとらえる、ということが目標である。あるいは、理論的側面を重視すれば、②扱いやすく信頼できるマクロ・モデルを作る、ということが目標になる。このゼミでは、どちらかの目標(できれば両方の目標)に向かって研究することになる。そして、マクロ経済学のどの部分が正しくて、どの部分がそうでないか(そしてさらには、どうすればそれを克服できるか)、という(壮大な)問いに対して自分自身の答えを少しでも見つけてほしい。

注：2016年度秋学期の「プレ演習」の内容は上級生のゼミへの参加と課題提出である。そのためできるだけ秋学期の火曜日5 時限(または4 時限)を空けておいてください(ただしすでに取り予定の授業がある場合はそちらを優先してかまわない)。

授業の到達目標 Objectives

マクロ経済学を歴史的・理論的に十分理解し、マクロ経済学の現状に対して自分自身の考えをもてるようになる。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

ケインズ『一般理論』を毎週2 章ずつ読んで報告書を作成する。所要時間は毎週90分。

授業計画 Course Schedule

第1 回：ケインズ『一般理論』
ケインズ『一般理論』について説明します。
第2 回：古典派理論とセイの法則
古典派理論とセイの法則について説明します。
第3 回：有効需要の原理
有効需要の原理について説明します。
第4 回：消費理論
消費理論について説明します。
第5 回：乗数理論
乗数理論について説明します。
第6 回：投資理論
投資理論について説明します。
第7 回：流動性選好説
流動性選好説について説明します。
第8 回：貨幣数量説
貨幣数量説について説明します。
第9 回：ハロッドの経済動学
ハロッドの経済動学について説明します。
第10 回：ケインズ派の景気循環理論
ケインズ派の景気循環理論について説明します。
第11 回：ヒックスとIS-LMモデル

ヒックスとIS-LMモデルについて説明します。
 第12回：マネタリズムと合理的期待形成学派
 マネタリズムと合理的期待形成学派について説明します。
 第13回：新しいケインズ派経済学
 新しいケインズ派経済学について説明します。
 第14回：新古典派経済成長理論
 新古典派経済成長理論について説明します。
 第15回：フリードマンとケインズ
 フリードマンとケインズについて説明します。

教科書 Textbooks

ケインズ（塩野谷祐一訳）『雇用・利子および貨幣の一般理論』東洋経済新報社、1995年。

参考文献 Reference Books

- （1）ローマー（堀雅博・岩成博夫・南條隆訳）『上級マクロ経済学』日本評論社、2010年。
- （2）スノードン=ヴェイン（岡地勝二訳）『マクロ経済学はどこまで進んだか』東洋経済新報社、2001年。
- （3）Mankiw, N. Gregory, 2006, “The Macroeconomist as Scientist and Engineer,” Journal of Economic Perspective, Vol. 20, pp. 29-46. 等々

評価方法 Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	40%	3年次はタームペーパー、4年次はゼミ論文の質で評価する。
平常点評価 Class Participation	60%	遅刻なしの全出席が大前提である。そのうえで授業中の発言等を考慮する。
その他 Others	%	

備考・関連URL Note・URL

経済学演習Ⅰ

2017

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
211	経済学演習Ⅰ(鎮目雅人)	春学期	3年以上：2単位	
		2013年度以前入学		2014年度以降入学
		政政・経演・国演		政専・経専・国専

副 題 Subtitle

世界の中における日本経済の歴史

授業概要 Course Outline

われわれが生きている現在は、過去から未来へと続く長い歴史の一局面である。本演習では、世界経済における日本の位置を意識しつつ、近世～近代～現代の日本経済史上の転換点に焦点をあてて、当時の時代の「空気」に触れながらその歴史的意義を考える。春学期には、経済史に関するカレントなトピックを選び、既存研究を批判的に検討することを考えている。毎回、参考文献・資料を輪読し、全員でディスカッションを行うことを想定しているので、参加者全員があらかじめ参考文献に目を通しておくことが期待される。履修者は、2年生秋学期までに「経済史入門」、3年生春学期に「国際日本経済史」を履修すること。

授業の到達目標 Objectives

日本経済史に関する報告とディスカッション、および論文作成を通じて、経済史を学ぶための「視点」を養うとともに、経済史研究を行うための基礎的方法論を習得する。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

2年生の秋学期後半のプレ演習では、3年生の春学期からのゼミ準備のために必要な文献を各自読んでもらうことを考えている。

授業計画 Course Schedule

第1回：授業の進め方
第2回～第15回：輪読

教科書 Textbooks

指定しない。

参考文献 Reference Books

その都度指示する。

評価方法 Evaluation

	割 合 (%) Percent (%)	評 価 基 準 Description
試 験 Examinations	%	
レポート Papers	%	
平常点評価 Class Participation	%	
そ の 他 Others	100%	授業への参加とディスカッションへの貢献により評価する。

備考・関連URL Note・URL

経済学演習Ⅰ

2017

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
212	経済学演習Ⅰ（白木三秀）	春学期	3年以上：2単位	白木 三秀
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副 題 Subtitle

労働・人的資源に関する国際比較研究

授業概要 Course Outline

本演習では「21世紀の労働・仕事」に関する国際比較研究を行う。仕事・労働は人間社会が続く限り、未来永劫に続く研究課題である。人的資源が有効に活かされて初めて経済社会の発展がある。

経済社会では現在、短期的のみならず中長期的にも様々な変化が起こっている。経済環境の変動にともなって、労働市場、職業構造、キャリア、仕事内容、労働者意識などが変わる。またこれに応じる形で、企業内の人的資源管理、政府の労働政策も変化しつつあるが、経済活動がグローバル化しているため、広い視野が必要とされている。本演習では、「現代における労働・人的資源の国際比較」に的を絞り、それを掘り下げて検討していきたい。

企業訪問やディベートなども随時取り入れ、ゼミ生同士で切磋琢磨し、現実感覚や論理的思考能力の涵養を行いたい。

授業の到達目標 Objectives

日本企業が国際展開を加速する中で、労働政策の対応、人材や労働の内容や変動、さらには企業内の人的資源の開発・管理がどのようになっていくのかについて、個々人の見方や考え方をロジカル、かつデータに基づき説得力を伴って論じられるようになることが、当面のゼミ活動の到達目標である。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

第1回－第15回：テキストをグループで発表し、コメンテーターからコメントを受け、質疑に答える。

第16回－第18回：他大学とのディベートを行う。

第19回－第30回：テキストの報告、コメント、質疑を行うとともに、4年生の卒論の経過報告、質疑を行う。

教科書 Textbooks

その都度、提示する。

参考文献 Reference Books

その都度、提示する。

評価方法 Evaluation

	割 合 (%) Percent (%)	評 価 基 準 Description
試 験 Examinations	0%	実施しない。
レポート Papers	30%	ゼミ内での発表レジュメ、企業・行政機関・専門家・個人に対するヒアリング調査結果の報告書、発表内容の質的レベルなど。
平常点評価 Class Participation	70%	ゼミへの出席と参加度合、他の学生との課題の対する協力度合い、他の学生への指導力・影響度など。
そ の 他 Others	0%	特になし。

備考・関連URL Note・URL

経済学演習 I

2017

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
213	経済学演習 I (永田良)	春学期	3 年以上：2 単位	永田 良
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副 題 Subtitle

経済理論のパラダイム再考 (I)

授業概要 Course Outline

経済学が学問体系として誕生して以来、多くの研究者によりその理論的整備が営々として行われてきた。とりわけ前世紀の後半から分析用具としての数学の適用が活発化し理論としての枠組みが強固なものになるに従い経済学は応用科学の1分野としての位置を確固たるものにしたかのように見える。いわゆる学問体系としてのパラダイムの確立である。この演習ではそのパラダイムの理論的構成要素を最適化と均衡ととらえそれらを多角的な観点から考察する。特にこの演習 I では「最適化」に焦点を当てる。

授業の到達目標 Objectives

本演習では最適化がどのような経緯で経済理論の中心概念となり、それが分析上どう扱われどのように経済学的に意義のある結果が導かれたかを理解させることに目標をおく。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

第1回：オリエンテーション
経済学のパラダイム化過程の説明と本演習の目的
第2回：経済学の人間観と分析視角
合理的経済人と最適化
第3回：最適化の数学的手法 (1)
制約なしの最適化
第4回：最適化の数学的手法 (2)
制約付の最適化
第5回：最適化の数学的手法 (3)
動学的最適化
第6回：ミクロ経済学における最適化 (1)
家計の行動
第7回：ミクロ経済学における最適化 (2)
家計行動の双対分析
第8回：ミクロ経済学における最適化 (3)
企業の行動
第9回：ミクロ経済学における最適化 (4)
企業行動の双対分析
第10回：ミクロ経済学における最適化 (5)
政府の行動
第11回：マクロ経済学における最適化 (1)
重複世代モデル (1)
第12回：マクロ経済学における最適化 (2)
重複世代モデル (2)
第13回：マクロ経済学における最適化 (3)
最適成長モデル (1)
第14回：マクロ経済学における最適化 (4)
最適成長モデル (2)
第15回：まとめ
まとめのテストその後全体の総括と今後の展望

教科書
Textbooks

受講生の能力に応じて決定する

参考文献
Reference Books

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	%	
平常点評価 Class Participation	%	
その他 Others	100%	テキストに則った毎回の報告で学生の理解度を判断する。加えて適宜レポートを課すとともに最後に筆記テストを行いそれらの結果を踏まえたうえで総合的に評価する。

備考・関連URL
Note・URL

経済学演習 I

2017

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
214	経済学演習 I (中村慎一郎)	春学期	3 年以上：2 単位	中村 慎一郎
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副題 Subtitle

産業エコロジー Industrial Ecology

授業概要 Course Outline

地球温暖化・海洋酸性化・海洋プラスチック汚染をはじめ、経済活動の全球的環境影響が深刻化している。企業経営、政府の政策立案、消費者行動において環境への配慮が無視できなくなっている。産業エコロジー (Industrial Ecology, IE) は環境と経済活動との関わりを定量的・実務的に捉える分野であり、ISO14000シリーズに標準化され多くの企業で採用されている製品環境影響評価手法であるLCA (ライフサイクルアセスメント)、資源循環を包括的・視覚的に捉える手法として広く使われているMFA (マテリアルフロー分析)、および製品のライフサイクル全体を通じた経済性評価手法であるLCC (ライフサイクル費用計算) を主な手法として含む。本演習の目的は、先ず、深刻化する環境問題と経済活動の関連についての基本的知見を得ることである。その上で、実社会において広く使われ、環境問題の深化と共に今後ますますその重要性を増すであろうこれらIndustrial Ecologyの手法を正しく理解し、実際に応用できるようになることである。

ここにおける重要なキーワードは生産・使用・廃棄から成る製品ライフサイクルである。環境問題はシステム全体に関わることであるので、相互依存関係を対象とする経済学の観点には役に立つものが少なくない。しかし、従来の経済学では使用・廃棄段階の問題を明示的に扱うことが極めて少なかった。たとえば、廃棄物は生産・消費に伴い必ず発生するが、標準的のミクロ経済学では廃棄物の記述が無い。

本演習は、諸君の経済学知識を最大限生かしつつ、産業エコロジー的な視点の涵養に勤める。

キーワード：製品ライフサイクル、LCA、LCC、MFA、環境効率、持続可能な生産と消費

授業の到達目標 Objectives

- 1 環境問題と経済活動の関連についての基本的知見を得る。
- 2 LCA (ライフサイクルアセスメント) についての基礎的知識を得る。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

「ブレ演習」ではライフサイクルアセスメント (LCA) に関する報告書・論文を数点読み、その内容についてレポートを作成する。

その目的はLCAについての事前知識を得ることと専門的な報告書・論文に慣れることにある。

授業計画 Course Schedule

産業エコロジー分野、特にLCAについて基礎を学習し、応用事例を通じて理解と基礎的手法の習得を行う。応用分野について、履修者による自主的かつ合理的な希望がある場合、なるべくそれを尊重する。例年、身近な消費活動、例えば衣食住、に関わるもの、建築に関するもの、交通システムに関わるもの、が取り上げられている。演習では毎週履修者によるPPTを用いた報告を行う、積極的な質問・議論が期待される。そのために、履修者は十二分な事前の準備のみでなく、説得力あるプレゼンテーションを行うことが求められる。

教科書 Textbooks

なし

参考文献 Reference Books

必要に応じて指示

評価方法 Evaluation

	割 合 (%) Percent (%)	評 価 基 準 Description
試 験 Examinations	%	筆記試験は行わない
レポート Papers	50%	LCAに関するレポートを作成し、演習において発表する
平常点評価 Class Participation	50%	ゼミ出席は単位の条件。正当な理由なき欠席・遅刻は早稲田大学規定に従い対応する。演習への積極的参加を評価の対象とする。
そ の 他 Others	%	

備考・関連URL Note・URL

環境分野は日進月歩の世界である。演習においては教科書の情報が陳腐化している可能性が少なくないので、webなどから最新情報を入手することが必要である。留意されたい。

関連URL：

<http://www.f.waseda.jp/nakashin/index.html>

経済学演習 I

2017

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
215	経済学演習 I (野口和也)	春学期	3 年以上：2 単位	野口 和也
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副 題 Subtitle

経済分析と統計的方法

授業概要 Course Outline

我々の周辺には、多数のデータで満ち溢れています。これらには経済分析のみならず、社会科学全般にかんする理論と実証を考える手掛かりになるものが多く存在します。

本演習では、さまざまな形のデータを分析するための統計的手法を学習して、各自の研究テーマに沿ってデータの収集および分析をすることを目指します。

演習Iでは多変量解析の初歩を学習します。クラスタ分析と重回帰分析を中心に勉強し、データの基本的な分析手法と分析結果の解釈を身に付けるようにします。

なお、クラスタ分析にはテキストマイニングを含みます。これらの手法はビッグデータの解析の基本となります。

また、本演習の履修より前にすでに「統計学入門」および「統計学」を履修していることが望ましいが、3年次に同時に履修することも認めるものとします。

授業の到達目標 Objectives

必要な統計手法をデータに合わせて計算する実習を通じて、各自のテーマに沿ったデータの収集および分析をできるようにする。

演習 I では、Rのプログラムの基礎を学習した後にクラスタ分析を中心に講義を進めていく。
履修生は、各自でデータを収集し、クラスタ分析をおこなってレポートを書くことが義務付けらる。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

事前学習については、プリ演習で行います。

また、演習 I → 演習 II → 演習 III → 演習 IV とステップアップしていくので、絶えず復習が必要となります。

授業計画 Course Schedule

計算にはExcel と R を使用しますが、Rについてはインストールから教示するので、現時点では全く経験がなくてもかまいません。

Excelについては、統計学の復習を兼ねて練習します。

3 年次の最終目標は、クラスタ分析や回帰分析を組み合わせたレポートを、各自のテーマに沿った形で作成して提出できるようにします。演習 I ではクラスタ分析のレポート作成までをおこないます。

教 科 書 Textbooks

2016年度は

金 明哲 「Rによるデータサイエンス ―データ解析の基礎から最新手法まで―」 森北出版
でした。2017年度は同じテキストまたは別の同等のテキストとなる（検討中）。

参考文献 Reference Books

必要に応じて指示します。

評価方法 Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	%	
平常点評価 Class Participation	%	
その他 Others	100%	報告およびレポートなどを総合的に評価します。

備考・関連URL Note・URL

経済学演習Ⅰ

2017

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
216	経済学演習Ⅰ（馬場義久）	春学期	3年以上：2単位	馬場 義久
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副 題 Subtitle

日本の財政—課題と改革

授業概要 Course Outline

ゼミナールの共通テーマとしては、現行日本の財政が抱える問題とその改革方向に関する研究を行う。たとえば、格差是正と所得税制のあり方、消費税増税策、財政再建、年金・医療・介護など社会保障制度の持続可能性、地方分権制度の構築などが課題として挙げられる。

この経済学演習Ⅰでは、下記のテキストを皆で輪読する。主に社会保障と税制の章をとりあげる、同時に、演習Ⅱで行うグループ研究のテーマを模索し決定する。

ゼミナールであるので、独習だけでなく自由闊達な討論を通じてお互いに良い刺激を与えながら、研究をすすめたい。ゼミ活動を通じて、自分なりに財政問題を考えるセンスを身に付けてもらいたいと思っている。

授業の到達目標 Objectives

日本財政の現状についてのテキストを、正確に読み、自分なりにその内容の要点を明快に説明し、問題を提起する能力を培う。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

2016年度秋学期(後半)のプレゼミでは、1. 下記の横山・馬場・堀場『現代財政学』有斐閣 2009から指定した練習問題を解くこと、2. 財政学関係の新書に対する書評提出を求める。

具体的な練習問題の指定や、新書のリストは改めてコースナビにてお知らせする。

授業計画 Course Schedule

第1回：ゼミのイントロダクション 発表のし方と研究の進め方についての講義

第2回－第7回：日本の社会保障に関する論文を輪読。

第8回－第13回：日本の租税負担と社会保障負担に関する論文を輪読

第14回：グループ研究第1班および第2班の研究計画の報告

第15回：グループ研究第3班および第4班の研究計画の報告

教科書 Textbooks

演習のテキストとして第13回まで、土居丈朗『日本の財政をどう立て直すか』日本経済新聞出版社、2012年、第4章「社会保障と財政」と第3章「租税負担と社会保障負担」を用いる予定。

なお、財政学の基礎を学ぶものとして、横山・馬場・堀場『現代財政学』有斐閣 2009、を薦める。

参考文献 Reference Books

ゼミナールの開始時に参考文献リストを配布するほか、授業中に適宜紹介する。

評価方法 Evaluation

	割 合 (%) Percent (%)	評 価 基 準 Description
試 験 Examinations	%	
レポ ² ート Papers	%	
平常点評価 Class Participation	100%	出席、討論への参加、報告内容をもとに評価。
そ の 他 Others	%	

備考・関連URL Note・URL

- (1) 財政学を履修済みか、遅くとも3年次春学期までに履修することを求める。
- (2) 出席をきわめて重視する。
- (3) 小生の定年により、諸君が本演習の最後のメンバーとなる。すなわち、諸君が4年生になったおり、3年生に本ゼミ生はいない。

経済学演習Ⅰ

2017

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
217	経済学演習Ⅰ（船木由喜彦）	春学期	3年以上：2単位	船木 由喜彦
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副題 Subtitle

ゲーム理論と実験経済学

授業概要 Course Outline

この演習ではⅠからⅣまで継続することにより、「ゲーム理論」の基礎を修得すること、また、「経済学実験」を実施・分析する基礎能力を修得することを目標とします。さらに、それに関連する経済学・政治学諸分野の問題を研究します。例えば環境問題、情報の経済学、産業組織論、公共財供給問題などがそれらの研究テーマの一例となります。

ゲーム理論では、互いに依存関係のある状況における、個人の合理的な意思決定や行動を研究します。実験経済学では、ゲーム理論や経済学の理論のとおりには人々が行動するのか、もし、そうでないとする、それはなぜかという問題を研究します。

最終的な目標は自分の定めた研究テーマの卒業論文を作成し、それを卒論発表会で報告して頂くことです。3年次の演習Ⅰ・演習Ⅱでは、このための基礎研究をします。まずは、担当教員の推薦するゲーム理論あるいは実験経済学の平易なテキストまたは資料を輪読することから始める予定です。その際、実際にゼミの皆さんに参加していただいて、人々の行動選択の実験を実施し、実験経済学をより理解していただく予定です。卒業論文のテーマとしては上記のほか、実際に実験を実施した研究、国際政治・国際経済に関する研究、スポーツのゲーム理論分析、制度の比較研究、交通混雑の解消の問題、ゼミの学生マッチングの問題など内容は多岐にわたりますが、そのほとんどがゲーム理論に関連した研究です。その中には論文コンクールにおいて優秀賞を受賞したものもあります。なお、卒業論文の内容は卒論発表会にて報告しますが、0Bや2年生の参加もあります。例年、1～2割の学生が大学院に進学します。なお、各演習科目修了時にはその期間に学んだことをまとめたレポートを作成していただきます。

実験経済学に関しては、担当教員の実施する経済学・ゲーム理論実験に参加して頂き、実地的に実験経済学の知識・技能を修得して頂く予定です。東京大学や慶応大学とのインターゼミ、さらにオープンゼミの準備、発表会なども実験経済学の修得に役立ちます。

2年生のプレ演習参加を前提とします。プレ演習の詳細は、本演習の履修者確定後、email等で連絡いたします。

授業の到達目標 Objectives

ゲーム理論の基礎知識の確実な修得、経済学実験実施・分析能力の修得、さらにそれらを踏まえた応用力の養成。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

経済学演習Ⅰ

第1回：春休み中の研究報告、テキスト選定、年度計画

第2回～第13回：テキスト輪読、経済学実験実習、東京大学とのインターゼミ

第14回、第15回：テキスト輪読、経済学実験実習、オープンゼミへの対応を含めた演習

夏合宿（テキスト輪読、経済学実験実習、懇親会）

経済学演習Ⅱ

第16回～第20回：テキスト輪読、経済学実験実習、慶応大学とのインターゼミ

第21回～第24回：卒論テーマ設定（議論と面接）

第25回～第26回：卒論研究に向けての報告と議論、3年次期末レポートの作成

第27回～第28回：4年生の卒論に対する討論、3年次期末レポートの作成

第29回：卒論発表会（4年生）と討論会

第30回：今後研究計画の報告、3年次期末レポートの提出

プレ演習はオンデマンド方式も取り入れます。また、プレ演習参加者には卒論発表会への参加を強く推奨します。

教科書
Textbooks

担当教員の配付する資料またはテキストを用います。

参考文献
Reference Books

船木由喜彦『初めて学ぶゲーム理論』（新世社）
船木由喜彦『ゲーム理論講義』（新世社）
船木、武藤、中山編著『ゲーム理論アプリケーションブック』（東洋経済新報社）
中山、武藤、船木編著『ゲーム理論で解く』（有斐閣）
武藤滋夫『ゲーム理論入門』（日経文庫）
船木、石川編著『制度と認識の経済学』（NTT出版）
佐々木宏夫『入門ゲーム理論』（日本評論社）
梶井厚志『戦略的思考の技術』（中公新書）
船木由喜彦『演習ゲーム理論』（新世社）
岡田 章『ゲーム理論・入門』（有斐閣アルマ）
河野、西條編『社会科学の実験アプローチ』（勁草書房）
川越敏司『行動ゲーム理論入門』（NTT出版）
フリードマン・サンダー『実験経済学の原理と方法』（川越ほか訳・同文社）

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	%	
平常点評価 Class Participation	%	
その他 Others	100%	演習における平常点、レポートを基に評価する。

備考・関連URL
Note・URL

学生に対する要望：「受講希望学生に対する掲示」を良く読んでください。

関連URL：

<http://www.f.waseda.jp/funaki/wasyoko.html>

<http://funakiwaseda.goodplace.jp/>

経済学演習 I

2017

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
218	経済学演習 I (堀内俊洋)	春学期	3 年以上：2 単位	堀内 俊洋
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副 題 Subtitle

産業組織論と経済学

授業概要 Course Outline

この演習の内容によって立つ学問分野は、決して経営学ではなく、あくまでも経済学である。ただし、経済学は企業の行動を重要な考察対象とし、現実の我々の社会生活でも所得を獲得する場の多くは企業であり、そのために企業の内部を考察する経営学が経済学と無縁ではないのも当然である。したがって、経済学も経営学と重要な接点を持っているのである。その中でも産業組織論は経済学の中でも経営学と最も深い関連を持っている。だが、産業組織論は決して企業経営そのものを研究する学問分野ではないことに注意しなければならない。このゼミでは、これらのことを正確にかつきちんと理解できることを目指し、単にテキスト勉強だけではなく、卒論テーマ探求を目指した共同での体験的演習を通じて得心できるようにする。

授業の到達目標 Objectives

経済の供給サイドを担っている企業、そしてその集まりともいえる産業の実態勉強を通して、経済学を具体的に勉強することを具体的な目標とする。ゼミでは、このような問題意識から、企業の活動、産業の分析に取り組んでいく。春学期は、書物を通じてこのことを徹底的に学ぶこととする。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

経済社会の変動に常に関心を持っていることが、事前の心構えとして重要である。
その一方で、理詰めで物事を考える習慣を養っていくようにする。
なお、ブレゼミの課題は以下の2冊を熟読し、4,000文字程度で意見をまとめたレポートを提出すること。
提出期限は2017年1月24日、3-1405の堀内研究室のレターボックスに投函すること。
大野耐一『トヨタ生産方式』ダイヤモンド社。
ドラッカー『歴史の哲学』ダイヤモンド社。

授業計画 Course Schedule

今年度は3年生の春学期では、共同でしっかりと下記のテキストを用い、基礎的な勉強を行う。それによって3年生の後半以降から4年生になってからの卒業研究の基礎を身につける。Iにいずれ続くであろう演習IIでは、共同で特定の産業プラス企業を取り上げ、全員で徹底的に調べることで、調査の体験を持つ。自動車産業、そして本田技研をサンプルとして取り上げる。これらの体験を踏まえて、いずれ4年生の卒業研究では、各自の自由テーマを追求する。

教科書 Textbooks

小田切宏之『企業経済学 第2版』東洋経済新報社。

参考文献 Reference Books

自動車産業、関連メーカーの研究資料も参考すべきである。
いずれ各自が興味を持つテーマについての資料、論文、などが各自の参考文献といえる。

評価方法 Evaluation

	割 合 (%) Percent (%)	評 価 基 準 Description
試 験 Examinations	0%	試験は実施しない。
レポート Papers	50%	春学期ゼミ15回目の終了時点で、学んだテキストの要約を全員で取りまとめた資料を提出すること。 また、3年生修了時点で提出する卒論計画書（4,000文字見当）を各自が必ず提出すること。この提出がなければ堀内ゼミ4年生には進級出来ない。
平常点評価 Class Participation	50%	各自の発表内容、発表会におけるコメントや議論への関与、などを中心に評価する
そ の 他 Others	0%	3年生以上に開講される学部講義の産業組織論の受講をゼミ履修の条件とする。

備考・関連URL Note・URL

無断欠席はしないこと。
2017年春学期に開講の産業組織論の受講を条件とする。

経済学演習Ⅰ

2017

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
219	経済学演習Ⅰ(村上由紀子)	春学期	3年以上：2単位	村上 由紀子
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副題 Subtitle

仕事と働く人に関する研究

授業概要 Course Outline

多くの人は人生の中でかなりの時間を仕事に費やし、快適に仕事をしたいと願っている。また、労働力なくしては経済活動は成り立たない。本演習では経済の根幹と我々の生活を支える「労働」に関連する研究を行う。研究領域は広く、以下の分野を含んでいる。

1. 労働者の視点からの研究
労働供給、職業（企業）選択、人的資本投資、労働移動、ワーク・ライフ・バランス、労働組合など
2. 企業の視点からの研究
労働需要、人的資源管理、イノベーション・マネジメント、ダイバーシティ、職場のメンタルヘルスなど
3. 労働に関連する政策
 - ①労働政策（労働時間や賃金の規制、女性・高齢者・若年者・外国人等の雇用政策、失業対策など）
 - ②人材育成・能力開発に関連する政策（学校教育、職業訓練など）
 - ③勤労者の生活を支える医療、社会保障（雇用保険、年金、健康保険、労災保険など）
 - ④経済成長を促進する政策（創業支援策、イノベーション政策など）

授業の到達目標 Objectives

経済学演習Ⅰでは、経済学演習Ⅱでグループ研究を行うための準備を行う。グループ研究では3～5人から成るグループに分かれて全体テーマのもとでサブテーマを定めて研究を行い、研究成果を口頭のプレゼンテーション（ゼミ内及びインターゼミナールでの発表）と論文により発表する。経済学演習Ⅰでは、文献を読み議論し、2017年度のグループ研究全体テーマを決定することを最終目標とする。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

第1回：イントロダクション
第2回～3回：プレゼンテーションの練習
第4回以降：グループ研究全体テーマの決定に向けて文献研究とディスカッション
最終回：全体テーマの決定と本学期的まとめ

教科書 Textbooks

授業中に指示する。

参考文献 Reference Books

授業中に指示する。

評価方法 Evaluation

	割 合 (%) Percent (%)	評 価 基 準 Description
試 験 Examinations	%	
レポート Papers	50%	課題の提出と内容
平常点評価 Class Participation	50%	出席、授業への取り組み
そ の 他 Others	%	

備考・関連URL Note・URL

演習への参加は2017年度春学期開講の労働経済学を履修することを前提とする。

経済学演習 I

2017

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
220	経済学演習 I (本野英一)	春学期	3 年以上：2 単位	本野 英一
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副 題 Subtitle

家族構造から見たユーラシア大陸文明の構造

授業概要 Course Outline

本年度から、経済学演習Iは、「アジア経済史」で取り上げた主題のどれか一つを取り上げ、それに関する文献を読んで討論することで、ユーラシア大陸東西両岸を両極とする全地域の社会経済を対比的に論じる能力を高めることを目的とする。今年は、中根千枝とエマニュエル・トッドの著作をテキストに、ユーラシア大陸全域の家族構造の違い、そしてそれが各地域の国家社会構造をどのように規定しているかを論じる。

授業の到達目標 Objectives

毎回、テキストの担当分を読んで、全員がその内容にどのような問題点があるのかをまとめたメモを提出し（これは毎回全員が作成提出することを義務づける）、これに基づいて相互に討論する。これを通じて、日本を含む北半球人類社会の構造を大局的に把握できるようにすることが目標。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

毎回、テキストの指定された箇所を読んで、全員がその要約と疑問点をまとめたA4サイズの要約を一枚から二枚にまとめて参加者数だけ準備提出する。テキストを読むだけでなく、準備過程として、たとえば『歴史学事典』（弘文堂）など、多くの工具書を用いて、より多くの情報を入手しておくことが望ましい。

授業計画 Course Schedule

第1回：オリエンテーション

今年度の演習の内容紹介。毎回の授業形式説明とテキスト解題。今回は、中根千枝『社会人類学：アジア諸社会の考察』（講談社学術文庫、二〇〇二年）の序論と第1章を取り上げ、準備の仕方を説明する。

第2回

中根千枝『社会人類学：アジア諸社会の考察』（講談社学術文庫、二〇〇二年）第2章を踏まえた討論。

第3回

中根千枝『社会人類学：アジア諸社会の考察』（講談社学術文庫、二〇〇二年）第3章を踏まえた討論。

第4回

中根千枝『社会人類学：アジア諸社会の考察』（講談社学術文庫、二〇〇二年）第4章を踏まえた討論。

第5回

中根千枝『社会人類学：アジア諸社会の考察』（講談社学術文庫、二〇〇二年）第5章を踏まえた討論。

第6回

中根千枝『社会人類学：アジア諸社会の考察』（講談社学術文庫、二〇〇二年）第6章を踏まえた討論。

第7回

中根千枝『社会人類学：アジア諸社会の考察』（講談社学術文庫、二〇〇二年）第7章を踏まえた討論。

第8回

中根千枝『社会人類学：アジア諸社会の考察』（講談社学術文庫、二〇〇二年）第8章を踏まえた討論。

第9回

今回からは、エマニュエル・トッド『家族システムの起源I』（藤原書店、二〇一六年）を読み始める。今回は、序説を踏まえた討論を行う。

第10回

エマニュエル・トッド『家族システムの起源I』（藤原書店、二〇一六年）第1章を踏まえた討論を行う。

第11回

エマニュエル・トッド『家族システムの起源I』（藤原書店、二〇一六年）第2章を踏まえた討論を行う。

第12回

エマニュエル・トッド『家族システムの起源I』（藤原書店、二〇一六年）第3章前半を踏まえた討論を行う。

第13回

エマニュエル・トッド『家族システムの起源I』（藤原書店、二〇一六年）第3章後半を踏まえた討論を行う。

第14回

エマニュエル・トッド『家族システムの起源I』（藤原書店、二〇一六年）第4章を踏まえた討論を行う。

第15回

テキスト全体を通読して各人が持った問題意識の報告と、これに基づく討論。

教科書
Textbooks

中根千枝『社会人類学：アジア諸社会の考察』（講談社学術文庫、二〇〇二年）

エマニュエル・トッド『家族システムの起源Iユーラシア上下』（藤原書店、二〇一六年）

参考文献
Reference Books

エマニュエル・トッド『新ヨーロッパ大全I, II』（藤原書店、一九九二年）

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	0%	実施しません。
レポート Papers	20%	最後の総括討論の時に、テキストその他を踏まえて、今後どのような問題をゼミ論として取り上げたいかをレポートにまとめていただきます。
平常点評価 Class Participation	80%	毎回、予め決めておいた範囲を読み、その内容要約とそこからどのような問題が新たに浮かび上がるのかをまとめた報告を提出していただきます。その内容充実度で成績評価を判断します。
その他 Others	0%	特になし。

備考・関連URL
Note・URL

今年度、もしくは昨年度に私が担当した「経済史入門A」もしくは「アジア経済史」の単位を予め取得している学生を優先的に受け入れる。

経済学演習Ⅰ

2017

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
221	経済学演習Ⅰ（山本竜市）	春学期	3年以上：2単位	山本 竜市
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副 題 Subtitle

ファイナンス

授業概要 Course Outline

ファイナンスとは資産運用・取引、リスクマネジメント、投資の意思決定に関する研究全般を示します。本演習ではファイナンス分野の教科書の輪読やファイナンス理論・実証論文のサーベイを通じ、卒論のテーマの探し方、論文の書き方、研究発表方法など指導します。卒論では興味のあるファイナンスの世界にある問題を取りあげ、データを使って（数学を使っても構わない）簡単に分析してもらいます。毎年8月下旬にソウル国立大学、台湾国立政治大学、慶応大学（竹森ゼミ）、Israel College of Management、千葉商科大学（島田学長ゼミ）、名桜大学、ベトナム国立大学、中国西南财经大学の学生、教員が一度に集まるインゼミを行います。毎年参加者数約150人の大きな大会でインゼミでの使用言語は英語です。国際感覚を養ってもらいます。2014年のインゼミはベトナム国立大学で開催、2015年は台湾国立政治大学で開催、2016年はソウル国立大学で開催、2016年は中国西南财经大学にて開催予定。

本演習履修前に2年生のプレ演習に参加してください。プレ演習の内容は後日emailにて連絡します。

授業の到達目標 Objectives

本演習では、ファイナンス分野の教科書の輪読、理論・実証論文のサーベイ、卒論作成の過程で、以下の点を到達目標とします。1) ファイナンスの基礎概念の理解する、2) 基礎概念を応用することで現実で見られる様々な経済問題の原因を理解する、3) 現実で見られる経済問題に対し自分の意見をまとめ、発表する能力・技術を磨く。卒論とは別にインゼミに向け英語での論文を作成し、英語での発表の仕方も勉強します。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

第1回：前期の打ち合わせ

第2-14回：ファイナンス分野の教科書の輪読または理論・実証論文のサーベイ

第15回：各自の研究計画の検討

教科書 Textbooks

参考文献 Reference Books

評価方法 Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	%	
平常点評価 Class Participation	100%	報告、討論、出席などが評価される。レポート、宿題を課す場合もある。
その他 Others	%	

備考・関連URL Note・URL

国際政治経済学演習 I

2017

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
301	国際政治経済学演習 I (金子守)	春学期	3 年以上：2 単位	金子 守
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副 題 Subtitle

経済学・ゲーム理論の初歩と応用

授業概要 Course Outline

本演習では経済学・ゲーム理論の初歩の考え方を学習する。また、関係する社会経済制度・社会経済問題を議論する。参加者は経済学・ゲーム理論を共通に勉強するが、各自が自分の興味に合わせて、社会経済制度・社会経済問題を選んで研究する。

授業の到達目標 Objectives

経済学やゲーム理論がどのようなものであるかを理解すること。また、社会経済制度・社会経済問題を見る目を養う。
また、各自で選んだ問題の背景もよく理解する。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

毎回、経済学・ゲーム理論などの基礎的な勉強をしながら、各自の問題を議論していく。

ある程度、自分の問題が明確になってきたら、ゼミで発表する。

教 科 書 Textbooks

参考文献 Reference Books

金子守 『ゲーム理論と蒟蒻問答』 日本評論社 2003年
金子守 『社会正義 地界で考える』 勁草書房 2007年

評価方法 Evaluation

	割 合 (%) Percent (%)	評 価 基 準 Description
試 験 Examinations	%	
レポート Papers	20%	ゼミでの発表。
平常点評価 Class Participation	60%	ゼミへの参加、議論への参加を基準とする。
そ の 他 Others	20%	自分から学習課題などを探すなど。

備考・関連URL
Note・URL

2016年度 秋学期（後半）開講の「プレ国際政治系学演習Ⅰ（金子守）」のシラバスはこちらから確認してください。

<https://www.wsl.waseda.jp/syllabus/JAA104.php?pKey=110300P609012016110300P60911&pLng=jp>

国際政治経済学演習 I

2017

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
303	国際政治経済学演習 I (久保慶一)	春学期	3年以上：2単位	久保 慶一
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副 題 Subtitle

新興国の比較政治学 ― 民主化・紛争・平和構築の実証分析 ―

授業概要 Course Outline

本演習は、民主化、国内紛争（内戦）、紛争後平和構築を中心に、アジア、スラブ・ユーラシア、ラテンアメリカ、中東、アフリカの新興国で起きている政治現象に関する比較政治学的な実証分析を行うことを目指す。具体的な研究テーマとしては、民主化の発生要因や民主化の過程、内戦勃発の規定要因、内戦終結のための和平交渉の過程やその成否を規定する要因、紛争後平和構築の過程、その成否の規定要因、移行期正義（独裁体制下や内戦中に行われた非人道的行為に関する調査・真相究明・責任者の処罰や訴追など）や紛争後の和解の過程、元兵士の武装解除や社会復帰の過程、民主化・内戦終結・紛争後平和構築における国際社会（国連などの国際機関）の役割などが挙げられる。演習 I は、卒業論文を執筆するための出発点として、これらのテーマに関する先端的な文献を輪読し、基礎的な概念や理論を批判的に理解することを目的とする。

なお、これらのテーマに関する比較政治学の実証的な先行研究を理解するためには、基礎的な計量分析手法に関する知識が不可欠となる。そのため、本演習への応募に際しては、卒業論文で計量分析を行うかどうかにかかわらず、「計量政治学」を履修済みまたは秋学期に科目登録することが応募要件となるので注意すること（ただし、留学先等で同等の科目を履修済みの場合にはこの限りではない。また、時間割の都合上秋学期の科目登録が不可能な場合には翌年度春学期の科目登録でも可とする。疑問がある場合は応募前に担当教員にメールで相談すること）。

授業の到達目標 Objectives

1. 民主化、内戦、紛争後平和構築に関する比較政治学の理論的・実証的な先行研究を批判的に理解する。
2. 演習参加者が卒業論文のテーマを決定し、そのテーマに関する先行研究のリサーチを開始する。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

第1回：オリエンテーション：ゼミの運営方法に関する説明、輪読する文献リストの配布とそれに関する簡単な説明、各週の発表者の分担の決定などを行います。
 第2回～第14回：文献の輪読・発表・ディスカッション：輪読する文献や発表方法についてはゼミ参加者の人数や関心領域などに配慮してゼミ選考後に決定します。
 第15回：まとめ：春学期の文献輪読・議論の結果を総括します。最後に、ゼミ参加者が各自の卒業論文のテーマを発表します。

教科書 Textbooks

特になし。

参考文献 Reference Books

久保慶一・末近浩太・高橋百合子『比較政治学の考え方』有斐閣、2016年。
 粕谷祐子『比較政治学』ミネルヴァ書房、2014年。
 久米郁男『原因を推論する－政治分析方法論のすゝめ』有斐閣、2013年。
 加藤淳子・境家史郎・山本健太郎編『政治学の方法』有斐閣、2014年。

評価方法 Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	%	
平常点評価 Class Participation	%	
その他 Others	100%	出席、文献輪読の際のプレゼンテーション、ディスカッションへの参加などを踏まえて、総合的に評価します。

備考・関連URL Note・URL

国際政治経済学演習 I

2017

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
304	国際政治経済学演習 I (久米郁男)	春学期	3年以上：2単位	久米 郁男
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副題 Subtitle

政治経済現象分析の技法

授業概要 Course Outline

この演習の目標は日常起こっている政治経済現象を政治学的に考える訓練を行うことにあります。政治的な紛争というものは、紛争当事者が理性的に話し合えば解決できるのでしょうか？人道的援助は、世界を平和にするのだろうか？政策のことをしっかり考えて皆が投票すればよい政治が実現するのでしょうか？経済が成長すれば、民主化するのでしょうか。新聞やテレビでの「常識」とは少し違う角度から様々な政治経済現象を見ることによって政治学の世界を学びます。扱う対象は多様ですが、政治学とりわけ実証的・経験的な政治学における分析方法を学び、様々な政治現象が何故生じているのかを説明する能力を磨いてもらいます。

なお、ゼミがスタートするまでに計量政治学（浅野先生）を受講するか、自習するかして、統計ソフトを使って重回帰分析が出来るようになっていることを前提にゼミを進行します。自習法の相談などは、αゼミで行います。

授業の到達目標 Objectives

現代の政治現象を、他人の意見に簡単に説得されず、データや理論に基づいて社会科学的に分析し、自らの主張をディベート、プレゼン、論文の形で提示し、人を説得する能力の涵養を目指します。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

ゼミがスタートするまでに計量政治学（浅野先生）を受講するか、自習するかして、統計ソフトを使って重回帰分析が出来るようになっていることを前提にゼミを進行します。自習法の相談などは、プレ演習で行います。

授業計画 Course Schedule

第1回：はじめに
第2回－第5回：方法論の基礎
第6回：分析のロジック
第7回－第8回：ディベート
第9回：政治経済学的問へ
第10回：研究デザイン
第11回：合理性について
第12回：ゲームの世界
第13回－第15回：古典を読む
第16回：プレゼンテーション
第17回－第20回：レプリケーションを通じた計量分析実習
第21回：ディベート
第22回－第24回：計量分析を用いた研究を読む
第25回－第28回：事例研究を読む
第29回－第30回：プレゼンテーション

教科書 Textbooks

久米郁男『原因を推論する政治分析方法論のすゝめ』有斐閣
ロバート・パットナム『哲学する民主主義』NTT出版

参考文献
Reference Books

課題文献を講義中に適宜指示します。

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	%	
平常点評価 Class Participation	%	
その他 Others	100%	毎週課題文献を読んだ上で提出してもらったレポート、授業中の発表、出席状況、ゼミ論文によって成績を評価します。いかなる事情があっても3回以上欠席がある場合は単位認定を行いません。2回以内の欠席については、その回の文献につきレポートを提出した場合、成績評価の対象とします。

備考・関連URL
Note・URL

ゼミに関するより詳しい内容・応募に際しての課題については以下のホームページを参照して下さい。
<http://www.geocities.jp/kumeikuo/course.html>

国際政治経済学演習 I

2017

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
305	国際政治経済学演習 I (齋藤純一)	春学期	3年以上：2単位	齋藤 純一
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副題 Subtitle

近現代の政治理論

授業概要 Course Outline

このゼミでは、自由、平等、公共性、デモクラシー、社会保障、社会統合など近現代の政治理論の主要なテーマを取り上げる。

ゼミの前半は、政治理論の重要な文献を取り上げ、その理解をはかるとともに、提起された論点について議論する。

この数年間に読んだのは、I. カント、H. アーレント、J. ロールズ、M. ヌスバウム、T. ポッゲ、J. フィッシュキン、C. サンスティン、I. M. ヤング、E. キテイ、井上達夫、岡野八代、木部尚志らの著作である。

ゼミの後半は、メンバーによる個人研究報告にあてている。個人研究報告はゼミ論執筆の準備として行われる。

授業の到達目標 Objectives

政治理論のテキストを正確に理解し、議論を整理して考え、理由（論拠）を明確に挙げながら自分の考えを伝える力を涵養することがこのゼミの目標である。そのうえで、現代の政治社会の制度や規範を評価し、その問題や改善の方向について自分の意見を形成できるよう指導したい。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

今年度は平等論をテーマとし、まず、下記の著作を取り上げて、政治社会における平等について考察する。その後に読むテキストについては受講者とも相談して決める。

教科書 Textbooks

ジョン・ロールズ『正義論 改訂版』（紀伊國屋書店）およびロナルド・ドゥオーキン『平等論』（木鐸社）

参考文献 Reference Books

木部尚志『平等の政治理論』（風行社、2015年）。

評価方法 Evaluation

	割 合 (%) Percent (%)	評 価 基 準 Description
試 験 Examinations	%	
レポート Papers	%	
平常点評価 Class Participation	100%	出席、報告、研究発表、議論への参加等を総合的に評価する。
そ の 他 Others	%	

備考・関連URL Note・URL

国際政治経済学演習 I

2017

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
306	国際政治経済学演習 I (清水和巳)	春学期	3 年以上：2 単位	清水 和巳
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副題 Subtitle

人間と社会の政治経済学

授業概要 Course Outline

「不思議なものが多い。しかし人間ほど不思議なものはない」(ソフォクレス『アンチゴネ』)
古代から現代に至るまで、人間はあらゆる学問分野で最大の謎であり続けてきた。社会科学はとりわけ人間と社会の関心に興味をもってきた。スミスは人間が利己的に行動しているにもかかわらず社会が破綻しないことを、ヴェーバーは資本主義という特殊な社会経済制度を支える人間が西欧という地域で生じたことを、マルクスは人間が作り出した社会が逆に人間を疎外していくことを不思議に思い、それぞれの謎に彼らなりの解答を用意した。とはいえ、こういう偉大な先達がとりくんだ大問題だけが謎なのではない。たとえば、海外旅行をしたときにあるレストランで食事をしたとしよう。「ここで食事することはおそらくもう二度とない」とわかっているにもかかわらず、われわれはチップを払う。実はこれも(ある観点からすると)人間と社会に関する謎なのだ。

本演習の目的は、人間の意思決定・行動、その結果として生じる社会制度に関する謎を自分でみつけ、そこに社会科学的方法で切り込む方法を学ぶことにある。その際、「自分」にとっては謎だが、他人にはなぜそれが解くべき謎なのか理解できない、「自分」はその謎に答えたつもりだが他人は納得しない、こういう事態は避けたい。したがって、演習参加者は少なくとも以下の3点に関して自問自答してほしい。

- なぜ(どのような立場からすると)その問題を「謎」ととらえることができるのか?
- もし、その問題が本当に「謎」であるなら、それにどのように応答することが科学的と言えるのか?
- そもそも、科学的に思考するとはどういうことなのか?

授業の到達目標 Objectives

演習参加者は、自分の問題設定、問題の検討方法を他の参加者に理解させ、納得させるために必要な技術や方法を身につける。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：議論することになれる I
- 第3回：議論することになれる II
- 第4回：「書く技術」
- 第5回：議論することになれる III
- 第6回：基礎的知識の学習 1
- 第7回：基礎的知識の学習 2
- 第8回：基礎的知識の学習 3
- 第9～15回：各人の興味対象に応じて、既存の研究をグループで発表
- 16回目～30回目は夏合宿での卒論計画発表をふまえて、各人に報告を割り当てる。

教科書 Textbooks

特になし。事前に、文献リスト、課題となる論文等を配布する。

参考文献
Reference Books

第一回目のゼミナールにおいて参考文献リストを配布するが、制度の経済学、ゲーム理論、科学方法論などの分野を重点的に読んでいく。

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	50%	発表・レポートの出来・不出来に応じる。
平常点評価 Class Participation	50%	ゼミの時間中の議論の組み立て方に応じる。
その他 Others	%	

備考・関連URL
Note・URL

学生に対する要望：

- (1) 質問がある場合、次のアドレス宛てにメールで問い合わせること：skazumi1961[at]gmail.com。
- (2) 担当教員の「比較経済制度分析」を受講済みであること、加えて、ミクロ経済学、ゲーム理論、統計学、科学哲学に関する基本的な知識があることが望ましい。まだ「比較経済制度分析」を受講していない場合は、来年度受講することを強く勧める。

国際政治経済学演習 I

2017

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
307	国際政治経済学演習 I (須賀晃一)	春学期	3 年以上：2 単位	須賀 晃一
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副題 Subtitle

公共政策の政治経済学－公共性の実現に向けて

授業概要 Course Outline

このゼミでは、現代社会が抱えるさまざまな問題を政治経済学・公共経済学・公共哲学の視点で考え、解決策としての公共政策を提案してみたいと思います。日本だけでなく、国際社会や地域、あるいは各国が抱える問題の多くは特定の観点から解決できるものではなく、複眼的視点に立って公共性の実現を目標に解決のルートを探るべきものであると考えられます。これまでに繰り返し指摘されてきた効率と公平の両立を図ることは公共政策における重要な観点であり、皆さんに学んでいただければならない最小限の視点です。そして、効率と公平を各国の政治経済システム全体の中で、また歴史的、時間的パースペクティブの中で考察することも重要な課題です。さらには国家や地域を越えた空間的広がりの中で、効率と公平の両立を図るシステムについて考えることも必要です。効率と公平を重要な構成要素とする公共性の実現を、各人の問題領域における政策的対応を通じて図ること、これをゼミの課題としたいと思います。具体的なテーマの例として以下のものを挙げる事ができるでしょう。

1. 地球環境問題と世代間倫理
2. 地域振興・産業振興の公共政策
3. 少子高齢化と社会保障
4. 貧困と不平等
5. 資源・食料・エネルギーの政治経済分析
6. 教育の政治経済分析
7. 医療の政治経済分析
8. 都市と交通の公共経済学

これらの問題に対して、効率や公平などの明確な価値基準を設けて、公共政策や公的制度を作るとか、当事者間の合意によりルールを設定することで解決するといった方向を探るのが、このゼミで用いる接近方法の特徴です。

ゼミでは、まず現代社会の問題群の中から自分なりのテーマを決めます。そして、それに応じて2種類の課題図書を指定します。1つは各自のテーマに関する中級のテキスト、もう1つは書評用の図書（新書程度）です。まず、書評を作成し、発表してもらいます。経済学・統計学の基礎知識をブレ演習で修得してもらい、書評の作成およびテキストの要約が春休みの宿題となります。3年次の授業が始まると最初に、春休みにやっていた書評の発表を行います。続いて、計量経済学・公共経済学のテキストを輪読します。これが共同論文を執筆していくために必要な共通の知識になります。

その後、グループ研究を行います。各人の選んだテーマに従ってグループを作り、グループごとにサブテーマを決めて資料収集し議論・研究し、発表原稿を作成します。指定した中級テキストや、そこでの参考文献となった様々な論文が資料収集の際に指針を与えてくれるでしょう。発表グループが進行役となり、ゼミでの議論を進めてもらいます。グループごとの共同研究の成果は共同論文にまとめます。

授業の到達目標 Objectives

2種類の共同論文を作成することです。1つは学生政策フォーラム発表会用の政策提言論文、もう1つは政治経済学会の論文コンクールに応募する学術論文です。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

- 第1回：自己紹介と今後の進め方
第2回：パワーポイントの使い方
第3回：書評の発表（1）

- 第4回：書評の発表（2）
 第5回：書評の発表（3）
 第6回：各班によるテキスト発表（1）
 第7回：各班によるテキスト発表（2）
 第8回：各班によるテキスト発表（3）
 第9回：各班によるテキスト発表（4）
 第10回：各班によるテキスト発表（5）
 第11回：各班によるテキスト発表（6）
 第12回：班研究のテーマ決定
 第13回：各班での資料分析（1）
 第14回：各班での資料分析（2）
 第15回：オープンゼミ
 ここまでが春学期の授業計画で、以下は秋学期の授業計画です。
 第16回：夏合宿の反省と今後の課題の検討
 第17回：班ごとの論文作成－中間発表に向けて－（1）
 第18回：班ごとの論文作成－中間発表に向けて－（2）
 第19回：班ごとの論文作成－中間発表に向けて－（3）
 第20回：班ごとの論文作成－中間発表に向けて－（4）
 第21回：各班の中間発表（1）
 第22回：各班の中間発表（2）
 第23回：班ごとの論文作成－最終版に向けて－（1）
 第24回：班ごとの論文作成－最終版に向けて－（2）
 第25回：各班の発表練習－ISFJ政策フォーラムに向けて－（1）
 第26回：各班の発表練習－ISFJ政策フォーラムに向けて－（2）
 第27回：班ごとの論文作成－政治経済学会論文コンクールに向けて－（1）
 第28回：班ごとの論文作成－政治経済学会論文コンクールに向けて－（2）
 第29回：4年生卒業論文へのコメント（1）
 第30回：4年生卒業論文へのコメント（2）

教科書 Textbooks

研究室のホームページを参照のこと。

参考文献 Reference Books

研究室のホームページを参照のこと。

評価方法 Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	実施しない。
レポート Papers	50%	書評および共同論文による。
平常点評価 Class Participation	50%	授業への出席と貢献、ならびに共同論文作成に当たった貢献度による。
その他 Others	%	

備考・関連URL Note・URL

ゼミの最終目標を卒業論文の作成に置きます。

ゼミは通常の一方向的な講義と異なり、皆さんが主役です。主役たる皆さん一人一人が積極的に参加しなければゼミは崩壊します。自分なりのテーマを持って自分で研究する態度を養い、他の人とできるだけ議論して下さい。常に「根拠は何か」と問う姿勢を持つことが大切です。この作業が就職してから大いに役に立ちます。

関連URL：

<http://www.f.waseda.jp/ksuga/>

国際政治経済学演習 I

2017

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
308	国際政治経済学演習 I (唐亮)	春学期	3 年以上：2 単位	唐 亮
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副 題 Subtitle

現代中国の政治経済と外交戦略

授業概要 Course Outline

戦後のアジア各国は歴史、文化および政治経済体制に関して多様性を持ちながら、国家統合、経済開発および民主化といった共通の課題を抱え、それぞれのアプローチで目標の実現に向けて努力してきた。この講義は諸外国、特にアジア各国との比較分析を用いながら、中国は改革開放路線によっていかにダイナミックな発展を遂げているか、政治経済体制と中国モデル・発展戦略をどう見るか、経済成長の「光」と「影」とは何か、社会衝突はどのように展開されているか、情報化や意識の多様化が進む中で中国政治はどのように変容しているか、台頭する中国と欧米主導の国際秩序はどのような関係にあるかを検証し、中国の「実像」と「将来像」に迫る。

授業の到達目標 Objectives

現代中国の内政外交に関する幅広い基礎知識を有するほか、多文化の視点、複眼的な分析能力を身に付け、自主的な研究課題について豊かな構想力をもつことは理想である。また、学生の主体的参加と討論によってプレゼンテーションの能力を高める。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

以下は初年次履修学生春学期 I の授業計画です。秋学期の演習II においては、引き続き輪読およびゼミ論の報告を行います。

第 1－2 回：導入的講義と問題提起：中国研究とは何か？何に注目し、いかなる研究アプローチで中国の実態に接近していくか？

第 3 回－第 10 回：輪読。教科書欄の文献などからテキストを選び、履修者全員が事前に読んでくる。各報告者・コメンテーターが内容をポイントよく紹介し、批判的論点を提示し、全員で討論をする。

第 11 回－第 14 回：ゼミ論の構想発表：各回、4 名前後の学生は各自のテーマについて、着眼点、先行研究とゼミ論の内容構成に関する構想を発表し、全体で質疑応答を行う。

第 15 回：まとめと夏休みの課題提示（グループ別共同研究、課題図書）。

夏合宿＝例年 9 月を予定。：夏休みの課題についての報告・討論。最終年次学生はゼミ論研究の中間報告。中国で実施される場合、現地での調査旅行や中国の大学生との交流をも行う

教科書
Textbooks

家近亮子ら編著『新版 5 分野から読み解く現代中国―歴史政治経済社会外交―』晃洋書房、2016年
 唐亮『現代中国の政治』岩波新書、2012年
 毛里和子『新版現代中国政治』第3版、名古屋大学出版会、2011年
 毛里和子『日中関係―戦後から新時代へ』岩波書店、2006年
 国分良成編著『中国は いま』岩波新書、2011年。
 丸川知雄『現代中国経済』有斐閣、2013
 丸川知雄『チャイニーズ・ドリーム』ちくま新書、2013
 中兼和津次『経済発展と体制移行』名古屋大学出版会
 中兼和津次『開発経済学と現代中国』名古屋大学出版会、2012年
 園田茂人『不平等国家 中国』中公新書、二〇〇八年。
 木間正道ら編著『当代中国法入門』第五版、有斐閣、二〇〇九年
 岩崎育夫『アジア政治を見る目』中公新書、2001年
 武田康裕『民主化の比較政治―東アジア諸国の体制変動過程』ミネルヴァ書房、2001年

参考文献
Reference Books

随時指定する

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	30%	着眼点、先行研究の整理、論点を裏付けるデータ・根拠の提示、書式を重視する。
平常点評価 Class Participation	70%	出席・報告内容・議論への貢献度を重視する。
その他 Others	%	

備考・関連URL
Note・URL

大学院進学希望者、留学経験者、現代中国に関心を持つ元気の学生参加を大歓迎する。夏休みに自主参加の形で北京大学などとの共同セミナー、庶民生活の体験および社会観察などの自主参加プログラムを実施する

国際政治経済学演習 I

2017

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
309	国際政治経済学演習 I (遠矢浩規)	春学期	3年以上：2単位	遠矢 浩規
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副題 Subtitle

知的財産（技術と文化）の国際政治経済分析

授業概要 Course Outline

(1) この演習では、企業が「技術」や「文化」を製品化して貿易や海外直接投資を行い、人々がそれらを消費するという日常の（ミクロの）現象が、国際政治経済／国際社会の（マクロの）次元で、一体どのような意味を持つことになるのか理解を深めることを目的とします。副題に「知的財産」とありますが、本演習で扱うイシューは、技術や文化の知的財産権（特許権や著作権など）の問題に限定されることなく、異文化交流と文化的多様性、インターネットとデジタル化、ソフト・パワー、頭脳流出と頭脳還流、バイオパイラシーと生物多様性、ブランディングとアイデンティティなど、技術と文化をとりまく様々な国際問題に及びます。

(2) 国際政治経済学及び関連する社会科学の「理論」を使って分析（思考）することを基本としつつ、学生個人の研究（ゼミ論など）においてはフィールドワーク、オリジナルのデータ、事例などに基づいた「実証」を重視します。ゼミ論のテーマは知的財産に関連したものでも構いませんが、本演習のテーマの射程から著しく離れたテーマ（例えば、軍事問題、テロリズム、戦争と平和外交、民族紛争など）に関心がある学生の論文指導は十分に行えないので、他のゼミを検討することを推奨します（ただし、戦争とハイテク産業の間には深い関係があるように、問題意識の持ち方次第です）。

授業の到達目標 Objectives

授業概要の(2)に記したようなリサーチ（理論と実証）を行い、議論を社会科学的に構成し、それを論文としてまとめ、プレゼンテーションする能力を身につけることを目標とします。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

演習 I（春学期）の前半は文献の輪読を、後半はゼミ論のテーマ案の報告を中心に行います。演習 II（秋学期）はゼミ論プロポーザルの2回目を予定していますが、演習 I の状況を踏まえて変更の可能性もあります。

第1回：ガイダンス

第2回－第8回：輪読（下記「教科書」欄に掲げた文献を含む数冊を予定）

第9回－第15回：ゼミ論テーマのプロポーザル

輪読では、あらかじめ指定された「報告者」による内容の紹介、「コメンテーター」による批評や論点の提示のあと、全員で討論を行います。

なお、プレ演習（2016年度秋学期後半）は課題レポートと数回のミーティングを予定しています。詳細は選考合格者にあらためて連絡します。

教科書 Textbooks

遠矢浩規『知的財産の国際政治経済学』（2016年度刊行予定）

タイラー・コーエン『創造的破壊—グローバル文化経済学とコンテンツ産業』作品社、2011年

ジョセフ・S・ナイ『ソフト・パワー』日本経済新聞社、2004年

など数冊

参考文献
Reference Books

講義中に適宜指示します。

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	%	
平常点評価 Class Participation	%	
その他 Others	100%	輪読文献をあらかじめ読んで提出するレポート、報告者やコメンテーターとしてのパフォーマンス、ディスカッションへの貢献度などによって総合的に評価します。 病気（診断書が必要）・忌引以外での欠席は3回まで認められますが、指定された課題レポートを後日提出することが条件となります（3回を超えて欠席した場合は、単位認定を行いません）。なお、ゼミは授業時間帯を越えて行われる場合があるので、ゼミの時間帯直後の時間帯に部活・サークル・アルバイト等の予定を入れることはできません（自己都合による途中退席は認めません。退席した場合、欠席としてカウントします）。

備考・関連URL
Note・URL

ゼミに関する詳しい情報、応募に際しての課題等を下記ウェブサイトで公開する予定です（2016年8月下旬に完成予定）。課題は掲示でも公表します。

<http://hirokitohta.wixsite.com/tohya>

国際政治経済学演習 I

2017

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
310	国際政治経済学演習 I (戸堂康之)	春学期	3年以上：2単位	戸堂 康之
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副題 Subtitle

開発途上国・新興国・日本の経済発展

授業概要 Course Outline

この演習では、経済成長論、国際経済学、開発経済学を主たるツールとして、日本・新興国・開発途上国における経済発展について学び、研究する。定量的な実証的研究に重点を置くが、理論的研究、定性的な実証研究を研究したい学生も排除するわけではない。履修者の興味に従い、例えば以下のようなテーマを取り扱う。

- アジアにおける生産ネットワークの拡大
- 途上国における農村や零細企業の発展
- 「中進国の罠」を回避するための政策
- 開発援助の効果
- 政治体制が経済発展に及ぼす影響演習は、基本的には学生の発表で構成され、自分の研究の進捗または自分の研究に関する既存の英語文献の紹介を、各学生が数週間に1度程度行う。

3年次の年度末および卒業時には論文の提出を義務付け、最終的には質の高い卒業論文を書くことが最大の目標である。

なお、毎年韓国において日本と韓国の主要大学とのインターゼミナールを、日本において慶応大学の開発経済系ゼミとのインターゼミナールを行う。韓国でのインゼミは希望者のみで行うが、慶応とのインゼミは全員が出席し、特に4年生は全員が卒論を発表する。

夏休み期間中に、途上国などで現地調査、企業訪問などを行うことがある（希望者のみ）。

授業の到達目標 Objectives

以上のような演習を通して、開発途上国・新興国・日本の経済発展に関する知識を高めるばかりでなく、

- (1) アイデアを創出する能力
- (2) 論理的な分析を行う能力
- (3) 分析結果を文章や口頭発表によって効果的に人に伝える能力
- (4) 情報を収集する能力

を養成することがこの演習の目標である。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

テーマごとに、英語文献を輪読した後、学生による研究発表を行う。

教科書 Textbooks

適宜指示する。

参考文献 Reference Books

評価方法 Evaluation

	割 合 (%) Percent (%)	評 価 基 準 Description
試 験 Examinations	%	
レポート Papers	30%	年度末提出の論文を評価する。
平常点評価 Class Participation	70%	研究発表を評価する。出席は必須である。
そ の 他 Others	%	

備考・関連URL Note・URL

担当教員のウェブサイト (<http://www.f.waseda.jp/yastodo/>) をよく読み、担当教員の研究内容、およびゼミ運営の方針（「戸堂研究室」のタブ）を理解しておくこと。

国際政治経済学演習 I

2017

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
311	国際政治経済学演習 I (都丸潤子)	春学期	3 年以上：2 単位	都丸 潤子
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副題 Subtitle

ヒトの国際移動の文化的・歴史的分析

授業概要 Course Outline

この演習では、多様な主体によって重層的に構成されている国際社会において、トランスナショナルな現象の代表例である人間およびその集団の移動が、どのような原因で生じ、いかなる過程を経て、どのような結果をもたらすかを社会科学的に分析し、理解を深めることを目的とする。分析にあたっては、理論にとどまることなく特に実証分析を重視し、政治的・経済的側面だけでなく、文化的・社会的・心理的な側面からの検討を行う。具体的には、移民・難民・ディアスポラ・出稼ぎ・派遣・留学・国際交流・兵士・人身取引などさまざまな形のヒトの国際移動に伴って生じる文化の接触と変容、移動者のアイデンティティの変容と権利・安全をめぐる問題、送出国・経由国・ホスト国や国際組織の関与、移動者と移動元・移動先の社会との関係や多文化共存のあり方などを研究対象とする。また、ヒトの国際移動の歴史は古く、特にナショナル・ヒストリーとグローバル・ヒストリーをつなぐ現象とされる植民地化と脱植民地化の過程で起こった社会・文化変容やヒトの移動の影響は、現在にも広くみられる。従って、このような事例に関する歴史的分析も重視したい。これらの視点は、人間集団のなかでも、一般市民、マイノリティ、弱者の立場から国際社会の現象を捉えなおすことにもつながる。参加者と一緒に、より人の顔の見える国際関係像をさぐってゆきたい。

授業の到達目標 Objectives

国際関係においてヒトの移動が果たした役割を歴史的文脈のなかで理解し、現代国際社会のさまざまなイシューとのつながりを多角的に、人々の経験や感情を重視した（人の顔の見える）形で把握することをめざしたい。各参加者が現代の諸問題解決への具体的アプローチを、説得的に提示できるようになることが理想である。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

2016年度秋学期に開講されるプレ演習では、顔合わせと導入的講義に加えて、上級生のゼミ論中間報告を聞いて議論に参加することを通してこの分野の各種のテーマやアプローチに触れる機会を設ける。

授業計画 Course Schedule

以下は主として初年次履修学生春学期 I の授業計画です。秋学期の演習 II においては、輪読も行いますが、最終年次履修学生のゼミ論のテーマについて、

各自が報告を行う機会をふやします。1 年でゼミ論を執筆する予定の学生には、早期執筆のための個別課題の設定や個人指導も行う。

輪読、報告と討論の回では、基本的に各回について司会者、報告者、コメンテーター（議論の口火を切る役目）を決めて、学生の主体的参加と討論を重視します。

第 1 回：ガイダンス

第 2 回：導入的講義と問題提起：国際関係論の研究・分析とは？ なぜ国際移動が重要か？

第 3 回：導入的講義と問題提起：なぜ、いま、帝国史・脱植民地化史を把握することが必要か？

第 4 回～第 10 回：輪読：テキストを以下の教科書欄の導入的文献などから選び、履修者全員が事前に批判的・発展的に読んでくる。

あらかじめ指定された報告者・コメンテーターが内容の紹介と批判的・発展的論点の提示を行い、全員で討論をする。

第 11 回～第 14 回：ゼミ論テーマ・プロポーザル：各回につき、テーマの近い学生約 3-4 名ずつが各自のテーマ案を報告し、全体で質疑応答を行う。

第 15 回：まとめと夏休みの課題呈示（共通テーマによるグループ別共同研究、または共通テキストの批判的・発展的輪読）。

夏合宿＝例年 9 月を予定：夏休みの課題についての報告・討論。最終年次学生はゼミ論研究の中間報告。

教科書
Textbooks

<春学期Ⅰ：導入的文献>

S・カースルズ、M・J・ミラー著、関根政美、関根 薫訳『国際移民の時代 第4版』名古屋大学出版会、2011年。

マイロン・ウェイナー著、内藤嘉昭訳『移民と難民の国際政治学』明石書店、1999年。

ロビン・コーエン、ポール・ケネディ著、山之内靖監訳『グローバル・ソシオロジーⅠ、Ⅱ』平凡社、2003年。

トマス・ソーウェル著、内藤嘉昭訳『征服と文化の世界史』明石書店、2004年。

秋田茂『イギリス帝国の歴史-アジアから考える』中公新書、2012年。

塩川伸明『民族とネイション-ナショナリズムという難問』岩波新書、2008年。

(秋学期のⅡではより発展的な文献、英文文献を輪読する予定)

参考文献
Reference Books

詳細は開講中に履修者の関心に合わせて示すので、ここでは主な参考文献をあげておきます。

平野健一郎『国際文化論』東京大学出版会、2000年。

梶田孝道編『新・国際社会学』名古屋大学出版会、2005年。

日本比較政治学会編『年報2009：移民と国内政治の変容』ミネルヴァ書房、2009年。

平野健一郎ほか編『国際文化関係史研究』東京大学出版会、2013年。

北川勝彦編『イギリス帝国と20世紀 第4巻 脱植民地化とイギリス帝国』ミネルヴァ書房、2009年。

O・A・ウェスタッド著、佐々木雄太ほか訳『グローバル冷戦史』名古屋大学出版会、2010年。

ヴァミク・ヴォルカン著、水谷驍訳『誇りと憎悪：民族紛争の心理学』共同通信社、1999年。

初瀬龍平編『エスニシティと多文化主義』同文館、1996年。

梶田孝道・丹野清人・樋口直人『顔の见えない定住化-日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』名古屋大学出版会、2005年。

ディヴィッド・バットストーン著、山岡万里子訳『告発・現代の人身売買：奴隷にされる女性と子ども』朝日新聞出版、2010年。

Walker Connor, Ethnonationalism, Princeton University Press, 1994.

John Darwin, Unfinished Empire: The Global Expansion of Britain, Penguin, 2012.

Philip D. Curtin, The World and the West, Cambridge University Press, 2002.

Marjorie Harper and Stephen Constantine, Migration and Empire, Oxford University Press, 2010.

Alexander Betts and Gil Loescher, eds., Refugees in International Relations, Oxford University Press, 2011.

David Kyle and Rey Koslowski, eds., Global Human Smuggling, 2nd edn., Johns Hopkins University Press, 2011.

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	20%	論文作成の練習として書式にも留意し、分析的な内容であることを重視する。
平常点評価 Class Participation	80%	出席・報告内容・議論への貢献度を重視する。
その他 Others	%	

本ゼミでは、積み上げ式の演習と論文指導を行いますので、留学からの復学者、留学予定者を含めて、少なくとも3学期以上在籍される方を歓迎します。

前提科目が増えましたが、政治学科生、経済学科生も歓迎します。

ゼミ初年次終了までにできるだけ国際社会関係論を履習してください。左の科目に加え、国際関係論入門もすでに履習していることが望まれます。

主体的に研究を進める熱意を持ち、仲間を大切に、建設的な議論のできる学生のみなさんを歓迎します。したがって、当然ながら継続的な出席と議論への参加を重視します。

学部で卒業し実務をとおした社会貢献を考える学生諸氏はもちろんのこと、大学院進学希望者も大いに歓迎し、その目標にあわせた指導を行います。

留学計画がある場合には、各自の計画が履修／単位取得条件を満たすかどうかを事前に事務所で確認の上、応募時にわかる範囲で、その旨教員まで申し出てください。

国際政治経済学演習 I

2017

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
312	国際政治経済学演習 I (深川由起子)	春学期	3年以上：2単位	深川 由起子
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副題 Subtitle

現代東アジア政治経済研究：グローバリゼーションと新興国の経済発展

授業概要 Course Outline

東アジア (NIEs、ASEAN、中国及びインドなどを想定) はラ米や中東など他地域と比較し、その基礎条件の「多様性」を以て特徴付けられてきた。しかし、経済発展の歴史が積み重なるにつれ、特に工業化の過程でのグローバリゼーションの受容や反動、「圧縮された成長」が政治・社会にもたらす負荷の高さなど、共通体験が生まれてきた。近年では自由貿易協定 (FTA) を通じた経済統合の制度化や共通市場を目指した動きが地域としての求心力を高めることにつながっている。

本演習は政治・経済が現実に出会う場として、地政学的にも経済的にも日本に最も身近な東アジアを取り上げ、グローバリゼーションが新興国に与える影響について考察して行く。前半となる春学期では東アジア経済を語る際、焦点として取り上げられてきた問題について取り上げ、理論と現実の接点を学んで行く。東アジアは新興国としては極めて開放的な体系を有しており、理論より現実が先行し、発展メカニズムが解明されていない点も少なくないが、地域研究の知見も折り込みつつ、できるだけ最新の研究成果を取り上げながら接点を探って行くこととする。

授業の到達目標 Objectives

東アジア経済の主要、論点について基礎的な理解を深め、与えられた問いに沿って自分の論理を構築できるようにすること。問題意識を持って同時代の諸問題を考えられるようになること。幅広い問題の中から自分が相対的に関心を持つ問題を発見し、必要な分析ツールについて学び始めること。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

毎回課される参考文献を読んでレポートを作成。フィードバックを見ながら修正して次回には再提出する。

授業計画 Course Schedule

- 第1回：オリエンテーション (本演習の目的と概要)
演習の目的と概要、及び具体的な運用形式について説明します。また学生側のこれまでの学習状況に照らし合わせ、現実的な運用計画について一緒に議論します。
- 第2回：東アジアの経済パフォーマンス：奇跡からの転落と経済再構築
東アジアの経済発展が「奇跡」と言われたのは何故か、「奇跡」は何故、一転して通貨危機となったか、危機後の経済再構築では何が必要となっているのか、全体を見据えて議論します。
- 第3回：輸入代替工業化の政治経済体系
輸入代替型工業化政策の体系と理論的背景を学び、東アジアではどう運用されてきたのか、グローバル化の時代にあってもなお、途上国に貿易保護主義が残存する理由などについて学びます。
- 第4回：輸出主導型工業化の政治経済体系
輸入代替型工業化と輸出主導型といわれる体系の違いは何か、理論的には何に依拠するのか、東アジアでは何故、輸出主導型に転換し得たのか、政治経済的な理由を学びます。
- 第5回：国際分業と産業集積
新興経済にとっての貿易のメリットとグローバリゼーションの中で顕著となってきた産業集積の形成はどのような関係にあるのか、学びます。
- 第6回：直接投資と技術移転
直接投資を誘致できるためには何が必要か、また受け入れた外国企業からどのような技術の移転やスピルオーバーが可能となるのか、現実の事例を含めて考えます。
- 第7回：工業化と産業政策：政府の役割

工業化を推進する上で政府はどこまで、どのように介入することが望ましく、何がそうではないのか、検討します。

第8回：経済発展と金融の深化

実体経済と資本蓄積、金融の深化のバランスは何故、持続的発展に重要なのか、そのためにはどういった金融政策が望ましいのか、様々な議論を整理して学びます。

第9回：金融・資本の自由化

現代グローバリゼーションの特徴の一つは金融のグローバリゼーションの量的、質的变化です。新興経済はこれにどう付き合うべきか、東アジア通貨危機の体験を通じて考察します。

第10回：企業家とファミリービジネスの経営

工業化の担い手として地場の企業家は極めて重要な役割を果たしますが、新興国では圧倒的多数が家族経営の組織となります。グローバリゼーションの中でこれがどう機会であり、またリスクともなるのか、東アジア通貨危機の体験を通じて整理します。

第11回：経済危機と新興国の構造調整(1)

グローバリゼーションの下では脆弱な新興経済は様々な経済危機に陥りがちです。この回では工業化の過程での財政赤字などを原因とする古典的な累積債務危機のメカニズムについて東アジアの体験を分析し、構造調整のあり方や直面する問題点、持続的成長との関係などについて学びます。

第12回：経済危機と新興国の構造調整(2)

よりグローバリゼーションが進んだ今日では累積債務とは異なる危機、特に銀行危機を媒介とした流動性の枯渇による危機が頻発してきています。東アジア通貨危機はその典型であり、流動性をめぐる構造調整を累積債務危機同様に進めたことにはIMFの処方箋をめぐっても多くの批判がありました。この回では金融のグローバリゼーションと新興国の危機の原因や処方箋のあり方について考察します。

第13回：経済危機と新興国の構造調整(3)

前2回の危機は経済問題に焦点を絞りましたが、新興国の困難は成熟経済のように社会保障が整備されておらず、経済危機が政治・社会危機に直結し、成長基盤を大きく傷つけてしまう点にあります。この回では新興国の構造調整が直面する問題について取り上げ、近年の基本的な考え方の転換についても触れます。

第14回：市場移行と経済発展

東アジアには中国、ベトナムなど社会主義経済を出発点とする経済があります。社会主義経済からの転換は単なる「経済発展」ではなく、制度的、或いは国有企業問題など政治的な変化を含む「市場化」を要請します。この回ではグローバリゼーション下での市場移行のあり方について議論します。

第15回：地域経済統合と協力

発展の潜在性を強化する上でも、グローバリゼーションの否定的影響を緩和する手立てとしても、東アジアでは地域の経済統合が重要な問題として浮上しています。統合のメリット、デメリットを整理すると共に、地域の特徴でもある、自由化だけではない協力の推進がどういう意義を持っているのか考察して行きます。

教科書 Textbooks

特になし。授業時に配布の回毎のシラバス、リーディング・リストによる。

参考文献 Reference Books

同上。

評価方法 Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	0%	試験形式では成績評価は実施しない。
レポート Papers	70%	毎週、課されるレポートの内容評価を平均して算出する
平常点評価 Class Participation	25%	プレゼンテーションや議論の水準、ディスカッションへの参加程度など。
その他 Others	5%	現地視察やゼミの運営、とりまとめへの貢献など。

備考・関連URL Note・URL

国際政治経済学演習 I

2017

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
313	国際政治経済学演習 I (山崎眞次)	春学期	3年以上：2単位	山崎 眞次
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	政専・経専・国専	

副題 Subtitle

ラテンアメリカ地域研究

授業概要 Course Outline

ラテンアメリカは日本から地理的に遠く、また政治的・軍事的な関連要素は少なく、あまり身近な地域ではない。だが政治や軍事の面で緊張関係にはないということは、それだけ摩擦も少ないということである。明治以降、日本とラテンアメリカは地政学的利害が衝突することなく、経済的協定や文化交流において良好な関係を築いてきた。資源に恵まれない日本は、中南米諸国が産出する金・銀・銅・原油等の豊かな鉱物資源や農産物を輸入し、一方で工業製品をもとめるかの地に品質が高くしかも廉価な製品を輸出し、緊密な経済関係を構築してきた。文化面では日系移民の多い地域に日本文化を紹介し、かの地からはラテン音楽・舞踊が輸入され、最近では著名なサッカー選手やコーチが来日し、日本のサッカー技術の向上に貢献している。

一方政治学の観点からラテンアメリカを展望すると、一見「民主化」を達成したように見えるが、実際には「定着」しておらず、民主主義の質が問われる。経済的視点から見ると、社会的平等が推進されているとはいえず、いまだ富の偏在が目立ち、貧困問題と所得分配の解消は急務である。社会的公正の改善には持続的な成長と適切な社会政策の実施を可能にするマクロ経済の安定維持が不可欠である。また貧困から逃れるために米国への移民が顕在化している。失業率が高く低賃金である中南米地域から雇用状況が恵まれた米国への移民は、送り出し国の失業率の低下には貢献しているが、受け入れ国の米国では失業率と不正規移民の増大を生み出し、喫緊の解決策が求められる。

本演習ではヨーロッパ人の征服・植民から500年を経たラテンアメリカが欧米の影響を受けながらも独自の地域性を模索している現状を分析し、今後のラテンアメリカ研究へ微力ながら貢献することを目的とする。

キーワードとしては、民主化、権威主義体制、多文化主義、貧困、暴力、古代文明、移民、先住民、環境などがあげられる。

授業の到達目標 Objectives

本セミナーの参加者が、セミナーでの輪読、発表、ディベートを通じて、ラテンアメリカに関する知見を高め、かの地での政治的・経済的・社会的諸問題を把握・分析し、その解決策を提言する能力を涵養することである。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

輪読する本の指定ページを事前に読み、テーマに関して下調べを各自が行うこと。
演習終了後、調べた内容をメモ用紙で提出すること。

授業計画 Course Schedule

第1回：オリエンテーション
第2回－5回：ラテンアメリカ概説
第6回－10回：政治
第11回－14回：経済
第15回：理解度の確認

教科書 Textbooks

特になし

参考文献
Reference Books

細野・畑編「ラテンアメリカの国際関係」、松下・乗編「ラテンアメリカ政治と社会」、西島・小池編「現代ラテンアメリカ経済論」、山崎「メキシコ 民族の誇りと闘い」、「メキシコ先住民の反乱」、ハンチントン「第三の波」、ダール「ポリアーキー」、国本編「ラテンアメリカ21世紀の社会と女性」
Fox&Rivera-Salgado[Building migrant civil society:indigenous Mexicans in the US]

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	0%	試験は実施しない
レポート Papers	30%	ゼミ生が提出する研究計画書
平常点評価 Class Participation	60%	2回の発表とディベート参加。事前調査文書の提出。
その他 Others	10%	ゼミ合宿への参加

備考・関連URL
Note・URL

<http://members3.jcom.home.ne.jp/yamasin/>

学際領域演習 I

2017

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
401	学際領域演習 I (岡山茂)	春学期	3年以上：2単位	岡山 茂
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	グローバル演習 政専・経専・国専	

副題 Subtitle

フランスの政治と文学 (1885-1945)

授業概要 Course Outline

19世紀末から20世紀前半にかけてのフランスの文学者（詩人、作家、知識人）の政治参加と、彼らの文学への政治の影響について考えます。私はステファヌ・マラルメ（1842-1898）と象徴主義の詩人たちについて語ります。みなさんもこの時代の「フランスの政治と文学」にかかわるテーマを選んで、自由に語ってみてください。

授業の到達目標 Objectives

過去を知らずに未来を語ることはできません。19世紀末から20世紀前半にかけてのフランスの、それも文学者たちの政治参加について知ることは、21世紀の前半の日本に生きるわれわれにも迂遠なことではありません。もちろん「近代」を知るにはさらに過去をさかのぼり、啓蒙思想、ルネッサンス、中世、古代ローマ・ギリシャなどについても知ることも必要です。しかしここでは1885年から1945年までの60年間にしぼります。当時のフランスの雰囲気、ノスタルジーとしてではなく現代につながる歴史としてつかまえられるようになればよしとします。

一人ひとりの文学者が現在（当時の政治状況）とどのように向き合っていたかを知るには、彼らの作品や彼らが残したことを探るしかありません。しかし耳を澄ませば、時代の流れのなかに生じるさまざまな「不協和音」も聞こえてきます。どうして20世紀は二つの世界大戦を経験せねばならなかったのか、われわれが生きるいまの世界はこれからどのように変化するのか、そのような「未来」への問いを、われわれは自らに向かって発することになるでしょう。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

テキストを読んでくる。自分で読むべきテキストを探す。

授業計画 Course Schedule

1回目はオリエンテーション。2回目からは毎回、前半はまず30分ほど、岡山が「マラルメとサンボリストたち、イマジネールな知の行方」というテーマで話します。意見交換ののち、後半はテキスト（下の教科書を参照）を読みます。

私の話は、①ドレフュス事件、政教分離法（1905）、第1次世界大戦のおりのサンボリストの反応、②ヨーロッパや日本でのサンボリズムの受容、③サンボリズムにかかわるいくつかの概念（マラルメの「詩の危機」、ジャン＝フランソワ・リオタールの「脱正当化」、ピエール・ブルデューの「象徴暴力」など）、をめぐるとなります。それらについて語ることで、①文学者がいかに政治にほんろうされるか、②その批判的政治参加はどのようにして可能になるのか、③「イマジネールな知」（ミシェル・セールによればガストン・バシュラールは「最後のサンボリスト」だそうです）はいまだに可能か、という問いに答えようとするものです。

教科書 Textbooks

テキストとして、ランボー（「酔いどれ船」）、ゾラ（「私は弾劾する」）、マラルメ（「音楽と文芸」）、ペギー（『我らが青春』）などを読みます。プリントで配ります。

参考文献
Reference Books

岡山茂、『ハムレットの大学』（新評論、2014）
その他は教室で紹介します。

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	%	
平常点評価 Class Participation	%	
その他 Others	100%	出席とレポートにより評価します。

備考・関連URL
Note・URL

- (1) 第2外国語にフランス語を選択しなかった人でもかまいません。テキストは翻訳を用います。
- (2) プレゼミ（2016年秋学期）では参考文献にあげた『ハムレットの大学』を読みます。その第1部（「イメージネールな知の行方」）についての感想をレポートとして課します。

学際領域演習 I

2017

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
402	学際領域演習 I (荻野静男)	春学期	3 年以上：2 単位	荻野 静男
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	グローバル演習 政専・経専・国専	

副 題 Subtitle

オペラ／音楽劇研究の現在—オペラ／音楽劇とヨーロッパ文化史

授業概要 Course Outline

オペラ／音楽劇は昔から欧州で愛好されてきた芸術ジャンルです。わが国においても新国立劇場等のオペラ劇場の竣工以降、ヨーロッパと同様の上演・観劇環境が整いつつあります。オペラ／音楽劇への関心は年々高まり、今日ではテレビ・コマーシャルなどにもオペラのアリアが使用されるほどになりました。こうした状況を見ると、わが国でもオペラが大衆的レベルに浸透していることがわかります。

本演習では比較的入手しやすい日本語文献を取り上げ議論します。学術的価値のあるしっかりした本です。これらを輪読しながらオペラの歴史的把握を試みます。もって17～20世紀のヨーロッパ文化史を概観することができればと考えています。また授業の際には関連のオペラ／音楽劇を適宜DVD、Blu-ray、you tube等で視聴したり、該当する楽譜や台本も参考にします。なお課外活動として、学期中に2度ほど新国立劇場などでオペラや音楽劇（バレエ等含む）の鑑賞を行う予定。音楽、演劇、文学、舞踊（バレエ、ダンス）、映画、歴史等に関心のある学生の参加を希望します。

またこの演習に参加希望の者は、2016年度秋学期に開講するプレ学際領域演習（担当：荻野）にも参加するようにしてください。

授業の到達目標 Objectives

1. オペラ／音楽劇の文化史的把握
2. 現実の政治的コンテキストにおいてオペラ／音楽劇を理解できるようになる
3. オペラ／音楽劇が好きになること

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

教科書や参考文献を読みながら、各自you tubeなどで舞台映像を視聴しオペラ作品に親しむ
新国立劇場や東京文化会館などに赴き、オペラ／音楽劇の実際の舞台に接する

授業計画 Course Schedule

第1回～第8回： 丸本隆編『オペラの18世紀—バロックからモーツァルトへ』彩流社2003年、2,800円
第9回～第15回： 澤田肇著『フランス・オペラの魅惑—舞台芸術論のための覚え書き』上智大学出版 2013年、1,905円

教科書 Textbooks

上記2冊

参考文献 Reference Books

必要に応じて教場で指示

評価方法 Evaluation

	割 合 (%) Percent (%)	評 価 基 準 Description
試 験 Examinations	%	
レポート Papers	70%	学期末に4,000字程度のレポート提出。テーマは参加者各自の関心に 応じて選択。評価基準は以下のとおり。 1. 内容の充実度 2. 文章力 3. 構成力
平常点評価 Class Participation	30%	授業への貢献度による。ゼミへの積極的な参加姿勢の重視。 1. 討論への参加度 2. 発言内容 恒常的出席を単位授与の基本原則とする
そ の 他 Others	%	

備考・関連URL Note・URL

<http://opera-and-music-theatre.jimdo.com/>
<http://www.waseda.jp/prj-opera-mt/index.html>
<http://pioneer.jp/onkan/active/opera.html>
<https://twitter.com/operaexpress>
<http://qqcumb.web.fc2.com/>
<http://www.worldfolksong.com/classical/opera/>

学際領域演習 I

2017

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
403	学際領域演習 I (室井禎之)	春学期	3年以上：2単位	室井 禎之
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	グローバル演習 政専・経専・国専	

副題 Subtitle

コミュニケーションとことば

授業概要 Course Outline

私たちの社会を作り上げているものはそのメンバーの間のコミュニケーションです。もちろんコミュニケーションにはさまざまな種類のものがありますが、ここで取り上げるのは、ことばによるコミュニケーションです。しかしこれらとの関連で、異なるタイプのコミュニケーション（たとえばノンヴァーバルコミュニケーション）について考えることもできます。

参加者は自分の問題意識に従って研究テーマを設定することができます。たとえば、さまざまなタイプのコミュニケーションにおけることばの働き、言語のヴァリエーション（地域の変種、社会的変種など）、社会とことば、言語政策、対人関係のことば、異文化コミュニケーション、などが考えられます。授業では、それぞれの問題意識に沿って、どのようなアプローチがありうるのか、先行研究には何があるのかなどを案内しながら、考えます。演習ですから、学生の発表とディスカッションを中心に進めて行きます。

あらゆるコミュニケーション形態の基礎となっているのは個人の間のコミュニケーションです。そこにおけることばの働きについては、語用論（Pragmatics）と呼ばれる言語学の一分野での研究を知ることが不可欠です。授業ではその主要な理論や分析方法についての導入も行います。また必要に応じてことばの働きそのものについての紹介もします。

授業の到達目標 Objectives

1. コミュニケーションとことばについて自覚的になり、自らのコミュニケーションを反省的に見、改善につなげる試みが行えるようにすること。
2. コミュニケーションに関わるファクターと、それらの働きについて知ることで、他者のコミュニケーションを理解する能力を高めること。

以上2点が本演習のIからIVを通して学修することによって到達する目標です。最初の段階であるIではコミュニケーションとことばについて考えるための基礎を得ることに重点を置きます。具体的には、参加者の問題意識に対応するテーマの基本的な文献を選び、その理解を通じてコミュニケーションに対する感覚を養い、分析のための手法を得ます。また次の段階への展望を開きます。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

自分のテーマについての文献を探し、読み、発表を準備すること。ディスカッションにもとづき追加調査を行うこと。上記の作業を踏まえてレポートを執筆すること。

授業計画 Course Schedule

初回はオリエンテーションを行います。参加者の問題関心を出してもらい、それに応じた方向性を検討したり、参考文献を紹介します。

2回目以降は参加者が自分のテーマについて発表し、それを全員で検討しながら議論を深めてゆきます。またそれと平行して、教科書を読みながら、コミュニケーションにおけることばの働きについて学びます。こちら参加者が分担して発表し、不明点などを全員で検討します。

教科書 Textbooks

今井邦彦『語用論への招待』（大修館）

参考文献 Reference Books

D. スペルベル/D. ウィルソン『関連性理論』（研究社）
P. グライス『論理と会話』（勁草書房）
安井稔『言外の意味』（研究社）
J. サール『言語行為』（勁草書房）
他授業時に随時紹介する

評価方法 Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	%	
平常点評価 Class Participation	%	
その他 Others	100%	1. 授業時の口頭発表、ディスカッションへの参加状況 2. 1を踏まえた発表の概要と振り返りを小レポートとして提出 3. 学期中の成果と次の段階への展望をまとめたレポートを学期末に提出 以上3点を総合的に評価します

備考・関連URL Note・URL

学際領域演習Ⅰ

2017

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
404	学際領域演習Ⅰ（ロペスアルフレド）	春学期	3年以上：2単位	ロペス アルフレド
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	グローバル演習 政専・経専・国専	

副題 Subtitle

西洋文学論

授業概要 Course Outline

文学はどう定義すればいいのか？その本質は何であるのか？読者は本を読むということから何が得られるのか？人間にとってフィクションが必要なのか？ヨーロッパではこのような質問に答えようとする人が、西洋文化が形成され始めるや否や次々に現れてきました。ギリシャ・ローマ時代からアリストテレス、ホラチウスを中心に文学についての考察は一つの欠かせない要因となっているのは間違いのないことです。18、19世紀のロマン主義を経て、とくに20世紀以降では人文科学の目覚ましい発展の中で文学論がなくてはならない学問として認められるようになりました。

この講義では西洋で文学について考えられたことを紹介しながら本を読むことはどこまで有意義で楽しいことなのかを確認して、様々な意味での文学の重要性を強調し、抽象的な考え方を発展させ西洋文化の理解を深めることを目指します。

授業の到達目標 Objectives

文学の理解を深める。これにより西洋文化をより分かりやすくする。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

- 第1回：本講義の目的と概要について説明します。
- 第2回：文学は何か（1）
- 第3回：文学は何か（2）
- 第4回：アリストテレスの「詩学」（1）
- 第5回：アリストテレスの「詩学」（2）
- 第6回：ホラティウスの「詩論」（1）
- 第7回：ホラティウスの「詩論」（2）
- 第8回：ロシア・フォルマリズム
- 第9回：イギリス文学論
- 第10回：アメリカ文学論
- 第11回：構造主義（1）
- 第12回：構造主義（2）
- 第13回：マルクス主義
- 第14回：学生の発表
- 第15回：学生の発表

教科書 Textbooks

プリント。ただし、プレ演習のほうで
 岩本一 「読みのポリフォニー・現代文学理論入門」 雄山閣出版
 を使用する。

参考文献
Reference Books

ラマーン・セルデン 「ガイドブック・現代文学論」 大修館書店
T. イーグルトン 「文学とは何か」 岩波書店
内多毅 「現代文学理論入門」 創元社

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	%	
平常点評価 Class Participation	%	
その他 Others	100%	出席や授業に取り込んだこと、発表を評価する

備考・関連URL
Note・URL

ジャーナリズム・メディア演習Ⅰ

2017

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
501	ジャーナリズム・メディア演習Ⅰ(齊藤泰治)	春学期	3年以上：2単位	齊藤 泰治
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	グローバル演習 政専・経専・国専	

副 題 Subtitle

ジャーナリズムの視点からの中国研究Ⅰ

授業概要 Course Outline

本演習は「ジャーナリズム・メディア演習」として設置されており、中国に関してジャーナリズム的な視点から研究することを目的とする。具体的には、中国に関する報道を通して中国を研究するという側面と、中国におけるジャーナリズム、報道について研究するという側面を含む。このような研究を行うためには、中国の政治、社会、文化、歴史をはじめとする諸分野に対する旺盛な関心と知識が必要である。それと同時に、グローバルな視点から研究を行うことを心掛けるべきであるのは言うまでもない。

基礎となる文献を読み、具体的な報道事例等を通してジャーナリズムの視点から中国研究を進めるための方法論を組み立てていく。

授業の到達目標 Objectives

これまでの内外の研究成果を踏まえ、中国報道に関して現状分析のための基礎力を身につけることによって、ジャーナリズムの視点から中国を研究することができるようにする。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

第1回目はオリエンテーションを行う。第2、3回は資料について説明する。第4回以降は資料を読むと同時に、受講者に研究発表をしてもらう。最終回は全体のまとめを行う。

教 科 書 Textbooks

特定の教科書は使用しない。

参考文献 Reference Books

随時紹介する。

評価方法 Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	0%	試験は行わない。
レポート Papers	70%	レポートのテーマを最初から計画的に考え、提出期限までに提出するものとする。
平常点評価 Class Participation	30%	出席するだけでなく、授業への積極的貢献をもとに評価を行う。短いレポートを随時書いてもらう。
その他 Others	0%	コミュニケーションを大切にしてほしい。

備考・関連URL Note・URL

ジャーナリズム・メディア演習Ⅰ

2017

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
502	ジャーナリズム・メディア演習Ⅰ(瀬川至朗)	春学期	3年以上：2単位	瀬川 至朗
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	グローバル演習 政専・経専・国専	

副題 Subtitle

ジャーナリズム研究と調査報道・ルポルタージュの実践

授業概要 Course Outline

ジャーナリズムは何のためにあるのか。Kovachらは「ジャーナリズムの第一の目的は、市民にたいして自由と自治に必要な情報を伝えることだ」(The Elements of Journalism)と指摘する。その規範的機能は、権力の監視であり、社会の争点などについて問題提起をすることである。しかし現実には、政府の発表を無批判に伝えるマスメディアの発表報道がはびこり、視聴率重視のニュース報道がメディア不信を醸成する一因となっている。ネット社会もジャーナリズムに変革を迫っている。従来のメディア慣習にとらわれない、新しいジャーナリズムのあり方が模索されている。本演習(Ⅰ～Ⅳ)は、基本的な文献講読をつうじ、ジャーナリズムの機能と課題について理論面からの理解を深めるとともに、ジャーナリズムの実践として、さまざまな社会問題について受講生が能動的な問題意識をもって調査・取材に取り組み、一般読者を対象とする調査報道記事やルポルタージュの制作(映像作品も可)をめざす。各演習で制作した作品はゼミ生のウェブマガジン<Wasegg> <http://wasegg.com>に掲載していく。ジャーナリズム研究として、新聞・テレビの報道・番組分析やソーシャルメディアの発信内容の分析などに取り組む学生も受け入れる。

演習Ⅰは、文献講読を通して、①ジャーナリズムの規範的機能と課題、②マスメディアの組織構造とニュース生産過程、③ジャーナリズムと権力、④ソーシャルメディア時代のジャーナリズム——などについて理解を深める。同時に、ジャーナリズムの実践としての調査・取材に必要な取材手法を学び、地域や人物に焦点をあてた記事を書く実習をする。

演習Ⅱは、社会問題(原発問題、東日本大震災からの復興、沖縄基地問題、水俣病の現在、格差と貧困、若者と政治、医療介護、高齢者問題、人口減社会など)についての調査・取材を数人のグループに分かれて実施する。各グループによる発表・議論のほか、ジャーナリストを講師に招き、調査報道やデータ・ジャーナリズムの手法、ノンフィクションの取材・執筆について学ぶ。

演習Ⅲと演習Ⅳでは、受講生が自ら関心のある社会問題のテーマを選択して調査・取材し、調査報道の記事作品の制作、あるいはルポルタージュ作品・映像作品の制作をめざす。根拠のあるデータにもとづく作品制作を重視しており、解説論文も合わせて執筆する予定である。

授業の到達目標 Objectives

ジャーナリズムの機能と課題について理論的に理解するとともに、自ら能動的な問題意識をもって社会の課題を発見し、根拠をもって市民に伝えるコミュニケーション力を習得する。ジャーナリズムの実践にもとづき、批判的なメディア分析力を習得する。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

*授業計画

演習Ⅰ(2017年度春学期)

1回：ガイダンス

2回～6回：文献講読、グループディスカッション

7回～13回：取材手法の学習、地域・人物記事の取材と記事についての議論

14回～15回：演習Ⅱで取り上げる社会問題についての議論

プレ演習(2016年度秋学期)

計8回を予定

ゼミ生同士のインタビューと記事作成、文献講読、新聞記事発表

1回：ガイダンス、インタビュー記事について

- 2回－4回：新聞記事発表／グループディスカッション
 インタビュー記事／グループディスカッション
 5回－8回：文献講読／グループディスカッション

教科書 Textbooks

演習で講読する課題図書は初回のガイダンスまでに指示する。

参考文献 Reference Books

- 大石裕編『ジャーナリズムと権力』（世界思想社、2006年）
 竹下俊郎『増補版 メディアの議題設定機能』（学文社、2008年）
 谷口将紀『政治とマスメディア』（東京大学出版会、2015年）
 藤竹暁編著『図説 日本のメディア』（NHK出版、2012年）
 林香里『マスメディアの周縁、ジャーナリズムの核心』（新曜社、2002年）
 『山本美香最終講義 ザ・ミッション 戦場からの問い』（早稲田大学出版部、2013年）
 E・パリサー『フィルター・バブル——インターネットが隠していること』（早川書房、2013年）
 C. サンステーション『インターネットは民主主義の敵か』（毎日新聞社、2003年）
 W. リップマン『世論（上）（下）』（岩波文庫）
 B. Kovach & T. Rosenstiel "The Elements of Journalism" (3rd Edition, Three River Press, 2014)
 B. Kovach & T. Rosenstiel "Blur: How to Know What's True in the Age of Information Overload" (Bloomsbury Publishing plc, 2011)
 J. Gray, etc. ed. "The Data Journalism Handbook" (O'Reilly, 2012)

評価方法 Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	40%	期末に提出してもらうレポートとインタビュー実習の記事
平常点評価 Class Participation	60%	ゼミへの出席、ゼミでの発表とレジュメ、他の受講生の発表への質疑などを総合的に評価する。
その他 Others	%	

備考・関連URL Note・URL

ゼミ合宿を実施します。

ジャーナリズム・メディア演習Ⅰ

2017

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
503	ジャーナリズム・メディア演習Ⅰ(ソジエ内田恵美)	春学期	3年以上：2単位	ソジエ内田 恵美
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	グローバル演習 政専・経専・国専	

副題 Subtitle

政治言語学－ディスコース分析の理論と実践

授業概要 Course Outline

グローバル化やメディアの発達により、現代社会の中で言語がはたす重要性が高まっている。本講義では、政治権力を持つ者やメディアなどがどのような言葉を使って「社会的な現実」を構築し、一定の社会的規範を常識化し、正当化しているかを分析し、考察するための理論と方法を学ぶ。講義の前半は分析のために必要な概念や理論を学ぶが、後半は受講者各自がテーマを決めて分析を試みる。本演習は、演習参加者の関心に合わせて、英語・日本語の研究文献をもとに議論する。

This seminar introduces political discourse analysis, that is, analysis of the way language is used in contemporary social institutions. You will look at the principles and methods developed by critical discourse analysts such as Fairclough and van Dijk. They are concerned with how those in power, such as politicians and the media, try to generate particular representations of the world in order to provide people with reasons for acting in certain ways.

授業の到達目標 Objectives

政治ディスコース研究の基礎を培うため、その背景となる理論や分析方法を学ぶ。この講義では言語学的なアプローチを取り、質的分析の在り方について考える。受講者はこの研究方法の意義と限界を理解し、独自で研究を進めるための基本的な能力を養う。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

第一回：オリエンテーション
第二回－第九回：講義、文献講読（英語および日本語）
第十回－第十一回：ディスコース分析の計画と準備
第十二回－第十四回：ディスコース分析レポートの書き方、準備
第十五回：ディスコース分析レポート提出

教科書 Textbooks

授業中に指示、または配布。

参考文献 Reference Books

Theo van Leeuwen (2008) Discourse and Practice: New Tools for Critical Discourse Analysis. Oxford University Press.

評価方法 Evaluation

	割 合 (%) Percent (%)	評 価 基 準 Description
試 験 Examinations	%	
レポート Papers	50%	ディスコース分析計画書、レポートなど
平常点評価 Class Participation	50%	授業時における報告、発言、議論など
そ の 他 Others	%	

備考・関連URL Note・URL

ジャーナリズム・メディア演習Ⅰ

2017

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
504	ジャーナリズム・メディア演習Ⅰ(高橋恭子)	春学期	3年以上：2単位	高橋 恭子
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	グローバル演習 政専・経専・国専	

副題 Subtitle

ジャーナリズムの現在と未来～映像ジャーナリズムを中心に

授業概要 Course Outline

経済危機やインターネットの進展などによって、メディア産業は世界的に危機の時代を迎えている。米国では、インターネット上で報道活動を展開する非営利組織(NPO)が相次いで設立され、ジャーナリズム再生に向けた新たな動きが見られる。日本においても、新聞および放送業界は広告収入の落ち込みや販売部数の低迷、視聴率の低下という厳しい経済環境に直面している。放送と通信の融合、ソーシャル・ネットワークの出現等によって映像メディア環境が激変している今、メディアの公共性、ジャーナリストのプロフェッショナルリズムを改めて問い直すことが必要だ。

本演習では、放送を中心とする映像メディアに見られる問題を提起し、映像メディアの現在、未来を検証する。具体的には、1. 講義と討論「映像メディア検証」、2. 学生によるメディア分析、3. 学生による取材・調査、4. 次世代ジャーナリズム関連書の購読、5. 成果物(文章、映像、写真、Web等)の制作・発表・評価から構成する。映像メディア分析では、メディア・リテラシー研究の分析手法を採用し、Ⅰメディア・テキスト、Ⅱオーディエンス、Ⅲテキストの生産・制作の3つの領域から考察する。

これまでに学生が手がけた取材テーマは「被災地のメディア」「ポジティブ・福島」(福島の復興について)、「戦後70年の記憶と記録」である。2016年度は、「新たなジャーナリズムへの挑戦」をテーマに、夏休み中に、パナマ文書、米系オンラインメディア、新聞社のパブリック・エディター制度などの取材を行っている。ゼミ合宿は、①南相馬市の小学校の協力を得て、6年生とともに、「南相馬の地域文化」をテーマに映像制作、②南相馬復興ツアーと飯館村のスタディ・ツアーを実施する。加えて、桜井南相馬市長とのディスカッションを通じ、東日本大震災から5年半経っても山積する問題について理解を深める予定である。2016年度前期は、101歳のジャーナリストとのディスカッションから、ジャーナリズムのあるべき姿について学んだ。他に、文献「インテリジェンス・ジャーナリズム」の購読とテレビニュース分析を行っている。プレ演習では、課題図書プレゼンテーション、メディアリテラシーのアプローチによるメディア分析の基礎実習を中心に学ぶ。3, 4年のプレゼンテーションにも出席する。

授業の到達目標 Objectives

メディアをクリティカルに分析する力とメディアを創造する実践的な力を養う。

実践はドキュメンタリー、フォトストーリー、Webコンテンツ、ソーシャルメディアを利用したコンテンツなど個々の知識と能力によって選択する

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

文献やニュース番組分析を通して、メディアをクリティカル分析する力を養う。この経験から、自らテーマを設定し、取材活動を行う。取材した内容は、ゼミのサイトなどで原稿や映像として発表する。

授業計画 Course Schedule

- 第1回：オリエンテーション(本講義の目的と概要)
『私』を伝える」プレゼンテーション (3, 4年合同) 4～5時限
- 第2回：映像メディア検証とメディア・リテラシー
何をどう分析するか、メディア分析の第一歩
- 第3回：映像制作のための準備
公共広告をつくる
- 第4回：課題図書
課題図書のプレゼンテーション
- 第5回：メディア分析

学生によるメディア分析プレゼンテーション 課題図書発表
 第6回：メディア分析
 学生によるメディア分析プレゼンテーション 課題図書発表
 第7回：コミュニケーションをつくりだす
 映像による公共広告のプレゼンテーション
 第8回：ニュースバリューについて
 ニュースバリューとは何か NHKニュースと民放のニュース ニュースの価値判断について
 第9回：メディア分析
 学生によるメディア分析プレゼンテーション 課題図書発表
 第10回：ジャーナリストを迎えて
 ゲスト：「記憶と記録」ドキュメンタリー監督 (予定)
 第11回：ニュース分析
 ニュース分析発表 課題図書発表
 第12回：企画のブレーンストーミング
 夏休みの課題 企画のブレーンストーミングによりテーマを設定
 第13回：ニュース分析
 ニュース分析発表 課題図書発表
 第14回：ニュース分析
 ニュース分析発表 課題図書発表
 第15回：テーマ設定と企画、調査、取材の発表
 夏休みの課題のテーマ設定と予備調査/取材の結果のプレゼンテーション

教科書 Textbooks

そのつど、印刷物を配布する

参考文献 Reference Books

「NHK」松田浩 岩波新書
 「NHKvs日本政治」エリス・クラウド 東洋経済新報社
 「メディア・リテラシー教育 学びと現代文化」、デビッド・バックingham 世界思想社
 「メディア・リテラシーの現在と未来」鈴木みどり編著 世界思想社
 「ドキュメンタリー映画の地平」佐藤 真
 「マスコミュニケーション研究」デニス・マクウェル 慶応義塾大学出版会
 「シビック・ジャーナリズムの挑戦」寺島英弥 日本評論社
 「新聞記者」柴田鉄治、外岡秀俊 朝日新聞社
 「お前はただの現在に過ぎない」村木良彦他 朝日文庫
 「ジャーナリズムの原則」ビル・コバッチ、トム・ローゼンスティール 日本経済評論社
 「アメリカ・メディア・ウォーズ」大治朋子 講談社現代新書

評価方法 Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	0%	なし
レポート Papers	25%	メディア分析 メディアリテラシーの理解度。
平常点評価 Class Participation	50%	出席と授業の主体的参加度。
その他 Others	25%	コンテンツのプランニングと実践力。

備考・関連URL Note・URL

映像制作のための技術を身につけたい場合は、グローバルエデュケーションセンター開講の「映像芸術表現」など映像系科目を受講することをお薦めします。

関連URL：

ゼミサイトは「Action! from critical to creative」

<http://www.waseda.jp/sem-kytwaseda/>

facebook「高橋恭子ゼミ」(夏の合宿状況がわかります)

ジャーナリズム・メディア演習Ⅰ

2017

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
505	ジャーナリズム・メディア演習Ⅰ(田中幹人)	春学期	3年以上：2単位	田中 幹人
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	グローバル演習 政専・経専・国専	

副題 Subtitle

ソーシャル・メディア時代の＜科学的＞ジャーナリズム

授業概要 Course Outline

インターネット、ことにソーシャル・メディアの登場以降、社会のあり方は大きく変わりつつあります。しかし、マスメディアの力が失われたわけでもなく、社会の議論の有り様は極めて複雑化しています。本演習では、この変動の時代における知のあり方、社会的問題が問題としてメディアの中に立ち現れるさまの検討、あるいは「メディアが文化を形作り、文化がメディアを形作る」あり方や、あるべき姿の検討を通じて、その解決へのジャーナリズム的取り組みまでを俯瞰しようと試みます。

理論面では、(批判的)メディア論、ジャーナリズム論はもちろん、科学技術社会論、知識社会学などを基盤にします。

方法論としては、新聞などの伝統的メディアとインターネット・メディアのいずれか／いずれもを対象に、質的・量的研究を組み合わせた「混合研究法」を指向しています。このため、内容分析(含・定量テキスト解析)、言説分析から社会ネットワーク分析など多様な手法を扱います。個別の理論や研究手法の基礎については他の講義で習得することを期待します(学習のためのアドバイスはします)。

【参考】

現在、担当教員が関心を持っている問題群は次の通りです：科学技術のような専門知はメディアでどういう意味を持つ(べき)か？／リスクはメディアでどのように正統化される(べき)か？／リスクのデータは、ジャーナリズムにおいてどのような意味を持つか？／マスメディアとソーシャル・メディアはどのように絡み合い、社会の議題を生み出しているか？／人々はそのような環境の中で、どのように文化的な意味を作り出し、議論しているのか？／人々はソーシャル・メディアの議論を通じて、なぜ・どうして争うのか？

授業の到達目標 Objectives

「研究」という営みを通じて身につけることができる(かもしれない)能力は、次の2つの問いに関わっています：

- 1) まだ誰も解いていない、面白い問いを考えよ。
- 2) その問いに答えよ。

社会問題の解決、革命、イノベーション、発展、発見――個人、そして社会において重要なことがらは、全てこの「問いと答え」への取り組みから生まれてきました。

しかし、この能力を身につけることは簡単ではありません。先人の知の蓄積に基づかない「問い」は、単なる独りよがりな滑稽なものです(すでに分かっていることを問うても仕方ありません)。そして、「答えるすべの無い」問いもまた、無意味なものです。

皆さんがこれまでの「勉強」の中で解いてきた「問い」は、基本的に誰かが答えを知っているものでした。しかし「研究」という行為を通じて、初めて皆さんは「問い」の立て方と「答え方」の双方を創造的に問われることになります。

研究とはいわば、皆さんがこれまで勉強してきたことすべてを使って、初めて取り組む「時に苦しく、でも最高に面白い知の営み」です。

あなたがどんな道を歩むにせよ、この「問いを立て、答える道筋を見つける」能力は、人生を豊かにしてくれるはずです。

本演習を通じて、これらの能力の一端を身につけることを期待します。

事前・事後学習の内容
Preparation and Review

【プレ演習（2年次）について】

- ・2年次のプレ演習期間は、基本的な日本語文献の輪読に充てます。基本的には反転授業形式（自身で本を読んできて、定期的開催されるディスカッションに参加）とします。
- ・なお、講義開始にあたり時間割調査を行った上、全員の時間が合う時間に開催します。

【2年～3年次春学期の講義履修について】

この講義以外にも知識を補完する講義を履修した上で、3年次ゼミに臨むことを強く推奨します。例えば次のような講義です：

- ・担当教員の「メディア論」（3年次春）
- ・統計講義（後日指定）

授業計画
Course Schedule

【演習I】第01回：ガイダンス

第02-07回：データを通じて考える基礎訓練

第08-14回：英語文献輪読／方法論の検討

第15回：学期の振り返り

【演習II】

第16回：ガイダンス

第17-28回：文献輪読／研究計画発表

第29-30回：学期の振り返り

教科書
Textbooks

適宜講義内で指定します。現時点では、例えば次のような書籍を読んで来て貰ったうえで、議論することを想定しています：

Couldry, N., "Media, Society, World: Social Theory and Digital Media Practice", SAGE, 2012.

Fuchs, C., "Social Media: A Critical Approach", SAGE, 2013.

Fenton, N., "New Media, Old News", SAGE, 2009.

参考文献
Reference Books

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	50%	定期的に課題を出すレポートをもとに評価する。
平常点評価 Class Participation	50%	講義への出席、講義内での発表担当回での様子などから評価する。
その他 Others	%	

(担当教員の興味の範囲に縛られる必要はありませんが) 教員の関心事を把握するために、適宜参照してください。

- 1) 田中幹人・丸山紀一郎・標葉隆馬『災害弱者と情報弱者』筑摩書房(2012)
- 2) 田中幹人「科学技術を巡るコミュニケーションの位相と議論」中村征樹・編『ポスト3.11の科学と政治(ポリティクス)』ナカニシヤ出版(2013)
- 3) 田中幹人(訳)「リスクの意味をめぐるコミュニケーション」, 加納圭 他編『科学技術コミュニケーション』慶應義塾大学出版局(2015) [原著: Communication and engagement with science and technology, John K. Gilbert, Susan Stocklmayer ed.] Routledge 2014.
- 4) 田中幹人「データ・ジャーナリズムの現在と課題」遠藤薫 編『間メディア社会のジャーナリズム』東京電気大学出版(2014); pp84-102.
- 5) Mikihiro Tanaka, 'Agenda building intervention of socio-scientific issues: A Science Media Centre of Japan perspective,' Yuko Fujigaki (ed.) "Lessons from Fukushima: Japanese Case Studies on Science, Technology and Society" Springer, (2015)
- 6) 【インタビュー記事】 <http://wired.jp/2011/12/30/ソーシャルメディアがもたらす、科学報道の変化/>

ジャーナリズム・メディア演習Ⅰ

2017

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
506	ジャーナリズム・メディア演習Ⅰ(中村理)	春学期	3年以上：2単位	中村 理
		2013年度以前入学	2014年度以降入学	
		政政・経演・国演	グローバル演習 政専・経専・国専	

副題 Subtitle

内容分析を中心に用いたメディア・メッセージの実証研究

授業概要 Course Outline

本演習は、メディアの送り出す情報を、内容分析を中心とする手法を用いて実証的に研究していきます。内容分析ではヒューマン・コーディングおよびコンピュータ・コーディングを採用します。そして、ここから明らかになるメディア・メッセージの傾向に、送り手へのインタビュー等を加え、多面的な研究を目指します。

新聞やテレビは日々、大量の情報を社会に発信しています。インターネットに流れる情報も今日では重要です。こういったメディアはどのような情報（メッセージ）を社会に流しているのでしょうか。対象は報道でも映画でもコマーシャルでもSNSでも構いません。そこにはこういった傾向あるいは偏向があり、その背後にはこういった情報選択があるものではないでしょうか。こういったマス・コミュニケーション上あるいはジャーナリズム上の興味をもって、メディアに流れる情報を実証的に・科学的に分析してみましょう。

そのために、この演習では量的な内容分析の手法を学びます。量的な内容分析は、どのような言葉が何回使われているか、どのような論調が示されているか、何が登場しているかを数えるなどし、発信される情報を量化するものです。こうすることで、流れる情報を客観的に扱えるようにしています。この手法は、マス・コミュニケーションやジャーナリズム研究によく見られるほか、企業が顧客のクチコミを分析してマーケティングに役立てることに利用されています。当演習では特に、ヒューマン・コーディングとコンピュータ・コーディングをともに2年の間に学びます。この手法を使って、ジャーナリズム、マス・コミュニケーション、あるいはメディア上の課題に挑みましょう。あなたの興味とやる気を、ぜひ具体的な形にしてみてください。演習の主体はあなたです。

ゼミ全体の流れは次の通りです。(1) まずマス・コミュニケーション理論とジャーナリズム史をプレ演習から演習Ⅰにかけておさらいしていきます。(2) 演習Ⅰ～演習Ⅱでは、主にヒューマン・コーディングを学び、チームワークの中でパイロット調査を立ち上げ、ヒューマン・コーディングを実践していきます。成果はいったん、まとめます。(3) 演習Ⅲ～演習Ⅳでは、はじめにコンピュータ・コーディングを学びます。同時にチームワークの中で主題を共有しながら、一人ひとりがその下で異なる副題を分担し、責任をもって取り組みます（たとえば新聞とTVを分担する、あるいはヒューマン・コーディングとコンピュータ・コーディングを分担するなど）。(4) さらに演習Ⅳの前後では、その主題に関連するなんらかの实地調査かインタビュー調査をおこないます。(5) そして以上の成果を卒業論文にまとめ、最後に発表をおこないます。

この演習では、一つの主題を複数の受講者が共有し、チームで議論をしながら協調的に作業を進める活動を主体にしています。これにより、専門性を深めるだけでなく、チームの中で目標を共有し、責任を分担して困難を克服する経験をつんでください。この経験は、将来、あなたが専門課程で研究を行ったり、職場で同僚と協調的に仕事をしたりする際に必ず役に立ちます。

授業の到達目標 Objectives

- ・実証的な調査の流れ（問題意識～仮説～調査計画～実施～結果の整理～分析～考察～結論）を経験し、その要点を学ぶ。
- ・分析力を高める。
- ・チームでコミュニケーションをとりながら協調的に作業をし、課題を解決する。
- ・マス・コミュニケーション、ジャーナリズム、メディア上のなんらかの課題に言及する。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

- 第1回：オリエンテーション
 第2回：(学習) 内容分析とは？ I：研究論文の読み込み
 第3回：(学習) 内容分析とは？ II：研究論文の読み込み
 第4回：(学習) 内容分析とは？ III：研究論文の読み込み
 第5回：(実践) 何を調べるか？ I：主題をさがす（メディア関連の論文誌・論考集・話題から）
 第6回：(学習) 内容分析の手法を学ぶI：歴史
 第7回：(学習) マス・コミュニケーション理論・ジャーナリズム史を知るI（プレ演習の復習）
 第8回：(学習) マス・コミュニケーション理論・ジャーナリズム史を知るII（プレ演習の復習）
 第9回：(実践) 何を調べるか？ II：主題をさめる
 第10回：(学習) 内容分析の手法を学ぶ II：設計
 第11回：(実践) 分析の設計 I：主題から調査項目を選ぶ～調査計画の具体化
 第12回：(学習) 内容分析の手法を学ぶ III：データソースとサンプリング
 第13回：(実践) 実作業に入る I ～試験データの入手と、調査内容の検討
 第14回：(学習) 内容分析の手法を学ぶIV：コーディング
 第15回：(実践) コーディングに向けて～変数とカテゴリの設定（研究計画書の提出・ウェブ報告）
 休暇中合宿（評価は次学期に組み入れる）
- ・（学習）何がされ、何がされてないか？：先行研究・参考文献・手法ガイド書籍の渉猟（自作演習問題の相互出題）
 - ・（実践）分析の設計 II：理論的な側面・過去の研究から主題を再検討・全体の再構成
 - ・（実践）実作業に入る II ～調査対象の仮確定／内容分析項目の検討
 - ・ウェブへの報告

教科書 Textbooks

必要に応じて授業内で提示

参考文献 Reference Books

必要に応じて提示。以下、参考まで：
 有馬明恵『内容分析の方法』（ナカニシヤ出版、2007年）
 クラウス・クリッペンドルフ『メッセージ分析の技法-「内容分析」への招待』（勁草書房、1989年）
 田崎篤郎、児島 和人『マス・コミュニケーション効果研究の展開（改訂版）』（2003、北樹出版）
 竹下俊郎『メディアの議題設定機能—マスコミ効果研究における理論と実証（増補版）』（2008、学文社）
 佐渡島沙織・吉野亜矢子『これから研究を書くひとのためのガイドブック』（2008、ひつじ書房）
 戸田山和久『論文の教室』（日本放送出版協会）

評価方法 Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	0%	試験は実施しない。レポートを実施しない場合にのみ代替として検討する。
レポート Papers	30%	20--40%。最終的に調査・分析の結果をレポートにまとめたうえで発表する。半期ごとになんらかのまとめをおこなう。
平常点評価 Class Participation	55%	授業への参加態度、課題・分析への取り組み、チームへの貢献をもとに評価する。各自が目的を持ち、主体的・協調的に作業することを重視する。
その他 Others	15%	10--20%。ゼミの運営や行事に協調的にかかわる活動を評価する。また、上記以外で特筆すべき事項がある場合に計上する。

<http://semi.on-w.com/>
<https://www.facebook.com/onwaseda/>
https://twitter.com/nakamura_semi
<http://lab.on-w.com/>

多くの場合、これから2年間、ともに学びあうことになります。信頼関係を相互に築きながら、ともにがんばりましょう。

履修に際しては、以下の要件を満たしていることが望まれます。(1)は必須です(この条件が満たされなかった場合、本演習を履修しても単位を取得することは原則としてできません)。(2)(3)は、この順で重視するものです：

(1) プレ演習の単位を取得済である(ゼミ決定が遅れるなどし、プレ演習履修の機会がなかった学生は、本演習科目の履修に際して、期間内に同内容を実施すればOKです)

(2) どの学科の学生であれ、政治学科あるいは経済学科いずれかの専門演習前提科目の単位を取得済である(国際政治経済学科の学生も、このどちらかの学科の条件をクリアしていれば問題ありません)

(3) メディア、ジャーナリズムについての科目をいくつか履修している(または、これから履修する意思が強い)

研究は主に、学生自身が次までの課題を決めて宿題を持ちより、他者と議論をしながらチームで協調的に作業をすることによって進めます。理科でいえば「実験」のようなもので、机上で考えるだけでなく自分で手を動かして自分なりのデータを分析してみたいという学生に向いています。

これまでの主題例は関連URL記載のサイトから見るができます。例として、2014年度までの担当教員関連科目で履修者がとりあげた主題は次の通りです：2011年度(1)イラク戦争開戦前後における新聞の社説、(2)松本サリン事件の新聞報道における被疑者の扱われ方の変遷。2012年度(1)新聞における痴漢事件の扱われ方、(2)米兵による沖縄少女暴行事件の、地元紙と全国紙の扱いの違い、(3)日本の原発事故に対する海外の反応と日本の新聞紙。2013年度(1)東京五輪招致決定までの報道、(2)裁判員制度にかんする報道。2014年度(1)STAP細胞問題の報じられ方、(2)死刑制度にかんする報道の論調、(3)東京五輪招致決定までの報道、(4)第2次安倍内閣の政策の報道。

欠席の際は何かの形で事前に連絡をしましょう。遅刻は欠席として扱います。半期あたり2回を超える欠席がある場合、原則として単位を取得できません(その場合は、他の評価状況によらず1―59点が最終評価として報告されます)。列車の遅延等があった場合は遅延証明(紙に記録されたもの1点、またはウェブ発行されたものと乗車記録の2点)等を提出すれば大丈夫です。就活等、事情がある場合はサポートしますので、事前に相談をしてください。

未済課題が複数ある場合も、原則として単位を取得できません(その場合は、他の評価状況によらず1―59点が最終評価として報告されます)。課題は期限をすぎて受け取ることはありません。

ゼミの運営に協力して取り組む姿勢も評価します。ゼミでおこなうイベント(ゼミオリ、合宿など)を積極的にすすめましょう。合宿は授業の延長に位置づけ、参加してもらおうものとします。

